

Another Trigger ～弓手町支部所属の攻撃手～

ティガーズ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一年半前、ボーダーと呼ばれる組織が発足したきっかけである第一次近界民大規模侵攻。

その被害、1200人以上の死者と400人以上の行方不明者の中に自らの家族の名が連なる者も少なくない。

その者らの多くは、大きく分けて二つの道を辿る。

三門市から去るか、ボーダーに入隊するか。

これは、大規模侵攻から三年間ボーダーの支部隊員として戦ってきた一人の攻撃手の話である。

# 目次

プロローグ	1
原作前	
第一話 樹神一葉①	8
第二話 樹神一葉②	16
第三話 樹神一葉③	25
第四話 樹神一葉④	39
第五話 樹神一葉⑤	47
第六話 樹神一葉⑥	62
第七話 樹神一葉⑦	71
第八話 樹神一葉⑧	89
第九話 樹神一葉⑨	97
第十話 樹神一葉⑩	108
第十一話 チーム戦①	118
第十二話 チーム戦②	142
第十三話 チーム戦③	163
第十四話 チーム戦④	184
第十五話 チーム戦⑤	200
第十六話 チーム戦⑥	216

## プロローグ

「暇だねえ」

「暇ですねえ」

夕日の暖かな陽光によってオレンジに色付いた街並みを見渡しながら、二人の女性が力を抜くように呟いた。

身長に差はあるものの、襟元を大きく開けた、近未来的な白のボディスーツを着こなす二人は側から見ても年の離れた友人とは別の何かで繋がれている仲間であることが分かる。

それもそのはずで、二人は近界民<sup>ネイバー</sup>と呼ばれるこの世界への侵略者から街を守る境界防衛組織『ボーダー』に所属するB級部隊那須隊のメンバーである。

堂々とした立ち姿に加え、腰に刀を携帯しているのが、那須隊の攻撃手である熊谷友子、その側でチョココンと座り込んでボンヤリと夕日を見つめているのが那須隊の狙撃手である日浦茜である。

本来ならここに隊長である那須玲がいるのだが、ちよつとした事情で今は別行動中だ。

いつもなら十分で一度の割合で門<sup>ゲート</sup>と呼ばれる黒い穴が発生し、そこから近界民<sup>ネイバー</sup>によって送られてきたトリオン兵が現れるのだが、今日は三十分に一度あるかないかの割合だった。

それ故に思わず二人が溢した言葉だったが、ふと別の声が二人の耳に届いた。

『二人とも、防衛任務中ですよ』

そう言って注意したのは那須隊のオペレーターである志岐小夜子。彼女は二人と違って本部内の隊室にいるものの、様々なサポートを行うべく周辺情報や門<sup>ゲート</sup>の発生区域のデータ収集、これまで討伐したトリオン兵の後始末申請などを担当している。

そんな彼女の言葉に日浦は注意されて罰が悪そうに口を尖らせた。「だって、志岐先輩、本当にトリオン兵が来ないんですもん。三十分くらい前のバムスターだって熊谷先輩一人で倒しちゃいましたし、私、全然やることないです」

『まあ、たしかに今日はすごく少ないね。本部から離れている区域にしても、ここまで<sup>ゲート</sup>門が発生しないのはほんと珍しい』

『そうだね。けど、その分、街が平和ってことだから』

志岐の言葉に同意しつつ、諭すように熊谷が続けると、日浦は「そうですね」と笑って答える。

そのような会話を交えながら、防衛任務終了までの残り一時間も頑張ろうと三人が思った瞬間だった。

『っ!? 門<sup>ゲート</sup>発生！ 発生座標はK-26地点!』

聞き慣れたオペレーターの声に、日浦と熊谷は眉をひそめて口を開いた。

『志岐先輩、なにをそんなに焦って……K-26地点なら確か、弓手町支部の防衛隊員一人が担当してたはずじゃ』

本部所属の隊員とは違い、仕事や学業を優先するものが所属する支部隊員は、基本自らの所属する支部に近い防衛地域を担当する。

本部の隊員とは別枠で見られることはたまにあるが、それでも正隊員であることは変わらない。これまで討伐してきたバムスター程度ならば一、二体は訳なく処理できる力量は持っている。

なので珍しく焦燥を滲ませた声を発した志岐に疑問を抱いたが、次の彼女の言葉に表情が変わった。

『<sup>ゲート</sup>門発生数が四、そこから出現したトリオン兵が十三体！ その全てがモールモッドです!』

『っ!?』

モールモッド。

バムスターと違い戦闘型のトリオン兵で、数体が揃えば単独での討伐が難しくなるどころか逆にやられる可能性が出てくる相手だ。

しかも、それが十三体。

熟達したB級部隊一個で何とか倒せる数だ。

更に言うと、出現した場所が悪い。警戒区域の端であるため、一歩間違えれば居住区にトリオン兵が流れてしまう。

「茜っ！ 行くよー!」

「はいっ!」

急に何故大量に、しかも戦闘型トリオン兵が現れたかという疑問をそつちのけに、二人は建物の上から跳んで、屋根を伝いながら発生地点へと向かう。

全力で向かっておよそ三分ほどの地点。

それまでに耐えてくれと願うが、それは難しいだろうと二人は思う。

トリオン兵も戦闘型となれば数が揃った時の連携方法がプログラムされている。銃手ガンナーであれば距離を保ちつつ時間稼ぎの仕様があるが、今日担当していると聞いているのは攻撃手アタッカー。

マスタークラスであれば話は少し違うだろうが、鈴鳴と玉狛以外の支部所属隊員にマスタークラスがいるなど聞いたこともない。

つまり、その隊員が自分たちの到着前にベイルアウトするのはほぼ確定事項。視線の先で光の筋が登るのも時間の問題だ。

『近くの荒船隊も向かっているそうです！　ただ、到着するのは私たちよりも少し後のようです』

その報告を受けて、僅かに速度の緩んだ足を再び加速させる。

「茜！　私は先に行く！　茜は狙撃ポイントに着き次第攻撃開始！

小夜子は狙撃ポイントを調べて、茜を案内ナビゲートして！」

「は、はいー！」

『了解』

トリオン体での運動能力に個人差はないが、それを引き出せるかどうか本人の運動神経と経験による。

男子と遜色ない運動神経を持つ熊谷は必死に付いてきていた日浦の事は考えず、自身の出せる最高速度で駆け抜ける。

間に合え、間に合え、と心の中で何度繰り返す。

元の肉体であつたら有り得ない速度で屋根を踏破していく熊谷。

そうして、ようやくたどり着いたそこには倒壊した家屋の数々。重量に耐えかね潰れた家や、鋭利なもので切り裂かれた道路や石垣があり、その先には――

「え？」

丁寧に目だけを切り裂かれた、十体のモールモツドの残骸があつ

た。

◆? ◆? ◆?

先ほどまでの慌てぶりも忘れて、熊谷は目の前の光景に驚愕する。建物の数々が崩れ、道が荒らされているのは分かる。モールモッドが十三体もいればここまでの被害を出すだろう。

だが、その先で倒れている十体のモールモッドは完全に予想外だ。門が開いて、まだ二分と少し。その間にここまで素早く十体ものモールモッドを処理できるなんて……。

「いや、それよりも」

ここに来た目的を思い出して、意識を切り替える。

目の前で十体のモールモッドが倒れているが、もしかしたらギリギリの状態かもしれない。

そう考えて、熊谷は更に荒れている奥へ。

途中、モールモッドのブレードが切り取られ、そのブレードが目に突き刺さってるのを見て足が一瞬止まったが、すぐにまだ見ぬ戦闘中の防衛隊員の援護へ向かう。

そして、見つけた戦場。そこには、裏返ってピクリともしなくなっているモールモッド一体と、無傷のモールモッド二体、その二体に向かい合うように立つ男の姿があった。

少し癖のついた黒髪に、スラッと伸びる手足。目算で身長は180cmより少し高いぐらいだ。

その男の後ろ姿を見て、熊谷は小さく言葉を零す。

「……無傷?」

そう、得物一つ持っていない男にはトリオン漏れの様子もなければ、攻撃を受けた跡もない。

ただモールモッドを見据えながらも、構えらしい構えを取らずに自然体でいる。

その時だ。

「ん?」

男が熊谷の存在に気づいて、横目に彼女を見る。

整った顔をしていた。優しい目だった。だが、無表情のためか優しさよりも先にクールといった雰囲気を感じ取られる。

熊谷がそう思うやいなや、それを隙と見たモールモッドの一体が男に向かつて突っ込んできた。右のブレードを振りかぶり、敵の身体を切り裂こうとする姿に熊谷は咄嗟に彼の前にシールドを貼ろうと右手を掲げる。

だが、それよりも先に男が動いた。

襲いかかってくる右のブレードに合わせるよう右腕を挙げると、次いでブレードがぶつかる。

キイイン、というブレードとブレードがぶつかるような音がしたと思うと、男はブレードを右から左へ流すように受けて回転、その勢いのまま左回し蹴りを放つ。

もちろん、それだけではモールモッドの弱点である目に届かないが、振り切る瞬間に踵からブレードが出現し、目を断ち切った。

熊谷はその動きを見て、思わず目を見開く。

モールモッドのブレードを右腕で受け流したのに驚いた訳ではない。

おそらく、ブレードを受け流した右腕には『スコープオン』と呼ばれる出し入れ自由自在のブレードを沿わせて防いだのだろう。

熊谷が驚いたのはカウンターの速度と精度だ。

そもカウンターとは、相手の攻撃に合わせて自らの攻撃を重ねる、もしくは受け流して攻撃することを指す。カウンターの上手い者であれば、受け流す際に相手の態勢を崩すこともできる。

熊谷は『孤月』と呼ばれる刀型トリガーを得物とし、そのカウンターを得意としている。

故に今のカウンターの速度、つまり、受けて返すまでの速さに驚きを隠せない。

ほとんど同時なのだ。

そして、その速さでありながら、急所を正確に攻撃している。

それを見て、決して自分で受けたわけではないが、熊谷は自分の背



中に冷たいものが走ったのを感じた。

ほんの一秒ほどの攻防で決着がつき、崩れ落ちるモールモッド。

急所を攻撃され、二度と動くことないその身を地面につけた瞬間――

「っ！」

まるでトランポリンのように弾んで、もう一体のモールモッドの方へ飛んでいった。

熊谷は一瞬何が起きたか分からないといった顔をしたが、すぐにその仕組みを理解した。

「グラスホッパー……」

モールモッドが弾んだ地点にあったのは、水色をした正方形型の足場を作るトリガー『グラスホッパー』と呼ばれるものであった。

これは上に乗ったものを例外なく加速、見方を変えればふつ飛ばすトリガーであり、機動力を重んじる戦闘員が用いられることが多い。

だが、それをこのように使うとは考えもしなかった。

そもそもいつのまにグラスホッパーを出したのか。

それを見たわけでないが、タイミング的に回し蹴りを放った時に左手で発現させたのだろう。

重ねて驚愕する熊谷とは別に、モールモッドは落ち着いていた。

自分に飛んでくる味方であった残骸を目視すると、素早く横にスライドして避ける。人間と違い、プログラムという絶対の命令で動いているモールモッドだからこそ迷いなく選択できた行いだ。

しかし、それは結果的に悪手であった。

横に避けた瞬間、スコープピオンのブレードがモールモッドの目を貫いた。

男は動いていない。ただ、彼の右手から生えるようにスコープピオンが伸びていた。

『マンティス』と呼ばれる、本来の間合いを大きく伸ばすスコープピオンの応用技だ。

二本のスコープピオンを繋げて操るそれは扱いが難しいため、本部の隊員でも好んで使っているのは影浦ぐらいだ。

それを、支部所属の隊員が用いるなんて……。

『く、熊谷先輩、狙撃位置についたんですけど、私、もういらないうすかね』

「え、ええ。私達、来た意味なかったみたい……」

日浦の声が無線を通じて聴こえる。

それに僅かにどもりながらも返すと、十三体全て一人で殲滅した男が不意に熊谷の方を向いた。

「救援信号、俺、間違えて送ってたか？」

同じ防衛隊員であるのに、少し身構えてしまった熊谷に掛けられた言葉は純粋な疑問を含んだものであった。

「……いや、援護が必要と、私達が判断して来た」

「そうか。手数をお掛けした。持ち場に戻ってくれ」

そう言つて、男は元の持ち場に戻ろうと踵を返す。

しかし。

「待って」

「……なんだ？」

熊谷の言葉に歩みを止め、首だけで振り向く。

その様子に熊谷は少しだけ怯むが、すぐにグツと持ち直して、問う。

「貴方の名前は？」

男は少しだけ訝しげに眉をひそめるが、一息をついて答えた。

「樹神こだまいちよう一葉」

## 原作前

### 第一話 樹神一葉①

俺こと、樹神一葉の朝は早い。

朝の六時に起きると、顔と歯を洗うべく洗面台に直行する。

そこで顔と歯を洗い終わると、次に台所へ向かい、洗い終えて乾かしている三つの弁当箱を手取る。

一つは俺のもので、残りの二つは俺の無機質な弁当箱と違い、一回り小さく薄いピンク色をしたものだった。

この二つは、中学二年生と中学一年生の妹二人の分だ。

俺はそれらに付着している水分をキッチンペーパーで軽く拭き取ると、テーブルの上に並べる。

その後、炊飯器に洗った米をセットしてスイッチを入れ、冷蔵庫から食材を取り出すと三人分のおかずを作り始める。

「休日間に仕込んでくと、やっぱり楽だな」

そうしているうちに七時になり、トタトタと階段を降りてくる音が聞こえた。

俺はそれに反応して、卵焼きや小ぶりのハンバーグといった出来立てのおかずをテーブルに運ぶと、ちょうど二階から降りてきた人物がリビングに姿を現した。

「おはよ、兄貴」

そう挨拶しながら入ってきたのは、僅かに癖付いた髪をボーイッシュに短く整え、中学の制服をまとう少女。成長期に入り女の子らしい体つきに移行し始めてるこの少女は、兄の俺から見ても美少女だと樹神二葉。

それが樹神家の長女の名だ。

「おう。おはよう、二葉」

二葉は俺の挨拶に微かに笑みを浮かべると、テーブルに置かれたおかずを見て目を輝かせる。

「ハンバーグあんじゃん。やった」

「まだそのおかず熱いと思うから、もう少し冷ましてから弁当に詰めてくれ。あと、ご飯も頼む」

「了解」

そのやり取りを最後に二人は口を閉じると、俺は使用した調理器具を洗い始め、二葉は炊飯器から熱々なご飯を冷ますため大きな皿に取り出し始めた。

少しして、二葉は皿に三人分のご飯をよそい終わると、それをテーブルの上に置いて、先程出てきた扉の方へ向かった。

「それじゃあ、弁当詰める前に二葉を起こしてくる」

「ん、分かった」

視線は洗い物に向けたまま返事をすると、二葉が階段を駆け上がっていく音が響く。

俺はというと、洗い物を終わると一階の自室に戻り、高校の制服に着替え始める。今の季節は夏なので学ランを着る必要もなく、高校三年生にもなったため着替えるのは慣れたものだ。その際に身だしなみを整え、あらかじめ勉強机の上に用意しておいた学生カバンを持って、再度リビングに戻った。

およそ五分ほど経ったと思うが、リビングに二人の妹の姿は無いどころか、階段を降りてくる音も聞こえない。

俺はそのことにまたか、と小さく息を吐いてから、次女の部屋に行くべく階段を登り始めた。

二階に登って、突き当たり右の部屋が長女である二葉の部屋で、その反対が次女の部屋だ。

そこに近づく度に、二葉の早く起きろ、早く起きないと兄貴が怒るぞー、怖いぞー、といった声が聞こえる。

そのことに苦笑いを浮かべつつ、次女の部屋の扉を開けた。

「ほら、兄貴が来たぞー」

「ん〜……」

ベットの側で座り込み、妹を起こそうとする二葉とベットの上で布団を抱きしめるように寝ている少女が部屋の中にいた。

二葉のシヨートとは違い、セミロングの頭髪をベットの上に散らし

ながら愛らしい寝顔を晒すこの少女は二葉と姉妹とあつて美少女である。

樹神三葉。

それが樹神家の次女だ。

「三葉、起きろ〜」

「ん〜、やあ」

そう言うと、寝言とはいえハッキリと拒絶の言葉が彼女の口から吐き出され、俺は二葉の方を見る。

二葉は肩をすくめて、困った顔をしていた。

それを見て、俺は仕方ないとため息をつくと、続ける。

「早く起きないと、日曜日の買い物置いてくぞ」

「っ！ やだ！」

カツと目が見開かれ、まるで弾かれたように三葉の身体が起こされる。

俺と二葉はその様子を見て思わず苦笑いを浮かべると、俺は三葉の頭を撫でた。

「さ、朝ぐ飯食べるぞ」

◆？ ◆？ ◆？

樹神家の食卓に俺と二葉、三葉が並ぶ。

ここに母親と父親が並べば普通の家庭と言えるが、俺たちに両親はいない。

四年前にあつた近界民による大災害、第一次近界民侵攻。その時にうちの両親は妹二人を庇って命を落としたからだ。

当時の俺は中学二年生。今となつては家や金銭的なことはある程度自分で回しているが、その頃は俺も両親を亡くして傷心しており、正直ほかのことは何も見えていなかった。

そんな俺が今こうして生活し、妹二人と笑えているのは、おばあちゃんのおかげだろう。

おばあちゃんは俺たち家族と一緒に住んでいる、いわゆる二世帯住

宅だったが、あまり俺たちの家族の生活等には口出しはせず、側から見守っている人だった。

しかし、両親が死んだ時から人が変わったかのように俺たちに厳しくなった。

羨はもちろん、勉強や料理といった様々なことまで見るようになり、間違ったことをする度に静かに怒る。特に俺に対しては、そういった羨以外にも税金の払い方や家計の回し方、生活するにおいて大事なことを教えてくれた。

両親が死んだことによる毎月の国からの補助金と保険金には一切手をつけず、自分が子供たちに残そうとしていた貯金からお金を切り崩して、生活費に当てる。

俺には中二からバイトをするよう諭し、貯金するように言い聞かせた。俺はそれに従い、バイトを始めてそれらを貯金に回した。

学生生活とバイトの両立に忙しい俺を見て、一度、今は県外に引越してしまった当時の友人に言われたことがある。

他の皆は普通の生活を送っているのに、何故俺はこんなに頑張らなければいけないのか、思わないのか?、と。

そういった疑問は特に抱かなかった。

というより、長男だから頑張るべきだと思っていた。

おばあちゃんからも、私が死んだら妹二人を守るのは長男の一葉だけなんだよ、と言われ続けていたから。

プレッシャーに感じていなかったわけではない。ただそれ以上にそれは俺が頑張らなくてはと思う理由になっていた。

これまで両親には他の子供よりも自由に好きなものをさせてもらって、好きなものを買ってもらっていた。

そのぶん頑張らなくては、と。

そうして高校に入ってバイトを増やし、妹たちも両親の死に一区切りついた二年後だ。

おばあちゃんが死んだ。

早朝に心筋梗塞で急死してしまったため、遺言に何かしら言われたわけではないが、その前の晩、妹二人が寝静まった頃に言われたこと

がある。

苦勞をかけてごめんね、と。

生き残ったのが私でごめんね、と。

高校生なのにこんな重荷を背負わせてごめんね、と。

これまで厳しく接して、辛い思いをさせてごめんね、と。

今まで一つも弱音や泣き言を漏らさず、正しかったおばあちゃんが目に涙を浮かべてそう言った。

今思えば自分の死期を悟っていたからこそその言葉だったのだと思うが、当時の俺はひどく激昂した。

ふざけるな、と。

この二年間、誰が俺たちを育ててくれた、と。

両親を亡くした俺たちに愛情をくれたのは誰だ、と。

生きる術を教えてくれたのは誰だ、と。

全部貴方だ、と。

——だから、そんな悲しいことを言わないでくれ。

俺は途中から泣きながら、叫んだ。

妹たちが寝ているのも忘れ、おばあちゃんに向かって声を荒げた。

終いには言葉にならず、ただただ嗚咽をこぼすばかりとなり、視線を下げて涙を拭う。

不意に、暖かいものに包まれた。

一瞬遅れて、それがおばあちゃんの抱擁によるものだと気づき、涙を拭う手が止まった。

耳元で声がした。

——ありがとう。どうかいつまでも健やかに。二人をお願いね。

その言葉に小さく、そして短く、任せて、と答える。

この六時間後におばあちゃんは亡くなった。

「? どうしたの、お兄ちゃん?」

「え……ああ。何でもないよ。少しブーツとしてただけだ」

「そう?」

昔を思い出して、少し涙が浮かんだ俺を見た三葉が疑問を投げて、俺が誤魔化すように笑う。

三葉は少しだけ困惑した顔を浮かべて朝ご飯であるパンに目を向けたが、横目にこちらを見つめていた二葉は悲しそうな目をしていった。

まいったな、心配させてしまったか。

俺は苦笑いを浮かべてパンを一気にかきこむと、「ごちそうさま」といって、先程中身を詰め込んだ弁当をカバンに入れ、持ち上げた。

「それじゃあ、行ってくる。家を出るときの鍵の施錠と洗濯物、洗い物を頼むな。今日も帰るの夜の九時ぐらいになると思うから、ご飯まで待てなかったら棚のおやつを食べていいからな」

そう言うと、俺は早足に玄関へと向かい、靴を履いた。  
だが。

「兄貴、ちょっと待って」

「ん？」

呼ぶ声に振り向くと、二葉が俺を追いかけてきていた。

俺が何事かと彼女に寄ると、二葉は俺の耳元に顔を寄せて言った。

「兄貴、辛かったら私達にいつでも言うんだぞ。兄貴みたいに家のこと全部なんて言えないけど、ちよつとでも、ほんのちよつとでも手伝えるなら私たちも……」

それ以上言葉は続かなかった。

俺は一度二葉の肩に手をやり、体から離すと笑って口を開いた。

「何を言ってるんだ。もう十分に手伝ってもらえてるよ。俺が九時に帰ってきて、十二時前に寝れるのは、お前たちのおかげなんだぞ？」  
なるべく安心するように笑顔を浮かべてみせたが、二葉の表情は変わらず心配そうな顔をしていた。

それを見て、どうしたものかと頭の中で考えを巡らせる。

原因は明らか、完全に先程俺が浮かべた表情のせいで、二葉に不安を与えてしまったのだ。

どうにか元気を出そうと言葉を選ぶが、そう簡単に出てくるものではない。



そうして考えること五秒。ふと二葉が視線を落として呟いた。

「兄貴……私は、兄貴の苦しそうな顔を見るのは、すごく、辛い」

予想外の言葉に、思わず目を見開いてしまう。

その言葉は、先程リビングで見せた二葉の表情を的確に表した言葉であり、俺が絶対に見せないよう心掛けていた表情で、そして――

「二葉」

「？」

「――俺も、お前たちが悲しそうな顔をするのは、ものすごく辛いよ  
そこまで言うと、乱暴に二葉の頭を撫でた。

キヤツ、と可愛らしい悲鳴が二葉の口からこぼれるが、驚くのは最初だけで、そのあとは成すがままにそれを受け入れる。

俺は撫でたまま、続けた。

「だから、笑顔でいよう。俺たちは、普通の家庭とは違うし、俺もお前  
らも苦労してるけど、俺はそれを辛いと思ったことは一度もないよ。  
帰ったら二葉と三葉の顔が見れて、目が覚めたら二人におはようって  
言える。それだけで俺は十分に幸せだ。その日々のためなら、俺も頑  
張れる。二葉は違うか？」

俺の問いに、二葉は小さく首を横に振った。

「だろ？ だから、笑顔だ。今回は俺が悪いけど、俺はお前らに笑顔で  
いてほしい。お前らが笑顔なら、俺も笑顔になれる。だから、さ」

俺は撫でていた手を外して、精一杯の笑顔を浮かべると――

「いってきます」

そう言った。

それに少し呆けた表情を浮かべた二葉だったが、俺の顔を見ると、  
いつのまにか溢れていた涙を拭い、笑顔を浮かべて返した。

「いってらっしゃいー」

俺は二葉の笑顔を見て満足そうに頷くと、次いで彼女の後ろに目を  
向けた。

「三葉〜！ いってきますー！」

「うん！ いってらっしゃいー！」

いつのまにか玄関のすぐそばにいた三葉は、俺の声に反応して駆け

寄ってくるハイタッチを交わした。

それを見て、二葉が驚きの表情を浮かべる。

三葉がすぐ後ろにいたことに気づいていなかったんだろう。

次いで二葉は自らの少し赤くなった目と涙の跡に気付き、三葉にバレてはマズイと思ったのか洗面台に走っていった。

「お姉ちゃんとかあったの?」

「うん? いや、なんでもないよ。トイレじゃないか?」

「ふん」

三葉はあまり納得のいつていない表情をしていたが、俺は再度いつてきますと言うと、玄関の扉を開けた。

いつてらっしゃい、と後ろから声がかかり、首だけ振り向いて手を振りながら扉を閉めた。

「さて、今日も頑張りますか」

そう言つて、俺はいつもの通学路を歩き始めた。

## 第二話 樹神一葉②

「俺のトリオン量、増えたか？」

昼の二時過ぎごろ。

<sup>ゲイト</sup>門から現れたモールモッド二体を慣れた手つきで撃破した後、俺は小さく呟いた。

俺がメインに使っているこの『スコープイオン』というトリガー。形を自由に変えられ、出し入れも自在、剣として使うのも身体のどこに生やして使うのも思うがままのトリガーであるが、その分脆いという欠点がある。

俺がボーダーに入隊した三年半前の当時、正隊員になるためランク戦にのめり込み、家族にも迷惑かけないよう土曜と日曜の二日でB級へ上るための条件である4000Ptを達成した時のスコープイオンの硬度は今も覚えている。

なりふり構わず、それでいて必ず勝つためにスコープイオンの強度を正確に把握しようとしていたのだから当然だ。

まあ、正隊員になつたら直ぐに家に近い支部に転属願いを出したからそれ以降ランク戦には顔を出していないが、今はそれはいい。

最近感じてたスコープイオンの違和感。

それを確認するためにワザと相手の攻撃を受けたり硬い部分を狙って攻撃していたのだが、スコープイオンが壊れる様子がないのだ。

それを見て、俺は確信する。

あきらかにスコープイオンの硬度が上がっている。

それに伴っての理由は、俺のトリオン能力の向上が真っ先に上がるわけだが――

「(スコープイオンの硬度、体感で二倍ぐらいになつてるんだが。ここまですりオン量が向上することなんてあるのか?)」

基本身体に生やす形でスコープイオンを使っている俺だが、珍しく剣の形でスコープイオンを型どり、軽く振るってみる。

相変わらず随分と軽い。

これがモールモッドのブレードを五度防いでもヒビすら入らない

硬度だなんて誰が信じるだろうか。

「今日の防衛任務は、たしか七時までだったな。現状把握のために、本部に寄ってトリオンを計測してもらう時間はあるか」

そう言っただけで時間計算する俺は今日一時から七時まで防衛任務に着いている。

もちろん今日高校があったが、防衛任務のために昼に早退してきたのだ。

また、今日に限らず、平日は基本防衛任務を理由に昼に早退している。理由は単純明確で、よりお金を稼ぐために防衛任務を昼過ぎに入っており、月曜と木曜に限っては五時に防衛任務を終了して五時半から九時まで他のバイトを入れている。

高校入学時は昼に早々と高校から出て行く俺を嫌な目で見てくる先生もいたが、毎回の定期テストでは進学校であるうちの校内でぶつちぎりの一位を取り、模試でも全国百位以内の学力を維持しているため、しばらくするとそういう目をしてくる先生はいなくなり、逆に頑張れよと応援してくれる先生が増えた。

たまに成績維持の努力を怠るな、と言ってくる先生もいるが、俺も将来は大学進学し、学費全額免除を狙っているため成績を落とすつもりはさらさらしない。

俺は手に持っていたスコアピオンを消し、視線を左に向けてポーター本部を見据えると、防衛任務終了したら二十分で本部に行こうと決意した。

◆? ◆? ◆?

「よし、到着」

防衛任務終了後、社会人の支部所属隊員と持ち場を交代すると、支部長に本部に向かう旨を無線で連絡して、本部まで全力疾走。結果、七時十五分と予想よりも早い時間で着くことが出来た。

グラスホッパーを使って加速したのが功を成したのだろう。

俺は軽く服をはたくと正面入り口から本部に入り、古い記憶から

ボーダー内の地図を引つ張り出して、廊下を進み始めた。

義務的にトリオンを計測するのは入隊時だけだが、C級ランク戦ブースの奥に任意にトリオンを計測してくれる部屋があったはずだ。そんな記憶を頼りに、着々と歩を進めて行くと、急に人の行き来が増えたことに気付く。

行き交う人の殆どが訓練生であるC級隊員だ。当たり前だがその大半が学生で、今が放課後という自由な時間であるため、これほどの人数がいるのだろう。

「だけど、まあ――」

「(こつちをチラチラ見てくるのは、ちょっとやめてほしいけどな)」  
僅かに苦笑いを浮かべつつ、俺は小さくため息をつく。

恐らくここまで奇異な目で見られるのは、俺が正隊員であるのにもかかわらず全く見たことのない顔だからだろう。

その視線に俺は居心地の悪さを覚え、無意識のうちに早足になって廊下を進む。

暫くすると、広い空間に出た。

横に長いその空間は壁に個室がいくつも設けられ、そこへ至るための階段が取り付けられている。その部屋の数はおよそ二百ほど。

さらにその真ん中には大きなモニターが取り付けられており、ご丁寧にそれに向かうよう観賞用のソファアがいくつも設置されていた。

C級ランク戦ロビー。

それがこの施設の名前だ。

俺はその光景に懐かしさを覚えながら、止めていた歩みを再開。

ソファアに座って雑談をしている者、モニターを見ながら何やら真剣な表情を浮かべている者、自分の右手の甲に視線をやったため息をついている者、逆に嬉しそうに頬を緩めている者、と様々な模様の訓練生の姿が見える。

ここにいる者の大半は正隊員になるべくポイントを取ろうとしている者だろうが、思いの外ポイントが伸びず悩んでいるようだった。ふと、モニターの方に視線をやる。

そこには3562ptのスコアピオン使いの隊員と3844pt

の『アステロイド』と呼ばれる射撃用トリガーを突撃銃で使用する隊員の試合が映っていた。

スコープオンの剣を持った隊員が次々と飛んでくるアステロイドの弾丸を避け、手に持った剣で防ぎ、着々と距離を詰めている。

突撃銃を用いて弾丸を連射する隊員は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべており、スコープオンを使う隊員は笑みを浮かべていた。

この試合はスコープオンの隊員が勝つだろうな、と思いつつ、前からずっと検討していた考えが頭の中を過った。

「そろそろ、俺も対人戦の訓練もしようかな」

右腕を持ち上げて、右手の甲に視線を落とす。

今は見えないが、三年半前の最後にそこに浮かんでいたのは『4013』という正隊員の条件ギリギリの数値。

「支部所属とはいえ、トリオン兵ばかりと戦闘をするのは違うよな。よし、トリオンを測ったら軽くランク戦やってみるか。今の自分の力量をはかる良い機会だ」

そう心の中で決めた俺はロビーの奥に進み、トリオン計測室なるところに入った。

中にC級隊員はおろか人っ子一人おらず、また奥に部屋があるようだが机で先に進めないようにされている。

俺は少し音量を上げて、奥にいるであろう職員を呼ぶ。

「すみません。トリオンを計測したいのですが」

「おう。ちよいと待ってな……ん？ 正隊員か？ 見たことない顔だが」

部屋の奥から返事が聞こえたと思うと、すぐに声の主は奥から姿を現し、俺を見て驚いたように眉を上げた。

「はい。弓手町支部所属の樹神一葉と申します」

「ほう、支部所属の正隊員がここに来るとは珍しい。トリオンを計測したいなら弓手町支部でも出来るんだが……まあ、それはいいか。それじゃあ、早速この棒を握っといてくれ。計測する」

「はい」

少し顔にシワが浮かんでいる、見た感じ技術職であろう男性は棚か

ら機械を取り出すと、一本の棒をこちらに渡した。

俺は男性の言う通りに棒を握ると、男性が機械を操作し始める。数秒ほどの沈黙。

そして、ピー、と計測完了のような音が響くと、男性は数値が示されているであろうパネルを見て、

「はあっ!？」

驚愕の声を発した。

「どうしたんです?」

「え、いや、はあ? この数値って……」

恐る恐るといった感じでパネルをこちらに見せる男性。俺はそれを見ると、僅かに笑みを浮かべて口を開いた。

「やつぱり、以前よりも二倍近くになってたか」

そのような納得の声をこぼした俺とは対照的に、男性はブツブツと独り言を繰り返していた。

「この数値は……出水くん、いや二宮くん以上の……上に報告すべきか? すべきだろうな。だが、しかし、支部所属の隊員が、まさかこんなトリオンを……」

聞いたこともない名前に首を傾げつつ、俺はここから立ち去ろうと踵を返して言った。

「それじゃ、ありがとうございます」

「え、あ、ああ」

いまだ呆然としている男性職員を置いて、俺はロビーの方に戻ると早速ランク戦を試してみようと空いているブースを探し始める。

一番下の列の部屋は既に埋まっており、ここから一番近い空いている部屋は階段を二つ登った293号室だった。

そこに向かうため階段を上りつつ、俺はロビー内に設置された時計を見る。

「大体七時三十分。八時には出たいから、時間的に出来るのは五、六試合ぐらいか?」

そんなことを呟いた後、階段を上りきって293号室に入ると、次いで部屋内に設置された椅子に座って、対戦用パネルに手を当てる。

瞬間、機械がこの部屋を使用するのが正隊員であることを読み取り、訓練生であるC級隊員を抜いた対戦リストを提示した。

「アステロイド、バイパー、孤月、ハウンド、孤月、スコープオン、メテオラ……色んなトリガー使いがいるけど、ポイントがなあ」

俺はリストにのぼったトリガーの名前を口に出しつつ、その隣に記されたポイントを見て苦笑いを浮かべる。

大体が俺と同じ四千台か五千台。その者達を侮っているわけではないが、今回は俺の力がどこまで通じるかを試したいと思つてのランク戦だ。出来ることなら六千台以上、欲を言えばマスターレベルである八千台の相手と戦つてみたい。

そう考へてはいるものの、今リストにあるのは六千以下の者たちばかりだ。

俺は仕方なさげに一つため息をつくとき、この中で一番ポイントの高い5723ptの孤月を扱う321号室の人と戦おうとパネルに手を伸ばした、その瞬間だった。

「ん？」

新たな部屋番号が一番下に追加される。

一応確認のために使用トリガーと所持ポイントを見ると、次いで驚愕。

孤月の8921pt。

俺が相手したいと思つていたマスターレベル、しかも俺と同じアタッカーだ。

これ幸いと俺は笑みを浮かべて、その部屋番をタッチして、対戦申請を送る。

訓練生同士のランク戦とは違い、正隊員同士の模擬戦は双方の合意で行われるため、事前に対戦の約束をするか、こういった形で片方が対戦申請を送る必要がある。

勿論後者の場合断られる場合もあるが、そうなったら仕方ない。向こうに先約がいたか、あまりのポイントの低さに相手すらされないか、だ。

しかし、その心配は杞憂に終わった。



着信音が部屋の中に響く。

最初は携帯かと思ったが、すぐに違うことに気づいてパネルの方を見た。

パネルの左端の方に、通話マークと番号が表示されていた。

これは各ブース同士の通話を可能にする機能で、使用するとこのように掛けてきた部屋番号と通話マークが表示される。

部屋番号は、やはりというか、先程対戦を申し込んだ相手がいる部屋番号だった。

俺は通話マークを一度タップして、挨拶をしようと思いを軽く吸おうとするが――

『十本以上の勝負なら受けます。それ以下ならやりません』

女の声だった。

だが、挨拶もなしに条件を突きつけるその声には不機嫌な色を隠しきれておらず、明らかに此方を下に見ているようだった。

まあ、自分のポイントの半分もいかない相手から試合を申し込まれたら嫌な思いもするか。

俺はそんなことを思いながら、パネルの右上に表示されている時間を見ながら、一本ごとの試合時間を計算して八時までに終わることが出来るかを計算する。

ほかの人とは対戦できなくなるが十本勝負はできそう、という結論に至り、俺は口を開いた。

「十本勝負で頼みます」

『……分かりました。ボコボコにされて、途中で嫌になっても知りませんから』

その会話を最後に、通話が終了する。

数秒して、先程の通話相手から対戦申請が送られてきた。内容は市街地ステージでの十本勝負というものだった。

俺は即座に了承すると、部屋内に機械音声らしき女性の声が響いた。

『個人ランク戦。ステージ「市街地A」。十本勝負。転送開始まで、あと十秒』

俺は大きく身体を伸ばすと、次いで脱力。  
およそ三年半ぶりの個人ランク戦だ。

俺は緊張で少し早くなつた鼓動を落ち着かせるように深呼吸を一つ。  
そして。

『……三、一、一。転送開始』

瞬間、視界が白に覆われ、すぐに晴れる。

その久しぶりの感覚に俺は小さく笑うと、次いで周りを見渡す。

そこはもうブースの中ではなく、街の中だった。

ビルといった巨大な建物、飲食店、スーパーといったものはなく、ただの居住区といった風景。

俺は感覚を確かめるように両手を開閉しながらそれらを視界に収めると、俺の正面十メートル先辺りの空間が歪んだ。

そこに人のシルエットが映し出されると、今回の対戦相手である人物が現れた。

「……中学生か？」

その人物、予想よりも一回り小柄な少女の姿を見て、俺はわずかに眉をひそめて呟く。

此方を見つめる鋭い目つき、ツインテールとは言い難い二つ結びの髪型。身長が低いいため、腰に帯刀しては地面に当たるためか得物である孤月を背中に帯刀している。

二葉より少しばかり小柄とはいえ、美少女ばりに整ったその顔を見るとそれとなく大人びた雰囲気を感じる。

「なんですか？」

ふと目の前の少女が俺の視線に気づいて、不愉快そうに顔を歪める。

俺は思春期の女子に対して配慮がなかったかと思い、頭を下げる。

「ジロジロ見て悪かった。マスターレベルのアタッカーが女子中学生だとは思わなかったんだ」

言い訳まじりにそう謝ると、彼女は興味なさげに視線を横にそらし、ため息を一つ吐いて「そうですか」と呟くと、背中から孤月を抜

刀し、構えた。

「それでは、よろしくお願いします」

「こちらこそ」

挨拶も交わし終えたので、俺も意識を切り替えて敵を仕留めることに集中する。

向こうもそんな俺の雰囲気の変化を感じたようで、少し驚いたように眉を上げる。

しかし、直ぐにそれを収めると、こちらを見据えつつ孤月を横に倒す。

そして、俺はまずは小手調べと攻撃を行うべく一歩前に進めようと

「韋駄天」

そんな小さな眩きが耳に聞こえた瞬間、俺の首に鋭い衝撃が走った。

### 第三話 樹神一葉③

小学六年で正隊員となり、入隊直後に行われる対近界民戦闘訓練では11秒というスコアを叩き出したスーパールーキー、黒江双葉。

持ち前のセンスで個人ランク戦を勝ち上がり、僅か半年でマスターレベルに至った彼女は、当時A級八位であった加古隊の隊長である加古望によりその才能を買われ、ボーダーの精鋭であるA級隊員となった。

まさにスピード出世。主に高校生の隊員が多い中、中学生が、しかも女子が、という僻みはあったものの、加古に言われた「所詮負け犬の遠吠え、才能がない者の妬みよ。気分を害するのは当然だけど、むしろそこまで言われる自分を誇りなさい」という言葉に感化され、周りがどう言おうと気にしなくなった。

そんな黒江双葉だが、今日この日はいつも仏頂面である顔に不機嫌の色が強く浮かんでいた。

別に上の先輩らから陰口を言われていたことは気にしていない。大した実力もない者に言われる言葉など気に止めることもない。

不機嫌の原因は我らが隊長である加古が大学のチャラ男達の相手をするためにボーダーに来ていないことだった。

一時期は狂犬とまで言われていた黒江が唯一心を許し、今も一番懐いている加古望だが、彼女はその美貌のため大学のチャライ先輩らに色々と目をつけられてしまうことがあるらしい。一緒にいることが多い黒江もそれらに対する愚痴を聞いたことは一度や二度ではない。もちろん、通常であれば加古もやんわりと断るか、キツパリと断ることぐらいするが、狡猾なことにそのチャラ男達は加古が世話になっている先輩の女性を使って誘ってきたのだ。

加古はマイペースを地で行くタイプであるが、世話になっている先輩の願いを断るほど非常識ではない。

黒江への謝罪と今回でケリをつけるという意思表示をメールで受けた黒江は気にしないでくださいと返信したが、それは加古を氣遣って送信したものであるため、実際は別。いつもなら挨拶する相手が黒

江の様子を見て口を閉ざすぐらいには不機嫌に見えるほどだ。

そんなイライラを払拭するため、黒江は個人ランク戦ロビーにやってきた。白玉あんみつとミカンに並んでランク戦に勝つことが好きな黒江の最近のストレス解消は決まってこれだ。

簡単に言えば、嫌なことがあったから人に当たるといったものだが、第三者から見ればそれもただの模擬戦であるため特に問題は無い。あるとすれば、対戦相手の心を折ってしまい、ボーダーを辞めた者も少なからずいるといった点だ。

もちろん、そんなことは憂さ晴らしが目的の黒江も本意ではなく、なるべく負けん気が強い相手や格上との対戦で勉強する者などを狙うようにしている。

さて、そんな黒江だが、今回ばかりは虫の居所が最悪に近かった。

彼女は早足に個人ランク戦ロビーにやってくる、辺りに目を向けることなく空いているブースへ入る。そして、パネルに目を向けて誰でもいいから個人ランク戦を行おうとして――

「？」

個人ランク戦の申し込みが来た。

たった今入室したばかりの黒江は、そのことに小さく首を傾げてその相手を見ると、顔をしかめた。

4000ptギリギリのスコアピオン使い。

おそらくC級から上がりたてのB級隊員だろう、と黒江は予測した。C級からB級に上がった者はそれまでほぼ同レベルの相手として戦闘を行っていなかったため、格上の相手がどれほどのものか、物見遊山に挑んでくる者がけっこういることを黒江は知っていた。

また、それと同じぐらい黒江が女子中学生ということで舐めて挑んでくる者もいることも。

黒江は後者の方と判断して小さくため息をつくと、次いで申し込んできた相手に通話を行った。

不快であるが、今相手をボコボコにしてスッキリしたい黒江にとってはこういった相手はありがたい。だが、それでも不快なもののは不快なのでいつもより念入りに叩きのめそうと画策し、彼女は通話が繋

がったことに気づくと直ぐに口を開いた。

「十本以上の勝負なら受けます。それ以下ならやりません」

通話相手はすぐに答えなかった。

そのことに不機嫌であるものの、まさか声だけで私に気圧されたのかと鼻で笑いそうになったが、その前に返事があった。

『十本勝負で頼みます』

随分と落ち着いた声だった。

声色からおそらく高校生の男子。

中学生にして高圧的な私の言葉に怒るわけでもなく、ただ淡々とした言葉だった。

もしかしたら、良い人なのかもしれない。

そう思った黒江であったが、自分から出した態度を今更収まるわけにもいかず、少し間を開けて答えた。

「……分かりました。ボゴボゴにされて、途中で嫌になっても知りませんから」

了解の意を伝えた後の言葉は、黒江なりに自ら矛を収めることを出来ないなりに彼を気遣つての言葉だった。

そうして通話を切り、彼に十本勝負の対戦申請を送る。

聞き慣れた機械音声が対戦の承諾、転送までの時間を伝えた。

対戦ステージは市街地Aだった。

黒江よりも先にそこに転送されてた男性は、次に転送された黒江の姿を見て、驚きに眉を軽く持ち上げるとジロジロと此方を見つめてきた。

黒江はその視線を、見た目で侮ってくる者たちと重ねて感じ取り、思わず不愉快な表情を浮かべて口を開いた。

「なんですか？」

すると、目の前の男性はわずかに申し訳なさそうな表情を浮かべ、次に頭を下げた。

「ジロジロ見て悪かった。マスターレベルのアタッカーが女子中学生だとは思わなかったんだ」

声のトーンとその姿勢を見て、黒江はその言葉が嘘ではないと判断した。加えて、目の前の男性が先ほど思い浮かべた人種ではないというこも。

しかし、彼が初見で黒江を侮ったのは事実。黒江は小さく「そうですか」と呟くと、とりあえず一本取って思い知らさせてやろうと決心する。

そして始まった個人ランク戦十本勝負。

先程の言葉からして、彼は黒江のことを知らない。つまり、黒江がどのようなトリガーを使い、どのような戦い方をするのか知らないということだ。

それは黒江も同様だが、C級上がりたてと思っているためスコープオンしか使わないだろうと予想し、剣技に関してはまだ自分の方が上だろうと考えている。

そして何より黒江が得意としているトリガー『韋駄天』。発動前にルートを決めることで相手の意識が追いつかないほどの高速で移動するトリガーは初見殺しにうってつけだ。

黒江はこれで最初の一本を取ろうと、彼の横を突っ切るような形でルートを設定。あとは彼が動いたその瞬間に、とそのタイミングを狙い――

「韋駄天」

彼の態勢が前にいったのを確認して、即座に発動。

設定したルートに引っ張られるような形で黒江の体が射出され、横に倒していた孤月の刃が彼の首を捉えた。

「(獲った)」

心の内でそう呟き、孤月が彼の首に接触。

その手応えを両手に受けながら、黒江の身体は停止する。

そして、身体の向きを反転させ、首が落ちているであろう男性の姿を視界に入れようとして。

「っ!？」

驚愕した。

視線の先の彼の首は落ちるところか傷一つない。

代わりに先ほど斬りつけた首の位置にはスコープオンが出現しており、それで防いだであろうことが予測できた。

予測できたが、黒江はそれを見て有り得ない、と小さく心の中で叫ぶ。

韋駄天の速度は自身のトリオン体の意識が追いつかないほど速いため、見てから反応するのは不可能に近い。これまでの個人ランク戦の中では斬られたことすら気付かない者だっていたのだ。

「(そんな…韋駄天に反応して、あまつさえ防ぐなんて……)」

そうして驚愕する黒江とは対照的に、目の前の男性も身を翻すと小さな声で言った。

「速いな。カウンターが上手く入らなかった」

それを聞いて、黒江は目の前の男性に向きながら、僅かに違和感がある自身の脇腹に視線だけを移して見た。

さつきまではなかった斬傷があり、そこから微々たる量ではあるがトリオンが漏れていた。

「嘘っ」

ここでようやく黒江は胸の内の思いを小さな声で吐露した。

そして、黒江の、視線を移した故の小さな隙。

それを見逃さなかった相手、樹神一葉は右手を後ろに引いて「お返しだ」と呟くと振った。

瞬間、右手の先から光の刃が黒江に向かって伸びる。

「っ！ シールドっ！」

反射的にシールドを展開する黒江。

だが、そのシールドを迂回するように光の刃が曲がり、まるで鞭のようにしななって彼女の首を切り落とした。

「(マンティス……っ!?)」

『伝達系切断。黒江緊急脱出。1-0、樹神リード』

無機質な機械音声がステージ内に響き、黒江は元のブースに転送された。

「あの速度には驚いたけど、案外簡単に取れたな」

一葉はそう呟くと、一つ息をついて続けた。



「あと九本。締まっていくな」

◆? ◆? ◆?

視点は変わって、C級ランク戦ロビー。

主にC級隊員がB級に上がるためのランク戦を目的として作られた施設だが、正隊員同士の模擬戦や個人ランク戦を行うに適しているため、正隊員も結構な頻度でここを利用する。

もちろん黒江が今使用しているのもこれである。

次に特大モニターの話に移ろう。

モニターに映るのは主に注目の試合。C級同士の熱戦や正隊員同士の模擬戦などの内、システムが判断してモニターに映す試合を決める。

技術を見て盗もうとしている訓練生の大体はそこに映る正隊員の試合を見るのが常だ。他にも休憩がてらソファに座っている正隊員や息抜きに様子を見に来た正隊員なども観戦しているため、結構話し声などで賑わうスペースでもある。

そんなモニターの前に、年内でも類を見ない人数の集団ができていた。

「おい。あれって、A級の黒江双葉だよな? 負けてね?」

「相手は……なんて読むんだ? じゅしん?」

「それよりもポイント差だよ! B級の奴、4000Ptだぞ!」

「げえ、ポイント差約5000Ptかよ! それは気の毒な……え、そのB級が勝ってんの?」

集まった人の数だけ声上がる。

そうなれば騒ぎは一段と増し、その騒ぎに引きつけられた者がチラホラ見え始めた。

それは訓練生だけでなく、正隊員、A級すらも例外ではない。

「おーおー、なんか賑わってんな。なんだなんだ?」

「あ、おい。俺とランク戦するじゃなかったのかよ?」

個人ランク戦をすべく、ロビーにやってきたA級隊員の米屋陽介と

出水公平。

その二人がモニター前の賑わう集団を視界に捉えると、米屋は興味ありげにそちらに走って行き、出水は走っていった米屋の後をため息をつきながら追う。

そして、二人はモニター前に辿り着くと、そこに流れる映像を見て「お、黒江じゃん」とこぼす。次いで黒江が何本獲ってるのか確認しようとしたところ、驚きで目を丸くした。

「まじか！ 十本勝負で黒江が七連続負け!? 相手誰だよ！」

「読み方わかんねえけど、少なくとも俺は聞いたことはねえな。しかもポイントが……4013pt!？」

「まじで!? B級上がりたてじゃん！」

次いで二人はモニターに映る試合を見る。

そこには韋駄天を巧みに利用しながら移動や回避している黒江の姿と、それをグラスホッパーで追いながら攻撃を繰り出す樹神の姿があった。

「いやあ、あれはB級上がりたてじゃねえだろ。動きが全然違うぞ」

「てか身体の動きが上手すぎねえ？ 風間さんと並ぶんじゃないか、あれ」

ふと黒江が地上から三メートルほどの空中で右に直角に曲がると少しした辺りで韋駄天が終了し、急停止したと思うと振り向きながら孤月を振るった。

それがちょうど黒江を追おうと樹神がグラスホッパーで加速したタイミングと同じになり、見た限りでは反応しようにも対処できない攻撃だった。

「うまい」

それを見ていた米屋が無意識のうちに呟く。

しかし、樹神はそれに対して一瞬のうちにグラスホッパーを起動して、地面と平行に飛ぶ自分の直ぐ真下に展開すると、右の膝を曲げて触れる。

途端、推進力で前に引っ張られながらも樹神の体は下半身が持ち上がる形で上に飛び、次いで上半身もそれに続く。

孤月を紙一重でかわし、体を上下反対のまま黒江の真上を飛び越え

る瞬間、樹神の両手から孤月と同じぐらいの長さのスコープオンを展開し、肩を斬りつけた。

対して、黒江はそれを予測していたかのようにシールドを傘のように曲げて展開、振るわれたスコープオンを弾いた。

このシールドの形を第2戦から見えていたものは、マンティスによる歪曲斬撃を防ぐためのものだど気付く。今回の樹神はスコープオンを両手に展開してるのでマンティスを使えないのにその形でシールドを展開したのは、直前まで何で攻撃してくるか分からなかった故だろう。

だが、樹神が先程の攻撃を避け、攻撃を繰り返してくるのは分かっていた。

となれば、その後の追撃も当然考えている。

モニターの中の黒江が何か鋭く叫んだ。

米屋、出水ともにそれが韋駄天の発動だと判断。実際その通りでモニターの中の黒江が凄まじい速度で射出された。

その軌道は樹神の足先を通り、次いで背中を登るようなルート。

正面から攻撃が来ると思っていたら、韋駄天の速度からしてどうしてもガードが間に合わない攻撃だ。

韋駄天の発動直前までスコープオンを前に構えてカウンターを狙う樹神を見て、その場にいた実力者は黒江の勝ちを予測した。

しかし。

「はあ!?!」

黒江が真正面ではなく、樹神の少し真下に移動した瞬間、彼は左手のスコープオンを即座に仕舞うと、グラスホッパーを起動。右手のスコープオンはその掌から姿を消すと、左の踵からなにやら凹凸のある特徴的な刀で出現した。

樹神の後ろに周り、背中を狙う黒江。

彼女の構える孤月が樹神を真っ二つにせんと彼の下半身に肉迫した瞬間、左足が軽く後ろに振られ、孤月を大きく弾いた。

それを見て、理解する。

あの刀の凹凸は、孤月を大きく弾くために作られたものだど。

態勢は崩されつつも、韋駄天は設定された軌道を通り終えるまで止まることはない。だが、樹神の真上で停止したその瞬間、いつのまにか右足の下に展開されていたグラスホッパーを踏み、態勢を崩している黒江に向かって加速。

黒江は反射的にシールドを展開するが、それはトリオン体を防ぐものにはならず、樹神の体はシールドを通過した。

そして、樹神が黒江の背中に左手を置いたかと思うと、黒江の胸からスコープオンが現れた。つまり。

『トリオン供給機関破壊。黒江緊急脱出。<sup>ベイルアウト</sup> 8-0、樹神リード』

モニター内で無機質な機械音が響き、ロビーでは感嘆と驚きの声がかかる。

「B級、あれを読んだのか？」

「読んでなきやあそこまで早く動けないだろ」

「だよなあ」

そんな風に騒ぐ訓練生とは別に、その戦いを見ていた実力者たちは真の意味で今の動きの凄さに驚いていた。

もちろん、米屋、出水も同様だ。

「今のマジかあ。黒江が獲ったと思ったんだけどなあ」

「まさかあれを見てから防ぐなんてな」

米屋が大きく仰け反りながら感嘆の声をあげ、出水が苦笑いを浮かべながら息をついた。

「槍バカ、お前だったら今の防げたか？」

「無理無理、あれは反応できねくて。そーいう弾バカは？」

「お前が無理だったら俺も無理。近接は本職じゃねえ。太刀川さんだったらなんやかんや防いでたかもなあ」

笑みを浮かべながら無理と手を振る米屋に、出水はここには居ない隊長の姿を思い浮かべる。

そうなる前に太刀川さんなら斬ってるか、と出水が判断したその時だった。

「お、よねやん先輩といずみん先輩だ。こんばんわ」

横から自分たちの名を呼ぶ声が聞こえ、そちらを見やる。

そこには、黒江と同じ小学校であったためか、彼女と仲のいい緑川駿の姿があつた。

「おかつす、緑川」

「おう、久しぶり」

各々返事をする二人。

緑川はその二人の横にやってくると、モニターを見た。

「うわっ、アイツ八連敗してんの？ やっぱ、相手誰？」

「知らね。ただ無名であそこまで動けて4000Ptってことは、たぶん支部の隊員じゃね？」

そう言つて視線を戻す米屋と出水。

モニターの映る勝負は既に九本目を開始しており、今度は黒江が自ら韋駄天によるヒットアンドアウェイの戦法による試合内容が行われていた。

孤月が届くギリギリのルートを通りつつ、韋駄天を小刻みに停止と発動を繰り返している。

米屋、出水、緑川も初めて見る動き。その練度と正確性を見る限り、よほど練習を重ねていたのだろうと三人は予測する。

緑川が得意とするグラスホッパーを用いた包囲攻撃『乱反射』ピンボールとなり、素早い攻撃に軌道の変化や緩急が付くことで予測しにくい動きになっている。

だが――

「なーんであれを捌けるかねえ」

出水が再度苦笑いを浮かべて呟く。

モニターの中の樹神は、黒江の攻撃そのことごとくを必要最低限の動きで防いでいる。

攻撃地点をスコープオンを生やして弾き、足を後ろに引いて紙一重に躲し、腰を落として頭に振られた孤月を避ける。

その身体運びを見るに、今のままでは崩せそうにない。

それを理解した黒江は勝負に出るべく、一度樹神の真横五メートル先で停止すると、すぐさま韋駄天を起動。また先程のように軽く孤月が届くぐらいの軌道を描くと思いきや、樹神の二メートル先で停止。

その勢いのまま孤月を真横に振った。

瞬間、孤月が伸び、間合いを拡張した。

『旋空』と呼ばれる孤月の専用オペシヨントリガーだ。

今までの流れの通りに動くのであれば、樹神はスコピオンによる防御を図るだろう。

だが、初めて見せる旋空というトリガーを用いた攻撃。

十中八九意表を突いた。

だというのに、樹神は停止した黒江を見ると、彼女に向かって一歩踏み出して旋空を起動した孤月を振るう右手を掴んだ。

次いで、黒江の元に身体を入れると、一本背負いの要領で黒江の身体を持ち上げる。

宙で弧を描きつつ背を地面に叩きつけられる黒江。

叩きつけられながらも黒江は直ぐに無理やり離脱しようと韋駄天を使おうとするが。

『トリオン供給機関破壊。黒江緊急脱出。9-0、樹神リード』

『?!』

黒江の敗北を伝える音声が響き、とつさにトリオン供給機関が存在する自身の胸を見やった。

そこには八敗目と同じように、スコピオンが黒江の胸を貫いていた。

叩きつけの衝撃で気づかなかった黒江は悔しそうな表情を浮かべて、九度目となる敗北による転送を受けた。

『もぐら爪』かあ。あんな風に使う奴初めて見た

「黒江の右手を掴んだ時に、既に左足から伸ばしてたな。緑川、あれ出来る?」

「俺、もぐら爪苦手だし、そもそもあんな綺麗に一本背負い出来ないよ。てゆーか、俺個人ランク戦で一本背負い初めて見た」

またもや米屋は面白そうに笑い、出水と緑川はモニターで淡々としている樹神を見ながら苦笑いを浮かべた。

次で最後の一本。

再度市街地ステージに転送されてきた黒江の表情はせめて一矢報

いてやろうという意気込みが見られ、その試合を見ていた観客たちも最後の勝負を見届けようと息を飲んだ。

そして、始まった最終試合。

黒江は目の前にシールドを展開しつつ、旋空を放つ。観客の何人かはまたかと落胆の声を上げそうになるが、標的は樹神ではなかった。

樹神の真横に位置する住宅が斜めに斬り裂かれ、上の部分がずり落ちそうになる。

しかし、それだけでは到底完全に倒壊しない住宅。

それを完全に倒壊させるべく、今度は樹神を巻き込む形で三度旋空を放った。

樹神は最初の一撃に対して両手のスコープオンで防ごうとしたものの、それが自分に向けて放たれなかったことで少し困惑してしまつたため、一撃の隙に黒江を攻撃することが出来なかった。

次の三撃もスコープオンで受け流すのみ。

そうした樹神にダメージは入らなかったが、住宅に十分すぎるほどの損壊を与えたため、大きな音を立てながら瓦礫となつて樹神になだれ込んだきた。

それを見てすぐさま後ろに飛んで瓦礫の雪崩を回避する樹神だが、それによつて韋駄天を起動して倒壊した住宅の下を通る黒江の姿を見逃してしまった。

そして着地の瞬間、ただ真つ直ぐに倒壊した住宅の元からさらに奥へ迂回してから、樹神の背中目掛けて韋駄天で突っ込んできた。

樹神はわずかな物音で後ろを振り向くが、その時は孤月が身体を貫く瞬間で――

『ぐわん!』

目に見えて焦った表情を浮かべた樹神が振り向くように身体を回転、背中に出現した短いスコープオンで孤月を僅かに弾くことに成功する。

しかし、そらせたのは僅かで樹神は右肩から先を斬り飛ばされた。

「おおっー」

この勝負で初めての大ダメージに、ロビーの誰もが驚きの声を上げ

た。

黒江も仕留めはできなかったが、右肩より先を斬り飛ばせたことを喜ぶように微笑を浮かべていた。

韋駄天が終了し、俺と瓦礫の雪崩の間に立つ黒江。

それを見て、樹神は左手を後ろに引いた。

黒江はマンティスが来ることをこれまでの戦闘の経験で判断し、自分の前から横を覆うようにシールドを展開する。

その時だった。

「いや、ほんと、まじか」

モニターに流れた映像を見て、米屋が苦笑いを浮かべた。

その理由は簡単で、黒江の後ろから彼女より少し小ぶりの瓦礫が飛んできたのだ。

その飛来の原因は、黒江の孤月を弾く時に右手で瓦礫の雪崩に飛ばしたグラスホッパーだ。あの瞬間、防ぐのに手一杯になるはずのあの場面で発動したグラスホッパーがここまで綺麗に当たるとは。

それによってシールドよりも前に押し出される黒江。そうになると彼女を守るものは何もなくなくなり、樹神の左手が的を定めたかのように振るわれた。

とつさに孤月を構えて防ごうとするも、流動的なマンティスを止めることは出来ず、彼女の胸に突き刺さる。

悲痛な表情を浮かべる黒江。しかし、その刃は正確に彼女のトリオン供給機関を貫き――

『トリオン供給機関破壊。黒江緊急脱出。<sup>ベイルアウト</sup> 十本勝負終了。勝者、樹神一葉』

いつもなら自分の勝利を伝えてくれる機械音声が、冷たい声で彼女の敗北を伝えた。

◆? ◆? ◆?

「ふう、危なかった」

ブース内のベッドに腰掛けつつ、俺は一つ大きく息をついて呟い



た。

今回の対戦相手だった女子中学生。その可愛らしい外見とは裏腹に、マスターレベルのアタッカーという腕前は本物だった。

最初の一本は彼女が驚愕によって動きが鈍くなったため簡単に取れたが、それ以降の彼女の動きは桁違い。戦闘中、彼女の行動に何度舌を巻いたか分からないほどだ。

俺のサイドエフェクトが無ければ、俺の負けだったかもしれないと考えてしまうほどに強かった。

「なにより、最後の地形を利用した攻撃は初めてだったな。今回はとっさに利用することではなんとかあったが、その前に大きいのを一発食らってしまった。課題だな」

ふと俺はブース内の時計を見た。

八時を五分ほど過ぎていた。

「まずい、時間掛け過ぎた」

弾かれるように立ち上がり、ブース内を出る。

本当なら飛び降りたかったが、何故か隊員の数が増えていたため飛び降りるスペースがなく、仕方なく階段を使って下に降りる。

階段を下り終わると、先程通ってきた道を戻ろうと駆け出した。

その途中、何やら俺を呼び止めようとする声が聞こえた気がしたが、妹たちの飯が先決なため、無視して全力疾走。

俺は正面入り口から飛び出し、グラスホッパーを起動して家へ向かっていった。

間に合いました。

## 第四話 樹神一葉④

「よし、上出来」

ペンを置き、問題冊子の各ページを何度か確認すると、俺は胸の内  
で小さくそう呟いて身体を伸ばす。

背中からポキパキと心地よい音がし、血行が良くなったように感じ  
る。

次いで伸ばしている体の力を抜き、静かに大きく息をついた。

俺は今、高校三年生。流石に受験期だけあって、今回のような模試  
の受講は必須だ。自身の学力の確認にもなるし、そういった空気に慣  
れるにも適しているため、今日が土曜日ということ差し置いても、  
いつものように昼から防衛任務を入れることはしない。

俺の後輩となる高校一年、二年の正隊員の何人かは防衛任務で抜け  
ているらしいが、まだ受験ではないという点と、いざとなればボー  
ダーの推薦を受けれるため余裕があるのだろう。

俺はボーダーの推薦を受けてしまえば受験は免れるが、受験者の上  
位数名に与えられる成績優秀者による学費全額免除が取れないため、  
真っ当に受けるつもりだ。

そういった意味でも、狙っている大学の中で俺の学力が何位である  
かを知る必要がある。

なので、ひっそりと猛勉強を行っていたのだが、

「思ったより難しくなかったな。数Ⅲはともかく、数学ⅡBとか明らか  
に前年より簡単だったぞ。二時間前に行った苦手科目の英語も、手  
応えはある。前回の模試では二位だったけど、今回は一位取れたかも  
しれん」

心の中でガッツポーズを取る俺は、不意に終了の声をあげた試験官  
の方を見やる。

高校で行われる模試のようなバイトで雇われた即興の試験官とは  
違い、近くの高校と合同で大学にて行われた真面目な模試だけあつ  
て、疲れなどおくびにも出さずに淡々と用紙を回収していた。

「(試験終了の予定は三時半。たしか二葉と三葉は友人らと遊びに行

くから、帰るのが七時ぐらいついて言ってたな。一応、夕食分の材料は残ってるけど、買い物して、久々に二人の好きなもので固めて驚かすか)」

そこまで考えて、二人の喜ぶ姿を予想。思わず笑みがこぼれた。

さて、頑張ろうと意気込み、部屋を出て大学の三号館の出口から外に出る瞬間だった。

「おい、お前。少し面貸せ」

「あ？」

後ろから声をかけられた。

妙に威圧的なその言葉に、俺も若干不機嫌になりながら振り向くと、そこにいたのはボサボサ頭に鋭い目つき、ギザギザとした歯をした男性。制服を見るに違う高校のようだ。

猫背になりながら、両手をポケットに入れて此方を見る男に対して俺が何かを言おうとする前に、隣から彼の頭目掛けて手が振り下ろされた。

パシン、と乾いた音が響く。

「いつてえー！」

「ぼっか、カゲお前。初対面の相手に何っ一言葉を吐きやがる。一応見に来て正解だったぜ」

見たことある顔だった。

それもそのはずで、ボサボサの頭を叩いた男性は俺と同じ制服を着ていた。つまり同じ高校の生徒で、実際何度か校内で見かけていたことを思い出した。

「たしか、荒船君、だったか？」

「お。俺の名前を知ってんのか」

「校内でそう呼ばれてたのを見かけたただだよ」

俺は肩をすくめて答えるが、それでも自分の名前を知ってもらえていた荒船は満足気に笑みを浮かべると、先ほど叩いたカゲと呼ばれる人物の肩に手を回し、反対の手で指差した。

「いきなり呼びかけて悪かった。コイツの名前は影浦雅人。こんな凶暴なナリだが、れっきとしたボーダーだ。三日前のあんたの個人ラン

ク戦の映像を見て、興味を持ったんだとよ」

「俺に男の気はないぞ?」

「ハッ、安心しろよ。俺にそういった趣味はねえ」

今まで沈黙していた影浦が俺の返答を鼻で笑うと、一步前が出る。

俺の方が身長が高いため影浦が見上げる形になっているが、それでも此方を睨みつけるが如く直視し、続けた。

「映像見たぜ。お前、強いな。この後任務もねえんだろ? ちよつと付き合え」

「ちよつと、てのは時間にしてどんくらいだ?」

俺の質問に影浦は「あ?」と声を上げると、隣の荒船に視線を移した。それに対して荒船は仕方なさげに息をつくと口を開いた。

「こつから本部まではおおよそ二時間。個人ランク戦を大体三十分として、そつから帰宅まで一時間なら、約三時間半だ」

「なら断る。別の日にしてくれ」

キツパリと断り、踵を返して歩みを再開。

しかし。

「おい、待てよ」

すぐに影浦に肩を掴まれたため、仕方なく足を止めて振り返った。

「なんだ?」

「訳を話せ。こつちもそつちの都合やらを一応考えてから声えかけたんだよ。バイトもねえんだろ? じゃあ、無理な訳は何だ?」

何やら少し不機嫌な影浦に、帰宅しようとしていた他の学生が此方を見て何事かとヒソヒソ話し始める。外見もさることながら、今の彼の言動を兼ねると、不良が一生徒に絡んでいるようにみえるのだろう。

その周囲の反応に影浦は忌々しげに舌を打つ。

それに遅れて気づいた俺は横目に辺りを見渡した後、場所を移すかと提案するが、彼の「別にいい」という言葉を聞いて、一息をついた。そして、続ける。

「まず、バイトがないってのは何処情報だ?」

それは影浦の質問を答える前に気になった点だ。ボーダーに入隊

してからの三年半、自慢ではないが他の正隊員と仲良くなったこともなければ、バイトと防衛任務で高校の友人はおれど学年の異なる親しい後輩などおらず、その友人ですらバイトや防衛任務について事細かく話したこともない。

その疑問に影浦が何か言おうとするが。

「樹神にとてもお世話になった後輩からだ。その情報は」

「あくまで自称、だけどな」

それよりも先に二種類の声色が影浦たちの後ろから聞こえた。

次いで、影浦と荒船に並び立つようにソフトモヒカンという変わった髪型の長身の男と少しデコの広い短髪の男が姿を現した。

「鋼、穂刈」

「すまん、少し遅れた」

「影浦より出口から遠かったからな。俺たちの席が」

「別に怒っちゃいねえよ」

友人の到着に荒船が笑みを浮かべたのに対し、鋼と呼ばれた青年は素直に遅れたことを謝罪、穂刈と呼ばれた青年は言い訳まがいに言葉をこぼし、それを荒船が肩をすくめて答えた。

二人の制服を見た限り荒船とは高校が違うはずだが、三人のやり取りを見るに恐らく同じボーダーの隊員なのだろう。

「友人が到着したのはいいが、とりあえず端に寄ろう。この人数でここに溜まると通行人の邪魔になる」

そう言って返事を待たずに廊下の端に寄ると、他の四人も何も言わずに俺に続く。

その後、改めて向かい合うと何やら四人揃ってヤカラ感が出ていて詰め寄られているように思えてしまう。

心なしかここを通り過ぎる学生を俺を見る目に哀れみの色が強い気がする。

「さて、また紹介からだな。まずこの倒置法モヒカンは穂刈篤。このデコ武士は村上鋼。二人とも俺らと同じ正隊員だ」

「おいこら」

雑な紹介方法に村上と穂刈が突っ込むような声を上げる。

荒船は二人に目配せしながら少しばかり悪そうな笑みを浮かべると、二人とも仕方なさげに微笑。次いで此方を見た。

なるほど、漫才のようなこのやり取りは初対面である俺の緊張を和らげるためか。

そう結論付けた俺はその気遣いに感謝しながら口を開いた。

「弓手町支部所属の樹神一葉だ。よろしく」

村上と穂刈も「よろしく」と答えると、影浦がようやくかと言わんばかりに一歩前に出た。

「挨拶もそんなくらいにしてキリキリ答えろや。無理な訳は？」

顎を引いて此方を睨みつけるように見てくる影浦に、俺は特に嘘を必要もないため素直に訳を話した。

「今日の夕食を作るためだ。軽く仕込んではいいるが現状だと料理に一時間はかかる。それに、さつき妹らにサプライズで好物のフルコースを作ろうと画策したばかりでな。妹二人が帰ってくるのはおおよそ七時。とても本部に寄る時間はない」

淡々と理由を述べる俺に影浦は小さく舌打つ。

「チツ。そりゃあ外食か、親にでも頼むんじやダメなのかよ？」

この時、明言しておく、影浦はイライラしていた。

今この側から見て脅しているような状況とそれを見る人の多さ。それにより影浦は自身のサイドエフェクトのせいで数多の不快な視線をその身に受け、全身掻きむしりたくような感覚に襲われていた。それだけでも影浦からすれば不機嫌の要因でもあるのに、加えて今回そんな思いをしてまでの目的を失敗してしまえば目も当てられない。

それ故に思わず出てきてしまった言葉だったが。

「三年半前に両親は死んだ。唯一の肉親であった祖母も、一年半前に亡くなった。今は俺が二人の保護者だ」

あくまで淡々と、冷静に。

まるで報告するかのような言葉だったが、かえってそれを聞いた四

人は冷や水を浴びせられたかのようにバツの悪い表情を浮かべた。

特に影浦は自身の配慮もへったくれもなく、イラつきに任せて吐いた自分の言葉を少しばかり悔いているように視線を下げ、地面を見つめた。

「……わりい」

「別に気にしてない。それよりも、もういいか？」

視線を逸らしながらも謝罪を口にした影浦を見て、俺は軽く首を振って答える。

その後、一通り学生が帰ったのか、少し静かになった廊下の方を見て帰っていいかという催促を行う。

「カゲ」

「ああ、分あつてる。分かつてんよ、クソツ」

荒船の呼びかけに影浦は乱暴に頭を掻きむしると、次いで顔を上げて言った。

「おい…………お前の妹らはお好み焼き、好きか？」

「ん？」

若干柔らかくなつた影浦の声とその内容に、思わず首を傾げる。

質問の意味が分からないが、とりあえず二葉と三葉との記憶を遡つて、お好み焼きの好みはどうだったのか探る。

そして、その答えは存外簡単に見つかった。

「ああ。そういや明日、行きたいお好み焼き屋があるって言ってたな。たしか…………うん？」

前々から行きたいと言っていたお好み焼き屋の名前。それを思い出した途端、俺はほぼ反射的に影浦の方を見た。

影浦は少し曲げていた背をキツチリ伸ばすと、左手を後頭部に、先ほど此方を見据えていた視線を横にやって、遠慮気味に口を開いた。

「ああ。たぶん、そりゃあ俺んちだ」

「まじか」

妹らから聞いていたお好み焼き屋の名前は『かげうら』。今の今まで思い出しもなかったが、彼の名字と同じであることに気づく。そう思つての疑問詞だったわけだが、的中したようだ。

俺は驚きに少しばかり目を見開いていると、影浦は視線を合わさな  
いまま続けた。

「今日じゃなくてもかまわねえ。来週でも再来週でもいい。俺と十本  
戦<sup>バトル</sup>ってくれりやあ、礼にうちでお前ら家族全員分の飯代を出す。……  
さつきは無理言つて、悪かった」

そう言い切ると、再度猫背に戻る。

いや、猫背に見えるが恐らく頭を下げているのだろう。

見るからに悪そうな印象で、先ほどもかなりイラついていた様子  
だったが、根は優しいのだな。

「そうだな。先も言ったが、気にはしてはない。ただ、少しだけ提案があ  
る」

言いながら廊下に立てつけられた時計を横目に確認する。

三時四十分ほどを示していた。

それ見て俺は影浦に視線を戻し、言った。

「今日個人ランク戦をしよう。影浦くんが言った、十本勝負でだ。加  
えて、もう一つ。飯を奢る話だが、それはもし俺が君に勝ったら、の  
話だ」

そんな俺の提案に影浦は逸らしていた視線を俺に戻し、訝しげに  
「あ？」と零す。

ようやく目が合ったな、と。

心の中でそう呟きながら、小さく挑発的な笑みを浮かべて続けた。  
「君、強いんだろ。言っとくが、人に奢ってもらうのは家計的に大助か  
りなんでな。本気で勝ちに行くぞ」

口ではこう言ったが、もちろん夕食一回分でそこまで家計に影響を  
及ぼすわけではない。しかし、これでいい。

影浦の後ろにいる荒船はククツと笑みをこぼし、村上と穂刈も微笑  
を浮かべた。

そして、当の影浦はというと。

「けっ、いいぜ。ボコボコにしてやるよ」

覇気のなくなった様が一変、相手を威圧するが如く目を鋭くしギザ  
ギザの歯を見せつけるように笑った。



それでも、先ほど垣間見えた優しさ雰囲気は失われていない。

「ほら、行くぜ。おめえらもだ」

そう言うと、影浦は此方に視線をやりながら踵を返し、次いで荒船らに声を掛けると大学の外に出ようと歩を進め始めた。

三人の間を抜けて進む影浦に俺も続こうと歩き始める。

その時、荒船から声をかけられた。

「樹神、カゲの奴を悪く思わないでくれ。見た目はああだが、根はいい奴なんだ」

まるで嘆願するようなその言葉に、俺は一層笑みを濃くして「分かっている」と言うと、三人の横を通り抜けるように影浦の跡を追った。

そうして、その背が離れていった時、村上が荒船のとなりに寄って  
眩く。

「良い奴だな」

「ああ、人間が出来た奴だ。好ましいぜ」

「それより、早く行かねえと置いてかれるぞ、カゲに」

三人は一度目を合わせると、少し小走りで二人を追いかけた。

## 第五話 樹神一葉⑤

『トリオン漏出過多。影浦緊急脱出<sup>ベイルアウト</sup>。510、樹神リード』

その音声が響いたと思うと、腿から下の左足と肘から先の右腕が切り落とされて多量のトリオンが漏出していた影浦の身体が崩れ、一瞬で消える。

それに対して両腕、両脚に細かな斬傷があるものの、その浅さのせいか既にトリオンすら漏れていない樹神は影浦の緊急脱出<sup>ベイルアウト</sup>を確認すると、大きく息をついた。

時刻は六時。

彼らがボーダー本部に到着したのは五時五十分ぐらいなので、個人ランク戦を始めておよそ十分経ったことになる。

黒江戦の時は五本目終了の時点で大体十五分だったのと比較すると、随分と早い決着を繰り返していると思うが、それは違う。

これまでの試合、両者ともスコープオンしか使っていないのだ。つまり、お互いに必殺の間合いで攻防を繰り返しているため、僅かでも遅れた方が手痛いダメージを負うことになる。それ故に距離を置いたり他のトリガーを使って搦め手を利用していた黒江と比べて一本の決着が早い。

逆に影浦だからこそこまで時間がかかっていると言える。

影浦はマンティスを中距離近距離ともに利用することで軌道の読みにくい必殺の攻撃として確立しているが、対して樹神は遠距離攻撃としてマンティスを利用していただけであって近距離となれば話は別。主に手足に生やせる形でスコープオンを展開して攻撃する。それは本来のスコープオンを用いた近距離攻撃よりもさらに近く、いわば間合いの少し伸びた格闘攻撃とも見て取れる。三年という年月を経ることで積み上げられたトリオン体ならではの身体操作法に加え、グラスホッパーを用いての高機動力が合わさると、その攻撃力は計り知れない。

もちろん、影浦は映像で樹神の攻撃力を知ってはいたが、側から見た視点と実際に味わうのでは大きく変わる。

一步踏み出せば密着するほどの至近距離での打ち合いは相手の全身を把握するには及ばず、それ故に樹神の左手の大振りによって影浦の右手を大きく弾かれた次の瞬間、大振りの勢いのまま放たれた左回し蹴りとその踵から姿を見せるスコープピオンの存在に気付かず、蹴りから逃れようと後ろに下がったもののスコープピオンの間合いからは抜け出せず頭部を切り裂かれた。

『トリオン伝達系切断。影浦緊急脱出。610、樹神リード』

これで六本目。影浦の負けが確定した瞬間だった。

しかし。

「カゲの奴、笑ってやがるな」

「ああ、あそこまで楽しそうなカゲは久し振りだ」

ロビーの観客席にて二人の攻防を見ていた荒船と村上がモニターの手で七本目を始めた影浦の顔を見て、そう呟いた。

まるで踊るかのように至近距離で刃を交える樹神と影浦。

スコープピオン使いは基本相手に一度二度ほど攻撃を加えると距離を取ることが多いが、二人にそういった様子は全くない。

数十の剣撃音。

これまでよりもお互いの攻防が続いていると村上と荒船が思った時だった。

『っ！』

宙に左腕が舞った。

この試合を見ていた者たちの大半は二人の攻防の速さ故に何が起きたのかを遅れて理解するため、最初は三本目のように影浦の腕かと思いが、それは違う。

「初めて樹神にらしいダメージが入ったな」

そう言った村上が見ている先、モニターには顔を悔しそうに歪める樹神と、してやったりと笑みを浮かべている影浦があった。

◆? ◆? ◆?

六本目の勝負の最中、二人は初めて距離を取ったと誰もが思った。

だが、それは少し違う。

影浦は一步下がったに過ぎず、樹神が彼の間合いから外れるために大きく距離を取ったのだ。

それを見て、影浦は追撃するのでもなくギザギザの歯を隠そうとせず笑って言った。

「けっ、そういうことかよ」

「……そういうこと、とは？」

左腕の傷からトリオンが漏れないように右手で抑えつつ、樹神は影浦の僅かな拳動も見逃さないように見つめながら、言葉を返す。

すると、影浦は僅かに顎を引いて答えた。

「どうやらテメエ、見えてる攻撃・動きには気持ち悪りいぐらい反応が速え上、対応もクソ丁寧だが、その反対は違うみてえだな。それで、確信したことがある。てめえ、サイドエフェクト持ちだろ？」

サイドエフェクト。

優れたトリオン能力を持つ者が偶発的に、そして先天的に発現する超感覚の総称のことだ。

発現した者はその特異性と有意性から部隊の中核を担ったり、こと戦闘において頭角を表すことが多い。しかし、その能力はあくまで人間が本来有する能力の延長線上のものであるため、炎を出したり空を飛んだりといった超常的なものではない。

また、ボーダーにおいては入隊時のトリオン測定によりサイドエフェクトの有無を判断され、その能力からS〜Cまでランク付けがされる。

上から超感覚、超技能、特殊体質、強化五感という位置付けだ。

たとえばランクが下であろうと、サイドエフェクト持ちは良くも悪くも目立つため隊員の間では噂や話のタネになることが多いが――

「(少なくとも俺がボーダーになってからのおおよそ一年間、樹神なんて名前聞いたことねえ。ここまで強えならC級の時点で名が売れるはずだ。そうなってないってことあ、つまりそういうことなんだろ)」

笑みを浮かべながら鋭い目つきで樹神を睨みつける影浦。

それに対して、樹神は左腕の傷口を強く押さえると、一つ息をつい

た。

「そうだな。ああ、そうだよ。あそこまで撃ち合えば、そりやあ分かるよな。——だから、俺も分かった。君も、サイドエフェクト持ちだな」

言い切ると同時に樹神は左腕から手を離し、影浦を見据える。

その視線に影浦は警戒するように態勢を下げると、樹神は続けた。「あそこまで密着した攻防。自分で言うのもなんだが、俺は強力なサイドエフェクトを持つてるから凌げたわけだが、同じく攻撃を受ける君は違う。今までトリオン兵ばかり相手していて対人戦は久し振りではあったが、その攻撃の半分を防がれ、残り半分を躲されるほど単調でも軽くもないと自負している。では、攻撃箇所を察知するサイドエフェクト？ いや、違うな。この六本の間の有効打。その四本は躲すことも防ぐことも出来ない、いわゆる詰みの状態だったが、残りの二本は違う。避ける、防ぐことが可能であったにも関わらず受けたその二本に共通するのは、俺が君を見ずに攻撃した箇所による致命傷だった。つまり、だ」

樹神は一つ間をおいて、小さく言い放った。

「相手の視線が向けられている箇所を察知する、もしくはそれに近い能力と見た」

樹神は視線の先の影浦にそう突きつけると、笑みを浮かべていた影浦の表情が僅かに曇る。

だが、それも一瞬で直ぐにそれを引っ込めると、わざとらしく変な奴を見る目を樹神に送った。

「お前、戦いながらそんなところまで頭あ回してたのかよ」

「当たり前だ。初見の相手ってだけならいざ知らず、ここまで見事に攻撃を読まれたらその予測ぐらいはする」

肩を落としながらそんな風に言う樹神に、影浦は心のうちで戦慄する。シューターやガンナーのような中距離の打ち合いでもなければ、孤月のようなある程度の間合いを置いての打ち合いでもない二人の戦闘。それは側から見ていても理解が遅れるような高速の攻防なのだ。その合間に自分の繰り出した攻撃に対しての相手の反応を逐一

拾い、それらから相手の手の内を推測するのは正直自殺行為、反応が遅れる要因になりかねない。

故に、だ。

「(そこがアイツのサイドエフェクトに繋がんだろうな)」

影浦は樹神の挙動を見逃さないようにしながら、相手のサイドエフェクトの能力を考えようとするが、すぐにそれらを意識の外に追い出した。

「慣れねえことはしねえに限るな。とりあえず搔っ捌く」

そう小さく呟くと、樹神が口を開いた。

「それで、俺の予測は当たってたかどうかは言ってくれるのか？」

「ケツ、答える義理はねえが、当たらずも遠からずってとこだ。俺のサイドエフェクトはそんな簡単なもんじゃねえ」

それを聞いた樹神は「そうか」とこぼすと、次いで後ろに下がり始めた。

影浦との距離、およそ三十メートル。

もちろん、影浦もその後退を見て距離を詰めようとしたが、それよりも先に樹神の声が上がり、足を止めた。

「二つ、俺の予測に答えてくれた礼だ。俺のサイドエフェクトについてのヒント。俺のそれは反応じゃなく、反射に該当する。そして、もう一つ、『直列スコアピオン』の礼。中距離以外にも近距離でそういった使い方が出来るのを知れたのは貴重だった。だから――」

左足を引いて、右足を己の前に。

右肩を影浦に向けると、右腕を直角に曲げ、一定のペースで揺さぶり始めた。

左右は違うが、まるでボクシングのフリツカースタイルのような構えに、影浦は訝しげな表情を浮かべるが、樹神は構わず続けた。

「俺も一つ、これの使い方を見せる」

影浦のスイッチが切り替わる。

樹神のいった『直列スコアピオン』とはおそらく『マンティス』のことだ。そして、その使い方を見せるといつての構え。あれは確実に攻撃の準備だろう。

馬鹿正直に食らうつもりはない。だが、その防御としてシールドを使うつもりもない。それはこれまでお互いスコープオンしか使用しなかったという現状に反する。というか、ここまでスコープオンオンリーで続けた中で、影浦は自分から他のトリガーを使うことは絶対にしたくなかった。

だから、受ける。流す。もしくは避ける。

この距離、影浦も少し前に出ればマンティスの射程となる。

カウンター狙いで逆に獲るため、影浦は相手の僅かな動きも見逃さまいと集中する。

——樹神が動いた。

前後に振られていた右腕が先程より後ろに引かれ、前に出る瞬間。右足を僅かに浮かして前に出しつつ、身体も僅かに前のめりに。

そして、右足が再度地に着いたと思うと、ダアンツと音を立ててコンクリートの地面を叩き割り、それとほとんど同時に右腕が影浦に向けて振られた。

影浦はその矛先がどこにくるのか分かっていて。

樹神が動いた瞬間、彼の視線が向いたのはトリオン供給機関のある胸部。すぐにそこへ到来するであろう攻撃を受け流すべく、体を後ろに下がつつ、両手に持ったスコープオンで受けようと、スコープオンを発現させる。

——その瞬間には、すでに樹神の右手から伸びたスコープオンに貫かれていた。

「かつ……っ!!」

胸へと軽い衝撃と無意識に口から漏れた言葉。

それを踏まえてようやく攻撃されたことに気づき、そして驚愕する。胸への衝撃が、樹神の右手が振られるのと同様だったからだ。

「最大射程六十メートル。刀身形状自在のスコープオンらしからぬ、歪曲の一つもない最速最長の刺突『一閃』。ここが現実の市街地じゃなくて良かったよ」

誰にいうのでもなく、独り言のような声量で呟く樹神。だというのに、何故か影浦はその全てを明瞭に聞こえた。

「(クソがつ!)」

『トリオン供給機関破損。影浦緊急脱出。<sup>ベイルアウト</sup>7-0、樹神リード』

気のせいか、影浦はこの機械音声もいつもより遅れて聞こえたと思うと、次の瞬間にはブースのベットに放り出されていた。

この後、樹神は影浦のような近距離でもマンティスを使う戦法を取るようになり、影浦は『一闪』を使わせないように立ち振る舞い、度々死角を縫うような形で大ダメージを与えられるようになったが、ついには倒すまでには至らず、樹神のストレート勝ちで終わった。

◆? ◆? ◆?

影浦との十本勝負が終わり、ブースに戻ってきた俺は取り付けられているベットに座って、小さく息をついた。

元より荒船君や村上君から聞いてはいたけど、前回のマスターレベルの女の子よりも断然強かった。ましては近距離戦だったため、恐ろしくキツかったが、その分収穫は大きい。

「以前の地形利用以外に、攻撃を受けるつもりはなかったんだけどな」  
そう言つて、先程まで相手していた影浦の姿を思い出してみる。

直列スコープオンを利用した多角的な超攻撃。これを用いると経験上防御が疎かになるため、そこを狙って攻撃しようとしたが、逆に受けるのに手一杯になってしまう状況だった。

直列スコープオンは遠距離専用だと思っただけあって、近距離でも用途があるとは思ひもなかった。死角を縫う以外にも、近距離であえて使うことで予測が難しくなるため、最後の方はギリギリも良いところだった。

俺も八本目からちよくちよく試せはしたけど、練度は影浦に遠く及ばない。

ぶつちやけ使わない方が良い場面もいくつかあったほどだ。

「ただ攻撃の手札が増える分には困らない。その脅威も体験できたわけだし、練習しとくか」



その一言を最後にベットから立ち上がり、ブースから出る。

すると、目下のエントランスに以前女子中学生と戦った時よりも明らかに多い見物客の姿があり、その中の一人が此方を見たと思うと、次いでほぼ全員が俺を見上げた。

思わず一歩足を引いたが、その近くに荒船と村上の姿があるのを確認。すぐに飛び降りて彼らの視線から外れようとする。

そうして地面に着地すると、荒船らの方から此方に寄ってきてくれた。

「お前、すげえな。カゲ相手に全勝ストレートとは恐れ入ったぜ」

帽子のつばに触れながらそう言う荒船に、俺は小さく笑みを浮かべて息をついた。

「君らの言う通りだった。メチャクチャ強かったよ、彼」

「この前減点食らって5000ptになったが、元攻撃手四位だからな、アイツ」

「へえ、道理で。……ん？ 攻撃手四位から5000ptまで減点って一体何したんだ？」

「ボーダー幹部様の顎にアッパーをかましたんだとよ」  
「……………へえ」

まさかの原因で一瞬返す言葉をなくすが、なんとか納得の言葉を捻り出す。

その様子に荒船は笑っているが、村上は苦笑いを浮かべている。おそらくこれを聞かされた時、彼も同じような反応をしたのだろう。

「ところで、穂刈くんや途中で合流した北添くん、仁礼さんはどこに行っただんだ？」

「ああ、それは…………」

ふと荒船が視線を横に移す。

釣られてそちらを見ると、こちらへゆっくりやってくる影浦と北添、仁礼の姿があった。

「おいカゲ。そんなに凹むなよな。たまにはこんな日もあるって」

「うるせえ。凹んでねえつつってんだろ」

「イヤイヤ、嘘つくくなって。ほら、私の胸を貸してやるから、思い切り泣いていいんだぞ。あ、ゾエの腹でも可」

「光ちゃん、それ、ゾエさんサンドバッグにされる気がする」

なにやら疲れた表情の影浦に絶え間なく話しかけるサイドテールの少女とその二人の後ろを見守るが如く追従する膨よかな男性。聞けば二人とも影浦を隊長とする隊の一員らしく、はたから見ても仲の良さが分かる。

少女の名前は仁礼光、男性の方は北添尋という。

「おつかれ、カゲ。ボコボコだったな」

「うっせえ。次は勝つ」

村上がからかうように言うと、影浦が負けん気の色が浮かんだ目を此方に向けて、呟いた。

それに対して小さく俺は挑発的な笑みを浮かべると、影浦も「ハッ！」と笑って応える。

「とりあえず、毎週土曜日の午後三時から七時。こんぐらいの時間帯に顔を出そうと思ってる。リベンジなら喜んで受けるぞ」

「そうかよ。そんなときやあその笑み、搔っ捌く」

「ああ、楽しみにしとく」

そんな風に言葉を交わしていると、自販機に飲み物を買に行っていた穂刈が帰ってきたため、俺たちは約束通り影浦の家でもあるお好み焼き屋に向かった。

◆? ◆? ◆?

「よい……しよつと」

「わあー！ すごくいすごいー！」

「ふふん、そうだろそうだろ。お、そだ。私のお好み焼き、三葉ちゃんが焼いてみるか?」

「え、いいの?」

近くの駅前で妹二人と合流した俺たちは早速影浦のお好み焼き屋に行き、食事を始めた。

ちなみに席は俺の隣に二葉。対面にカゲ、村上、荒船の三人がおり、その隣のテーブルに北添、穂刈。対面に仁礼と三葉という順番だ。

本来なら三葉も俺の隣に来るはずだったが、来る途中に仁礼さんに懐き、今も隣でお好み焼きの焼き方を教えてくれている。

「仁礼さん、面倒見いいんだな」

「あん？ あく…そうだな。アイツの弟、アイツと比べて出来の良い奴らしくてな。姉貴風吹かそうにも隙がねえみてえで、ああいうのに飢えてんだ」

「なるほど」

影浦の説明に納得の声をこぼしつつ、次いで隣で黙々とお好み焼きを食べていた二葉に目を向けると。

「二作目が売れて二作目は名作、三作目は駄作つてのが映画の相場つて言われてるが、ターミオーターは二作目が良作過ぎたために三作目の内容がヒデエもんだった」

「あ、分かります。敵がチート過ぎる能力な癖に最後の決着が酷くあつさりしすぎ。二作目にあつた何度倒したと思つても復活するあの絶望感に比べるとどうしても見劣りしますよね」

「俺たちが求めた絶望感とはちとちげえんだよな。俺としてはストーリーが淡々と進み過ぎる上、主人公とヒロインの関係性とかが薄すぎねえかと思つたんだが」

「私もです！ 加えてT ー850が少し人間味が強かつたのもあれでしたねえ。というか、少し喋り過ぎじゃないかなくつて」

「全く同意だ。んで、その後の四作目、五作目もCGが進化したのが分かるぐらいでストーリーとしてはなあ。もう少し設定を練つて欲しかったな」

「スカイ○ットが拡散型のプログラムつてのは面白かつたんですけどね。これじゃあ、もし次作が作られても不安ですよ」

「まあ、見ますけどね」

なにやら対面にいた荒船と映画の話で盛り上がっていた。

合流した時は見たことない人だらけで緊張気味だったんだが、荒船らのお陰で今となつてはそれも砕けてる。

「ほかのメンバーも一緒ってなった時は心配したけど、杞憂でよかった」

俺はあと半分ほどになったお好み焼きを口に運びながら、隣のテーブルで美味しいと感動としている三葉に「そうか」と笑みをこぼしている影浦を見る。

ほんと、初対面の時はどうなるかと思ったが、丸く収まって良かった。

そんな風に思っていると、ふと村上が口を開いた。

「そういえば樹神君。カゲから七本目を取った時のアレはなんなんだ？ 見た目、ライトニングより速く感じたんだが、マンティスなのか？」

「マンティス？」

「スコープオンを繋げて間合いを伸ばす奴だよ。テメエの言う、直列スコープオンのことだ」

「ああ、マンティスって呼ぶのか、あれ」

村上の疑問に影浦が加わり、先ほどの個人ランク戦の話が始める。

「なにも難しいことはしてないよ。原理はそのマンティスとあまり変わらない。ただ、その速度と射程をより伸ばそうと工夫した結果があるんだ。俺は『一閃』って呼んでるけど、本部には使える人いないのか？」

「いねえな。そもそもマンティスも俺しかいねえしな、使ってる奴」

「何人か練習してただけだな。結構センスが必要らしいから」

「そうなのか。まあ、使い方に話を戻すけど、アレは自身の全体重を乗せて放つマンティスだ。格闘家や剣道の達人が放つ重い一撃みたいなもんで、腕だけじゃなく、真正銘体全部を使って放つ。それが熟達するだけ速さも増す。自分で曲がる余裕もないくらいにね。ただその分、放つまで時間が必要でな。二秒あれば打てるには打てるけど、その分射程も速さも下がる。大体二十メートルくらいか？ 速さも瞬く間ってレベルじゃなく、ギリギリ目で追えるぐらいだ。五秒くらいあれば、全力で打てる。あとは他の動きから繋がることもできるけど、まだまだ精密には程遠い。今んとこ、最大射程は六十メートル」

そこまで言うのと、俺は村上と影浦が複雑な表情を浮かべているのに  
気付いて首を傾げる。

「どうした?」

すると、村上が困ったような笑みを小さく浮かべて、口を開いた。

「いや、そんなに自分の切札を話していいのか? バレたらその分対  
策を取られて、個人ランク戦勝ちづらくなるぞ?」

村上のこちらの身を案じるような言葉。

横目に捉えた影浦も特に何も言う様子はなから、おそらく影  
浦も同様のことを言いたいのだろう。

だからだろうか、なにかを言うよりも先に笑いがこみ上げてきた。

笑い声を我慢するように顔を下に向けながら、それでもクツクツ  
クツと笑う俺に村上は不思議な表情を、影浦は怪訝な顔をして此方を  
見やる。

「いや、悪い。ちょっと予想外だった。俺が知らないだけで個人ラン  
ク戦はそんなに殺伐してるのか?」

「……いや、知られるのが嫌な奴がいるってだけだ。そこまでピリピ  
リしてるわけじゃねえ」

「ああ。ただ、秘密にしておきたいことを無理に言う必要はない。俺  
たちもそこらの配慮はしてるつもりだ」  
なるほど、と内心で納得する。

前回戦った中学生攻撃手の高速で移動するトリガー。あれは初見  
で見抜けないため、知らなければ殆ど獲られる。一応個人ランク戦も  
ポイントの競争だ。より多くのポイントが欲しければ秘密にもする  
だろう。

「(もしくは、秘密にしとくことで、初見で通用するかどうかを試すの  
も手なのか)」

俺はそこまで考えると、一息をついた。

「まあ、あれだ。たしかにそういう奴がいるのも分かる。でも俺はラ  
ンク戦を対人戦闘の特訓だと考えてる。対策されるならその上で倒  
す練習をする。初めて見る動きもトリガーも、戦闘の最中に対応す  
る。そういった意味で手強くなるなら大歓迎だ。それにな」

一呼吸挟んだ後、影浦と村上の二人を見据えて続けた。

「俺たち、ライバルであれど、敵同士って訳じゃないだろ？」

少し遠慮気味なその言葉に村上と影浦は呆けた表情を浮かべ、次いで影浦は舌を打ちながらそっぽを向き、村上は小さく吹き出した。

「そこは友だちとかじゃやないんだな」

「いや、まあ……会ったのも今さっきだからな。正直距離が分からん。取り敢えず、俺が思ってることを言ってみただが」

そう村上に返していると、不意に「オイ」と影浦が割り込んできた。そして、俺に指をさして堂々と宣言。

「俺のこと、ライバルなんて呼ぶんじゃないやねえ。さっきのバトルの戦績はお前のストレート勝ちで、明らかに俺の方が負けてんだ。一本も取れない奴からのライバル呼びなんざ屈辱でしかねえ。だからよ」

影浦はそこまで言うのと、俺を指していた右手を下げてテーブルに右肘を乗せて頬杖をついた。そして、視線を横にそらしつつも、さっきよりも随分と柔らかい雰囲気で――

「ダチでいいだろが」

そう小さく呟いた。

そんな影浦に村上が少し驚きを浮かべるが、すぐに俺に視線を戻すと、影浦に肯定するようにゆっくり頷く。

そのことに、俺はテーブルの上に置かれた自分の皿に視線を落とすと、数秒ほどの間を開けて「そうか」と言葉をこぼし、目を閉じて笑みを浮かべた。

「それは、嬉しいな」

影浦と同じぐらいの音量で呟く。

村上は嬉しそうに笑みを深め、影浦は「ケツ」とため息をこぼすようにして再び横に顔を背けた。

◆? ◆? ◆?

「今日はありがとうございました、荒船さん。お話しできて、凄く楽しかったです」

「ごちらこそ、ここまで話せる奴は初めてで楽しかったぜ。その上で俺のオススメの映画を何本か貸したいんだが、兄貴に渡せばいいか？」

「あ、えっと……」

店外に出て、あと少しで解散の流れになっている中、そんな会話していた二葉が言葉を詰まらせながら此方を見る。

それに対して、俺は小さく頷くと二葉は花が咲いたような笑みを浮かべて荒船に「はいっ！」と返した。

その後も楽しそうに会話する荒船と二葉を少し遠目に見ていると、ふと背後から村上に声を掛けられた。

「二葉ちゃん、荒船に随分と懐いたな」

「ああ、正直意外だったよ。あそこまで人と楽しそうに話す二葉は始めてだ」

「妬いたか？」

「まさか」

からかうような口調で問いかけてきた村上に、俺は余裕の笑みを浮かべて肩をすくめると、次いで三葉の方を見た。

仁礼と穂刈、北添の姿もそこにあり、特に仁礼とは夕食の前よりも更に仲良くなったようで、北添と穂刈に見守られながら仁礼と三葉は言葉を交わして笑っていた。

「(ほんと、この出会いに感謝だな)」

妹二人の表情を見て、心の底からそんなことを思っていると、ちょうど影浦が会計を終わらせて店の外に出てきた。

「ご馳走様。美味しかったよ」

「ならまた来やがれ。次もウメーもん用意してやんよ」

「ああ、言われなくてもまた来るよ。今度はカゲが働いてる時に、また家族で。あと、出来ることならまたこのメンバーで食べたいな。その方が、二葉と三葉も喜ぶ。もちろん、その時は自分らの分は出すよ」  
そんな俺の言葉に影浦は「そうかよ」とギザギザの歯を隠すことなく笑うと、仁礼と話していた三葉が俺たちに近寄ってきた。

「あれ？ 一兄、お好み焼きのお金、払ってないの？」

「うん、そうだよ。このお兄ちゃんが俺たちにお好み焼きをご馳走してくれたんだ。ちゃんと、お礼を言うようにな」

そう言うと、三葉は元気よく頷いて影浦に向き合い、口を開いた。

「ご飯、ありがとうっ！ ボサギザのお兄ちゃんっ！」

「ああっ!? ボサギザっ!?!」

影浦が小さく叫んだと思うと、右から吹き出すような音が二つ聞こえた。

村上と共にそちらに目をやると、仁礼と北添が影浦に背を向けるようにして体を震わせていた。

「デメエらっ!」

俺たちに遅れて二人の様子に気付いた影浦が仁礼と北添をぶちのめすべく駆け寄るが、仁礼達も素直に捕まるわけなく逃げ始めた。

だが、ただどこかへ逃げるのではなく、穂刈や荒船、村上、俺などを上手く使って逃げ回る。

それを見て、村上や穂刈、荒船ばかりでなく二葉や三葉も笑い出し、俺も無意識に声出して笑っていた。

「兄貴」

「ん？」

いつのまにか荒船の元から俺の方にやってきていた二葉が、俺の袖を引っ張る。

反射的に二葉を見ると、彼女は賑わう影浦達に目をやりながら、安心するような笑みを浮かべて呟いた。

「私、安心したよ。兄貴にも、良い友達がいたんだね」

俺はその言葉を聞くと、荒船、穂刈、村上。そして影浦達に視線を移すと、二葉と同じように笑顔を浮かべて言った。

「ほんと、俺にはもったいない人達だよ」



## 第六話 樹神一葉⑥

日付は影浦達との食事会からちようど一週間経った七月の第二土曜日。

俺は影浦達との約束通り、昼からボーダー本部に訪れて個人ランク戦十本勝負を行っていた。

一時間前に始めた十本勝負は既に三回目となっており、対戦相手も影浦から変わっている。

「スラストーオン」

そんな言葉が聞こえたと思うと、孤月と『レイガスト』と呼ばれるトリガーを二刀流で扱う村上が俺に向かってシールド突撃<sup>チャージ</sup>。

一閃を放とうとしていた俺はそれを見て放つのは間に合わない判断し、回避へ移行。そして、俺の横を通り過ぎるところをマンティスで合わせようとしますが、俺の横を通り過ぎると思った瞬間、村上は弧月を地面に突き刺し、それを軸にして回転。俺の方に方向を変えると、レイガストを刃<sup>ブレード</sup>モードに変更し、俺の下半身を狙うべく身を掲げて横一閃。

対して俺は村上が弧月を軸に回転している時点でグラスホッパーを起動。軽く横に飛んだ時に浮いた右足の着地点に配置すると、レイガストが振られる前にグラスホッパーに触れて跳躍。

村上の頭上を飛び越えながら村上の頭を目掛けてマンティスを打つが、それと同時に村上が弧月を逆手に持って地面から引き抜くとその軌道のまま旋空を放つ。

身をよじることで致命傷を避けるが、右手から飛び出したスコピーオンは音を立てて割れ、腰の辺りに斬傷が入る。

俺はスコピーオンをしまうと再度グラスホッパーを使って、村上から大きく距離を取って、腰の傷に触れた。

「(マンティスを出した瞬間を狙われたな)」

マンティスはその性質上、一度起動すれば他のトリガーを使うことは出来ない。つまり、俺がよく使うグラスホッパーによる回避やシールドが使えないタイミングを村上は見切ったということだ。

先程までは通じていたであろう手だったのだが、それを綺麗に返されてしまったことで俺の警戒度が上がる。

ただでさえ通常状態の刃<sup>ブレード</sup>モードと攻撃力を下げる代わりに耐久力を大幅に上げる盾<sup>シールド</sup>モードの二つのモードが存在するレイガストの防御力の高さから、少しやりにくくなっているというのに、単純なカウンターでは返さなくなっている。

「これが強化睡眠記憶ね」

俺は視線の先十数メートルにいる村上を見て、小さく呟く。

ランク戦を始めるにあたって、明かされた彼のサイドエフェクトは一度見た、体験したものを百パーセント記憶できるらしい。

それでも先の七本を全て獲ることが出来たので正直拍子抜けだったが、恐らくその七本の間<sup>間</sup>に第三者的に見た動きを一人称として見た時の動きに置き換えるのに時間が掛かっていたためだろう。

「丁寧に一閃の動きも潰してくれて、まあ」

「まいったか?」

「いや、逆だ。燃えてきた」

わざとらしく笑う村上に、俺は両手を垂らして戦闘態勢を取ると、頭の中でレイガストを避けて攻撃する方法を模索し始める。

そして、こつそりと一閃の初動をとるが、それを見逃す村上ではなく、先ほどと同じくスラスターを用いて距離を詰められた。

さつきと違うのは、俺が回避じゃなくて吹き飛ばされないよう踏ん張る態勢を取りながらスコープピオンで受けたところぐらいだ。

「バレたか」

「流石にな」

舌を出しておどける俺と苦笑いを浮かべる村上はレイガストを挟んでそんな風に言葉を交わすと、そこからまた刃を打ち合い始めた。

◆? ◆? ◆?

「なんか思ったより時間がかかってるな」

村上と樹神の十本勝負をエントランスのソファに座りながら観戦

していた荒船が、誰かに言うわけでもなくそう言葉をこぼす。

だが、影浦戦と荒船戦を見ていた訓練生はその眩きを聞いて、どこがだろうと思う。たしかに、荒船や影浦との十本勝負と比べると長く感じるが、それはレイガストという盾があるから仕方ないことではな  
いか、と。

しかし、荒船の横でソファを大きく占領しながら見ていた影浦はその付き合いの長さから言いたいことを察して口を開いた。

「アイツらの対戦時間が俺と鋼の対戦時間よりなげえのはアレだ。一葉の野郎、大きくマンティスを曲げるのに慣れてねえんだ。遠距離攻撃としてマンティスを使ってた弊害だろーな。そのくせ、鋼の攻撃を捌ける腕と厄介なサイドエフェクトを持ってやがるから、どっちが獲ることもなく時間が伸びるっつー結果になっただ」

そんな影浦の説明を聞いた荒船は視線はモニターに固定したまま「なるほどな」と納得する。

「ただ、アレだな。一葉のサイドエフェクト、だいぶチートだな。たしか『超加速思考的反射』だっけか」

荒船がため息混じりにそう言うと、影浦は個人ランク戦を始める前の会話を思い出す。

樹神が説明した自らのサイドエフェクト『超加速思考的反射』について聞いた時は長い能力名だな、という感想を抱いたが、その内容を聞くと開いた口が塞がらない結果となった。

『超加速思考的反射』は一応反射に分類されるらしいが、その反射現象が起きた時、樹神の世界は急激に遅くなる。まるで世界全てがスローモーションの映像として写るようになり、影浦達にとつての一瞬が樹神は十数秒に拡張される。その間に自分の視覚情報を整えることができ、そこからどうするか考えてから動くため、それが結果的に一瞬の出来事、つまり反射として機能するらしい。

そして、それは見たことない動き以外にも、意識になかった現象や音にも該当するらしく、今は慣れたが小さい頃は気持ち悪い思いを何度もしたと言っていた。

「加えて、三年間の戦闘経験から得たトリオン体操作能力。並大抵の

攻撃じやかすりもしないつつつたな。まあ、実際その通りだったわけだが……」

荒船は先ほどの十本勝負を思い返す。

もちろん荒船もマスターランクに至ってるだけあってスコープオン使用との戦闘は承知していた訳だったのだが、孤月の間合いよりも更に近い攻防故にやりにくさが凄まじく、気付いたら獲られていることが半分で、残り半分は距離を取ろうとする隙を突かれてマンティス、もしくは一閃でやられるといった展開だった。

「意識の外から攻撃するか、分かっても防げない所まで追い詰められれば負けるとか言ってたが、正直一葉が攻撃手相手に負け越す所が想像できねえな。射手、もしくは狙撃手じゃねえと獲れねえんじやねえか」

「俺が獲る」

荒船の弱気な発言に対して、影浦がいつもより明瞭な声でそう言うのと、荒船は横目に影浦を見て笑みを浮かべる。

『トリオン供給機関破壊。村上緊急脱出。810、樹神リード』

その時、聞き慣れた女性の声を模した機械音がエントランスに口ビーに響いた。

村上の胸には歪曲の一切がないスコープオンが突き刺さっており、それを防ごうとしていたレイガストとシールドが割れていた。

瞬間、村上の姿が光と化して、空に打ち上がった。

「まじか。レイガストで防げないのはさつき見たが、集中シールドを重ねても無理なのか」

驚愕を通り越して呆れになったのか、荒船は苦笑いを浮かべていると、影浦が頭を掻きながらため息を一つ。

「マンティスつつのは腕の振りに乗せて推進力を加えんだが、結構余計な力、遠心力とかに引つ張られる。俺も最初は変に曲げ過ぎたり、思ったように伸ばせねえこともあった。それを、アイツは全体重と腕の振りによる推進力全部を一点に乗せてる上、マンティスの先に結構なトリオンを込めてやがる。結果、受け流すのも軌道をそらすこともできねえほど速く、重い。ぶっちゃけ神業だぜ、あれ」

「ん、言われてもパツとしねえが、カゲがそこまで言うならそうなんだろうな。デメリツトも溜めが少し長いのと放つ前が分かりやすいことぐらいしかねえし、生駒さんの旋空に並ぶ神業なのか？」

そんな風に思案しながら影浦に向けていた視線をモニターを戻すと、ちようど樹神が九本目を獲った瞬間であつた。

今度は一閃ではなく、単純な攻防の末の決着だつたようで、村上の右腕は切断されており、上半身を斜めに切り裂かれた形で緊急脱出ベイルアウトしていった。

だが、樹神も右足の太ももと左肩からトリオンが漏れており、そして首には深さ一センチほどの傷が出来ていた。

「お、鋼の奴、結構良いとこまで行つたんだな」

「いや、鋼が最後の方欲張りやがった。首の傷は一葉が鋼を釣った結果の代物だ」

少し目を離して隙に起こつた決着であつたため、荒船は最後の方を見てそう感想をこぼしたが、会話を交えつつもスクリーンから目を離していなかつた影浦がそれを否定する。

荒船はそんな影浦の言葉に素面でいるが、内心では驚いていた。それは戦いの内容を読んだことではなく、それとは別のことだ。

「(そーいやカゲの奴、一度もスクリーンから目を離してねえな。ここまで集中して観戦、いや、分析すんのは初めてだな)」

そうしてる内に始まるラスト十本目。

これまでの対戦から後手に回ると不利と判断したのか、樹神がガンガンに攻め始め、村上もまた、それに対してレイガストを駆使して防ぎつつ、度々孤月を振るっていた。

影浦はその一挙一動を見逃さまいとより集中して分析。

荒船はそんな影浦を横目に、いつのまにか集まっていた観客ギャラリイに目を配る。もちろん、訓練生の姿の方が多いが、それでも見知った顔が何人かいる。

ただでさえ天才中学生黒江や攻撃手の中でも最上位に位置する影浦を全勝ストレートで下したことで噂になつていたのに、これで一層注目されることになるな。

そんな風に荒船が考えていると、ふと最前列の方で異色を放つ二人の男女が目に入った。

少し遠目だったため、少し人物の把握に時間がかかったが、少し注目して見てみるとその二人が誰なのか直ぐに理解できた。

故に、荒船はこれから起こるであろう出来事が簡単に予測することができ、嫌そうに顔を歪めて「げっ！」と呟いた。

影浦がそんな荒船の様子に気づくことはなく、鋭い目つきを更に鋭くさせ、スクリーンを見ていた。

◆? ◆? ◆?

『伝達系切断。村上緊急脱出。<sup>ベイルアウト</sup> 十本勝負終了。勝者、樹神一葉』

村上の姿が消えると同時、本日三度目となる勝者を呼ぶ機械音が耳に届いた。

次の瞬間には俺も光に包まれ、ブースの方に転移。大きく息を吐いてベッドに座り込んだ。

「あの盾、めちやくちや疲れるな。正面から落とすには邪魔過ぎるし、機動力も高い。また新しい課題だな」

俺は大きく伸びをしながらそう言うと、次いでベッドに横たわる。一応トリオン体に生身のような身体的疲労はないが、精神は違う。

神経を擦り減らすような戦いを連続で行えば頭も疲れるし、それが身体の違いとして残る。

故に俺はそのまま数秒目を閉じたまま寝転がっていたのだが、ふとブース内に声が響いた。

「あら、大丈夫?」

「ん?」

聞いたこともない声、それでいて女性の声だった。

急に話しかけられたことに加え、ここは俺一人しかないはずのブースということもあり、俺は反射的に声の発生源へと目を向けた。

ストレートのロングヘアに口元にある黒子が特徴的な長身の女性であった。高校の同級生がボーダーの女子はレベル高いと話して

いたところを小耳に挟んだことはあるが、この人は全くの別。モデルなんじゃないかと思うほどの美形であった。

まあ、それで見惚れることはなく、自分でも良く分からないが逆に警戒心が芽生えた。

「……………どなたでしようか?」

自分でも声が少し固いことが分かった。

しかし、目の前の女性は特に気にした様子はなく、こちらを見据えて口を開いた。

「私は加古望。A級六位部隊の隊長よ。よろしくね」

「弓手町支部所属、樹神一葉です」

一応名を覚えてもらった後のマナーとして、加古望と名乗った女性に自らの名を返す。

それに対して、加古は笑みを深くした。

「知ってるわ。双葉がお世話になったのだから」

「……………双葉?」

一瞬妹の二葉のことかと思っただが、直ぐ様頭の中でその可能性を棄却。同名の別人として該当する者を記憶の中で探す。

そうして三秒ほど。おそらくボーダーの関係者であり、名前からして女性という情報から、一人だけ候補が出てきた。

「もしかして、背中に弧月を差している女子中学生のことか?」

「そうよ。彼女の名前は黒江双葉。私の部隊のメンバーなの」

加古がどこか満足のいった表情で頷くと、次いで両目を細めて此方を見据えた。

その視線から何か嫌な予感がした俺は、相手が何をしてくるにしても対応できるように加古の動きに集中する。

そんな俺の警戒に対して、加古はブースの入り口から俺の目の前まで歩み寄ると、右手を持ち上げて自身の目の前に差し出して言った。

「単刀直入に言うわ。私たちの部隊に入らない?」

「……………は?」

自分が勧誘されていることに遅れて気付いた俺は、少し呆気にとられながらも、小さくそう呟いた。

「私たちのチームはね、隊員のイニシャルをKで揃えてるの。それでいて才能がある子を誘おうと思ってたんだけど、思いの外そういう子に出会わないのよね。でも先週貴方のことを黒江から聞いて、今日貴方の試合を見てビビって来たわ。どう？　ウチに入らない？」

俺の反応をそっちのけでグイグイ来る彼女に、俺は口を挟めなかった。

そんな中、どうにか発言しようとして口を開いた瞬間だった。

「抜け駆けとは、相変わらず狡猾な女だな」

そう言葉を放ちながら、新たな人物が入室してきた。

上下黒のスーツを着こなし、ポケットに両手を突っ込んで歩み寄ってくる男性。その表情は見るからに不機嫌で、加古を罵りながらも視線を此方に向けていた。

それに対して加古はその男の方に振り返り、挑発的な笑みを浮かべた。

「あら、抜け駆けなんて人聞きの悪い。私は貴方と違って行動が早いだけよ。自分の行動の遅さを人のせいにするのは止めた方がいいわよ、二宮くん」

「声をかけるべきタイミングを弁えているだけだ。試合終わりの休息を邪魔するような自分本位な行動をとる誰かと違って、な」

ああ、この人ら仲が悪いんだな。

明らかに棘のある言葉を交わし合う二人を見てそう思う。

正直目の前でやらないでくれと思うが、どうやら二人の目的が俺のようなので、仕方ないようにも思える。

それに、この二人も目的を忘れていがみ合い続けることもないだろうと考え、無言で二人の睨み合いが終わるのを待つ。

すると、男性の方が仕方ないような仕草で加古から視線を外すと、俺を見て口を開いた。

「二宮匡貴だ」

「弓手町支部所属の樹神一葉です」

簡潔な自己紹介に内心で苦笑いを浮かべながら、俺も自らの名を返す。



二宮はそれに対して、リアクションも表情の変化もないまま三歩ほど前進して俺の目の前に立つと、悠然とした立ち姿で言い放った。  
「十本付き合え。実力を見る」

——年上とはいえ、ここまで高圧的な物言いつて凄いな。  
俺は無表情に見下す二宮に、そんな感想を抱いた。

## 第七話 樹神一葉⑦

「諏訪さん、あの噂の攻撃手が二宮くんと対戦してるみたいですよ」  
「なにいつ!? こうしちやいらねえ、見に行くぞっ! 日佐人は!」  
「既に観戦してるみたいですよ。一応日佐人からの情報なので」

「熊谷先輩っ! 那須先輩っ! この前の弓手町支部の人、二宮さんと十本勝負を始めたみたいですっ!」

「この前、熊ちゃんと茜ちゃんが見たって言っていた人ね。そんなに凄いの?」

「凄いよ。正直、私じゃ勝てる気しなかった」

「そう。じゃあ、ちよつと見に行こうかしら」

「王子」

「ん、なんだい?」

「樹神が二宮さんと十本勝負を始めた」

「へえ、コダマルクが………早速見に行こうか」

「ああ」

「太刀川さん、出水先輩! 今ランク戦ロビーで」

「うるせえっ! ようやく落単の危機感持った太刀川さんにランク戦云々の話をすんじゃねえっ!」

「ぶべらっ!」

◆? ◆? ◆?

二宮とランク戦を始めて、およそ二十分が経過した。

ボーダー本部にて始めて戦う兵種『射手』<sup>シューター</sup>の正隊員。トリオンの弾丸を宙に出現させ、それを打ち出すことで戦う彼らは、銃を用いて弾丸を打ち出す『銃手』<sup>ガンナー</sup>と違い、攻撃の度に弾丸の威力・弾速・射程といった細かい調整、『置き弾』と呼ばれる発射タイミングの遅延、トリ

オンキューブの分割による弾幕の実現などが出来るのが特徴だ。

その反面、射程の拡張が備えられ、トリガーを引くだけで発射することが出来る手間のない銃トリガーと比べると射程が短く、トリオンキューブの発現の後にその分割、発射方向の指定を行ってようやく飛ばすことが出来るため命中精度が銃よりも低く、慣れるまで時間がかかる上、扱うには一定のセンスが必要という欠点がある。

俺が訓練生の時も、射手スタイルで戦っていた訓練生がトリガーを思うように扱えず、ポイントを取られ続けていた者が一定数いた。

しかし、あるレベルまで達した射手は置き弾やトリオン分割を駆使し、さながら詰め将棋のような戦いを行うようになり、シールドもない訓練生時代は近付くのに一苦労だった。だが、それは一つのトリガーしか使えなかった訓練生の時の話で、シールドが使えるようになった正隊員が相手とならば近づかれやすく、また攻撃が通りにくいための単独で勝つのは難しいだろう。

そんな中で総合二位まで駆け上がった二宮。一体どれほどの強者なのかと思ったのだが――

「(なんなんだ、この人)」

現在十本中の四本目の戦闘。

今のところ先の三本は全て俺の勝ちで終わっている。

『アステロイド通常弾』を中心に、トリオンにモノを言わせた弾幕と火力のゴリ押し戦法の中、縦横無尽にグラスホッパーで跳び回り、何度目かのトリオンキューブ発現と同時に俺がマンティスを打ち出して二宮のトリオン供給機関を破壊した一本目。

置き弾を駆使して俺が近付きにくいよう弾幕を張るが、一瞬の隙を突いてグラスホッパーで加速し、二宮の横を通り抜きがてら伝達系を切断した二本目。

一本目の戦法に加えて『ハウンド誘導弾』と呼ばれる追尾弾を多数展開して俺を追い詰めつつ、アステロイド速度重視の通常弾でとりあえず削りに来る中、こつちもグラスホッパーを二宮を囲うよう多角的に展開して情報を増やした後に、単純な読み合いで獲ることができた三本目。

側から見れば順当な勝ちに見えるだろう。

しかし、俺は以上の戦闘を経て、二宮の戦法に僅かな違和感を感じていた。

そして、現在行なっている四本目の勝負を行う二宮の動きを見て、その違和感は確信に変わる。

「最初の数本、手を抜いてたのか？ 本数を重ねる毎に、明らかに手強くなっていった」

そう判断した俺は、次々到来してくるトリオン弾をグラスホッパーを駆使しながら避けつつ、横目に二宮を見る。

彼はポケットに両手を突っ込みながら、周囲に六十ほどに分割したトリオン弾を待らせて俺を観察していた。

この視線に関しては一本目から変わらない。

完全に品定め、どのくらい動けるのか、どれ程対処できるのかを見ている目だ。

「(實力を見ると言っていたが、単純な勝負じゃないのか……)」

俺は誘導弾の誘導半径を見切って、グラスホッパーを足場にして紙一重に避けると、次いで二宮にマンティスを放つ。

直線的に撃ち放ったマンティスは二宮の胸辺りまで直進するが、すぐ二宮の目の前にシールドが展開、激突と同時に砕け散る。

その後、二宮の側で浮遊していた四角錐に何等分にもした弾丸の数々が次々と射出され、俺を撃ち抜かんと到来してくる。

「(単純なマンティス一発じゃ取れないか。とりあえず攻めに転じたいが、マンティスを連発できるほどの隙もなければ、待機してあるトリオンキューブ(?)のせいで近付くのも難しい。と、なれば)」

俺はスコープオンをしまい、両手のグラスホッパーを起動すると三本目と同様二宮を中心にして半径十メートルほどの球上にグラスホッパーを展開、二宮を翻弄すべく跳躍して回る。

加速していく景色の中、端に映る二宮の姿に変わった様子はない。ただ、いつ来ても迎撃できるよう更に細かくトリオンキューブを分割して、俺が突撃してくるのを待つ。

ここまでは三本目と同じ。

だから、ここからが勝負。

俺は無数のグラスホッパーの一つに足が触れると同時に、右手のグラスホッパーを起動して新しくグラスホッパーの足場を作った。

すると、二宮の周囲に浮いていたトリオンキューブが射出態勢となり、丸みを帯びる。

流石は総合二位、凄まじい反応速度だ。

しかし、攻撃してくると考えた二宮とは打って変わり、俺が指定したグラスホッパーの方向は二宮とは逆方向であった。

地上六メートルほどの高さから地面に向かって突っ込んだ俺は左足から着地するが、その加速した勢いを殺しきれず、左足が地面を砕きながら二メートルほど突き進み、なんとか停止。

そして、体の勢いに流されて浮いていた右足が着地した瞬間、割れていた地面を更に砕く勢いで踏み込み、同じく勢いに流されて後ろに仰け反っていた身体を前に倒して右腕を振るう。

後ろへ流れていく力をこらえ、身体を前へ倒すことで生まれる反発力を利用して打ち出すのは俺が得意としている『一闪』であった。

視線の先の二宮が怪訝な表情を浮かべる。まるで、それで本当に打てるのかと訴えかけるような表情だった。

たしかに、本来の方法とは別のモーシヨンによる一闪は速度と威力は変わらないものの、通常と比べて精度は落ちる。加えて、現在の俺と二宮の距離は二十メートルほどなため、少し手元がズレれば二宮を獲ることは出来ない。

だからこそ――

「(針の穴を通す!)」

全神経を集中し、右腕を二宮に向けて振るった。

瞬間、空気を切り裂くような鋭い音が辺りに響き渡る。

遅れて聞こえたのは、シールドが砕ける音。

見れば、打ち出した一闪が二宮の心臓部を貫いていた。

『トリオン供給機関破壊。二宮緊急脱出<sup>ベイルアウト</sup>。4-0、樹神リード』

二宮は自分の胸元に視線を落としながら小さく舌を打ったと思うと、彼は光と化して空に打ち上がっていった。

「よしこや」

俺は右手から繰り出したスコープオンを消すと、小さくガツツポーズをした。

◆? ◆? ◆?

「あら、二宮君ったら奮闘空しく四連敗ね」

モニターに映る試合を右手を頬に添えながら見ていた加古が、四本目を終えると同時にどこか嬉しそうに笑う。

その様子を後ろから見ていた荒船は苦笑いを浮かべると、次いで隣の影浦を見やった。

「チツ、二宮の野郎オ」

モニターを見る目つきは鋭く、右足は貧乏ゆすり。

誰が見ても明らかに不機嫌な様子であった。

そんな影浦を見て、どう言葉をかけるか荒船が悩んでいるその時だった。

「二宮くんがごめんね。私も止めたんだけど、強行されちゃった」

「うおっ!」

いつの間にか、先程まで視線の先五メートルほどにいた加古が影浦のすぐ横まで来ており、荒船は驚きの声を上げる。

影浦は横目に彼女を見ると「ファントムばばあ」と小さくこぼして、乱暴に髪を掻いた。

「アンタが二宮より先に一葉のブースに入るところを見たぞ。アンタが蒔いた種じゃねえのか、アレ」

「あ、そうなのよ、聞いて。二宮くんったら、私が先だったのに横入りしてきたのよ。酷いと思わない?」

少しズレた回答を返してきた加古に影浦は更に苛立った表情で舌を打った。

「誰が先つつーなら、俺らが先で、アンタらが横入りしてきてんだ。二宮のアレをアンタがどうこう言える立場じゃねえぞ」

「あら、それはごめんなさいね。悪気はなかったの。ただ、ほんとに面白い子だったから声をかけずにいられなかったのよ」

相変わらず年上だろうが噛み付いていく影浦と自分のペースを崩さない加古のやり取りを、荒船は冷や汗をかきながら見守りつつ、横目にモニター内で激闘を繰り広げる樹神を見る。

元々荒船達との個人ランク戦の約束でやってきた樹神だが、その目的は様々な相手と戦って経験を積むことであるため、二宮ほどの実力者に対戦を迫られれば結局は承諾するだろう。

それは分かっている。しっかり俺たちに断りも入れてきた。

だが、分かっているも荒船は今樹神に勘弁してくれと内心思っていた。

次は自分の番と英気を養っていた影浦。それを邪魔された苛立ちが無邪気な加古さんの言葉によって更に増していつている。

「恨むぜ、一葉」

ふと自身の苛立ちに気付いた影浦はこれ以上のイライラを募らせないよう加古との会話を断念して口を閉ざす。

その様子にいち早く気付いた荒船はこれ以上影浦を刺激しないよう加古に声をかけた。

「加古さん、同じ射手シューターである貴方から見て、一葉の動きはどうですか？」

その質問に、加古は影浦に向けていた視線を荒船に移すと、次いでモニターを見た。

「ん、そうね。良く動けてるのだけれど、少し拙く感じるわね。あの機動力とマンティスを持つてるならもう少し攻めてもいいと思うんだけど、変に受けに回ってる印象があるわ。攻め方を観察してるのかしら？」

荒船と影浦は加古のその感想から、これまでの樹神の戦闘スタイルを思い出してみる。

黒江戦、影浦戦。そして今日の三戦。そのほとんどで共通して挙げたのは、『初めて見る動きに対して観察する傾向がある』のと『その際、自分から攻勢に出ることはなく、相手の隙をつくようにして獲っている』ということだった。

癖とも取れるこれらの傾向は、おそらく樹神のサイドエフェクトに

よる弊害だ。

本来初めて見る動きであれば、反射的に反応しなければならぬことが多く、対応できなければ死あるのみ。故に大半の隊員はそれらに対応しながら自分の得意な形に持ってこようかどうか手打とうとするだろう。

だが、樹神は違う。

初めて見る動きの相手であればあるほど、彼のサイドエフェクトは真価を発揮するため、それを捌くのが常人と比べて容易なのだ。

それ故の慢心か、それとも対応力の訓練として始めた方がいいが長い年月でそれが身体に染み込んでしまったのか、彼は基本受けるか避けるの選択肢しか取らなくなっている。

もちろん、今日の荒船や村上、影浦相手のランク戦のように、一度知り得た動きや力量を計り切った相手であれば自ら攻勢に転じているが、今戦っている二宮は相手を凶るようにして徐々に戦法を強化、拡大していつている。

つまり、樹神の知らない動きを行い続けているのだ。

ただでさえ射手はその特性上、手数や絡み手が多いというのに、こうなつては樹神は相手の力量を計り切るのは難しい。

故に全力で攻勢に回る様子はない。ただ、彼の繰り出す新たな攻撃の中で、隙が生じるまで受け続けるしかない。

しかし。

「アイツはこれまでの四本、二宮さんの僅かな隙を縫って勝ちに繋がてる。後手に回ってるからって不味いわけじゃないでしょう」

荒船は自らの考察の末、加古の感想に対して言葉を返す。

すると、加古は軽やかな笑みを浮かべて言った。

「もちろん。これはあくまで私が感じた印象。これでもそこらの子なら十分勝てるし、時間が経てば樹神くんが優勢になるわ。けどね」

そこまで言い切ると、ロビー内のザワつきが一段と増した。

反射的にモニターを見やる荒船。そこには――

「四本と少しの間、受けに回りすぎね。そろそろ二宮くんが樹神くんの動きを見切り始める頃合いよ」



身体のあちこちに穴が空き、苦渋の表情で緊急脱出寸前の樹神の姿があった。

驚愕の表情を浮かべる荒船と悔しそうな表情を浮かべる影浦。

彼らの視線の先のモニター内で、樹神を指差していた右手を再度ポケットにしまった二宮は、身体が崩れ始めた樹神に何かを呟くと、光と化して空に打ち上がった樹神を見送り、小さく息を吐いた。

◆? ◆? ◆?

『トリオン体活動限界。樹神緊急脱出。4-4、ドロー』

今日で何度目かの身体を何かが貫いていく感覚を受けた後、無造作にベッドに放り出される。

咄嗟に起き上がると、弾丸による衝撃を受けた背中に手をやって呟いた。

「不味いな、全く気付かなかった」

五本目の試合を皮切りに、複雑さが増した二宮の攻撃。

この四本の試合中、さながら詰将棋のように段々と自身が追い詰められるのが分かり、正直不気味なほどの読みで怖気が立っている。

たった四本の勝負で読まれるような単調な動きをしているつもりはないが、どうやら彼にとつては読みやすい動きらしい。

『正直だな』

初めて一本を取られたあの瞬間、二宮にポツリと言い放たれた言葉。

一体なにが正直なのか、それに対する考えはまとまらないまま新たな戦闘空間に転送された。

どうにか先手を取ろうと九本目の開始の瞬間に一閃の初動に入り、最短で放とうとする。

しかし。

「アステロイド  
通常弾」

それを予想していたのか二宮は速度重視の通常弾を四角錐型に六分割して速射。一閃の中断と回避を強制する六つの弾丸に、俺は横に

吹っ飛ぶようにして避けた。

トリオン体の身体能力を最大限に活かした身体操作法により、俺の身体は五メートルほど宙を飛ぶ。そして、着地の瞬間右足を軸にして回転し、二宮に向き直る。

その勢いに乗りながら、マンティスを発動。

一閃までもいかないものの、それなりの速度で二宮に向かっていく刃はこれまでと同じよう、広めに展開された二宮のシールドによって防がれる。

それを見終えると、俺はすぐさま後退。すると、先程までいた位置にトリオン弾が雨のように落ちてきた。

俺は両手でグラスホッパーを起動し、的を絞られないよう高速で辺りを移動し始める。

サブトリガーのシールドでマンティスが防がれる以上、最初の数手で獲ることが出来なかった時点で弾数に圧倒されるのは必然。故に、ここからは二宮の攻撃を防ぎつつ、反撃のチャンスを待つことになるのだが。

「(先の四本、こうなつて勝てた試しがないな)」

グラスホッパーで避けることに専念した時も、無理やり攻勢に出た時も、二宮の急所にあと少しで届きそうになった時も、無理やり一閃を打ち込もうとした時も、全て死角からの弾丸によって負けてしまっている。

百歩譲って死角から撃ち抜かれるのはいい。しかし、その死角からの弾丸がいつ発射されたのが全く把握できていないのが不味い。

一本目のゴリ押しは何だったのかと声を大にして叫びたいぐらいに細密に組まれた通常弾アステロイドと誘導弾ハウンドの弾幕。

恐らく歪曲してやってくる誘導弾ハウンドの対処を行なつて視線を切つてしまった時に追加のトリオン弾を打ち出しているのだろうが、全てを把握するには至れない。

結果、意識の外にある弾丸に穿たれる。

「くっそつたれ……っ！」

そう考えているうちに、合間合間に打ち込んでくる高速度の通常弾アステロイド

が右脇腹に被弾、態勢を崩す。

そのタイミングを示し合わせたかのように上下左右からやってくる誘導弾ハウンズドの嵐。

無理矢理グラスホッパーを右足の下に差し込み、後方へ直進的に下がるのでなく、打ち上がるようにして背後に下がると、いつの間にか背後に回っていたトリオンの弾丸が見えた。

それを見て避け切れたと思うと、視界の奥から風を裂くような速度で飛来した通常弾アステロイドに両腕と腹部が貫かれる。

明らかに今までよりも速いその攻撃に反応しきれず驚愕する俺は、瞬間的に二宮がわざと手札を隠していたのだと判断。取れはしていないものの、もう使い物にならなくなった両腕を横目に地面に着地すると、二宮を見やる。

途端、左右に大きなトリオンキューブを浮かべた二宮が、両方とも二十ほどに分割し、それらを面に広げながら撃ち放った。

サイドエフェクトが発動し、それら一つ一つの軌道を捉えることが出来た俺は、少し右の位置にてしやがむことで、一人がギリギリ通れる僅かな隙間を見つける。

流れるような動きでそこへ移動し、下回し蹴りを放つように回転すると、その際に見えた、またもや周囲を囲うように到来してくる弾の数々。

二宮の方向にグラスホッパーで加速して避けようと考えるが、再度彼を見た時に、六つほど未射出のトリオン弾が残っていたことに気付いた。

獲られると反射的に判断した俺は、最後の足掻きと言わんばかりに足でマンティスを放つ。

射出された六つの弾丸の合間を縫うようにしてマンティスが二宮に到来し、トリオン供給機関を貫くと同時、高速度のトリオン弾に喉部と心臓部を撃ち抜かれたと思うと、遅れてやってきた誘導弾ハウンズドの数々に、オーバーキル気味に消し飛ばされた。

『二宮、トリオン供給機関破壊。樹神、トリオン体、トリオン供給機関、伝達脳破壊。両者緊急脱出。4-4、ドロー』

この日五度目となるベッドへの放り投げ。

それによる衝撃もそつちのけに、直ぐ様上体を起こしてどうするべきかと思案する。

俺が三年半で培ったグラスホッパーを用いた高機動力とスコープオンの遠距離攻撃法。マンティスはシールドに防がれ、一閃は打つ暇を与えてくれず、グラスホッパーによる移動は直線的過ぎるのか軌道を読まれる。

俺が主力として使用していた殆どが二宮には通用しなくなった。

さつきは咄嗟に奇策として置いておいた足によるマンティスを使うことで相打ちに持ち込むことが出来たが、もう当たることはないだろう。

見せた手はすぐに対策されている。

故に、もし勝負するならまだ見せていないもので挑むしかないと考えた俺は何かないかと案を探すが、攻撃の一手で有効なものは何も出ない。

だが、一つだけ見せていないものを見つけた。防衛任務に出て半年間、まだトリオン体での動きが熟達する前に使っていたトリガー『シールド』。

サイドエフエクトの恩恵により、下手にシールドを使うよりも避けたり受けた方が強く、また一人で戦うことが多かった俺はシールドを用いて防御をしようとする、そこから遅れて多方向からの攻撃を受けることも多々あったため、動き回っていた方が安全であったという理由から使わなくなったトリガーだ。

正直今の今まで入れていたことを忘れていた。

「……よし、一応使い方は覚えてる」

ブース内でシールドを起動し、使い方を確認。

何度かシールドの形を変えながら、俺はこれをどう使うかを考えるが、それよりも先にラストの十本目が開始。ビル群の多いステージに転移された。

九本目と同様に開始直後に打ち込んでくる二宮。

それに対して俺は避けるのでなく、メイントリガーの方にセットさ

れていたシールドを起動、二十ほどの弾を受ける。

これはシールド硬度の確認を兼ねての試行であったが、全弾防ぎきった後のシールドの状態を見て、思っていた以上の手応えを得る。

二宮は俺が初めてシールドを使用したのを見て、僅かに眉をひそめるが、直ぐに追加のトリオンキューブを二つ生成、両方とも二十ほどに分割して射出。

威力重視の通常弾アステロイドだったようで、三十ほど受けた辺りでヒビが入り、最後の十発で割れる。

「ぐっ」

直ぐ様サブの方でグラスホッパーを起動して正面に立たぬよう立ち回り始める。

それを見て二宮は少しつまらなそうに目を細めると、俺の動きを視界に捉えながらフル誘導弾ハウンド。俺に向かって打ち出すのではなく、俺が行くであろう方向に射出していく。

それを見て、俺は自分が無意識に取った行動に小さく舌を打つ。

長年決まった動きしかしてなかったせいかな、反射とは別の瞬間的な判断にシールドや他の手が入ってこない。

攻めやカウンターといったものであるならばサイドエフェクトで幾らでも手を変えられるが、受けしか取れない中では大きな恩恵は受けられないのだ。

そんな自身の弱点について苦笑いを浮かべていると、さつきと同じように誘導弾ハウンドが着々と俺の逃げ場を埋めていく。

「射手相手の経験が浅すぎる。どうすればいいのか分からん」  
シューター

吐き捨てるかのようにそう呟くと、数秒して完全に誘導弾ハウンドに包囲される。俺は意識して別の手を使おうとシールドを起動すると、俺を囲うようにして展開、誘導弾ハウンドを防ぐ。

しかし、二宮はそれを確認すると、右で二十ほどに分割した通常弾アステロイドを放ち、それに遅れる形で左で生成したトリオンキューブを六分割して放った。

誘導弾ハウンドと最初の通常弾アステロイドでヒビ入る俺のシールド。そして遅れてやってきたトリオン弾に割られると思うと、次の瞬間大爆発が起き

た。

「うおっ!?!」

爆破の衝撃にシールドが割られ、次いでやってきた爆風に体が後ろに吹き飛ばされるが、爆風の半分はシールドが防いでくれたようで無様に転がることなく地面に着地。

炸裂弾メテオラと呼ばれる爆破効果のあるトリオン弾、もちろん使用されたのはこれで初だった。

まだ見せてないモンがあったのか、と驚愕を浮かべつつ前を見ると、二宮の姿を隠すように漂う爆煙幕。

それを視認すると、瞬間サイドエフェクトが発動。拡張された時間内でどうするか思考開始。

そして導き出した結論は真向勝負、つまりは突撃だった。

相手も俺もお互いの姿が見ることが出来ないこの状況、下手に回り込んで後手に回ると、また誘導弾ハサンドによる弾幕を受けることになる。

ならば俺が何処に出てくるか分からないこの瞬間、攻めに転じるには絶好のタイミングであるのだ。

俺はグラスホッパーを起動し、自身の出せる最高速度で煙の中に突っ込む。その際、シールドを目の前に展開することを忘れない。

右手にスコープピオンの刃を出現させながら、煙内から出る瞬間を待つ。

そして、ついに出た煙幕の外。視線の先で二宮を捉えた瞬間、俺の見る世界が急激に遅くなった。

今までに何千回と陥ったこの感覚、サイドエフェクトの発動。その景色の中で見たのは、ポケットから抜き出した両手で左右のトリオンキューブを合成する二宮の姿だった。

「っ!?!」

初めて見るその動作。

目を見開きながら高速で詰め寄る俺に、二宮は慌てた様子もなく「やはりな」と小さく呟くと、合成し終えたトリオンキューブを分割して、唱えた。

「徹甲弾ギムレット」

瞬間、撃ち出される六つの弾丸。

俺は二宮の眩きと初めて聞くトリガー名を耳にして、理解。

——二宮はこの場面での俺の動きすら読んでいたのだ、と。

シールドに着弾するトリオン弾。

今までのものとは比べ物にならないほど重い銃弾にたった数発でシールドにヒビが入る。

勝ちを確信したのか両手をポケットに収め直す二宮。

俺は悔しさ故に顔を歪める。

そして、大きな音を立てて割れるシールド——

一つ——

二宮は勘違いしていた。

「なにっ!?!」

シールドが割れる音に続いて、何かが着弾する音がしたが響いたかと思うと、二宮の胸部に鋭い衝撃が走った。

見れば、自身の心臓部を貫くようにしてスコープピオンの刃が突き刺さっており、背後には無傷の樹神が立っていた。

二宮は珍しく驚愕の色を浮かべると、次いで理解した。

先程包囲攻撃を防いだシールドはフルシールドではなく、一枚のシールドであつたのだと。

単純な話、二宮はシールドの強度を読み違えたのだ。

二宮ほどのトリオンを有した者が放つトリオン弾の威力は高い。

故に先程の包囲誘導弾攻撃ハウンドと通常弾数アステロイド十発、炸裂弾メテオラを半分防ぐためには、フルシールドを用いなければならないと二宮は考えていた。

そして、測れた樹神のフルシールドの強度。

問題なく徹甲弾ギムレットで破れる硬度と判断した二宮は樹神の行動を先読みし、トリオン弾の合成を開始した。

合成が終わる頃、予想通り凄まじい速度で肉迫してくる樹神。もは

や軌道の変更は不可能な速度に二宮は己の勝ちを確信したが、そこで初めて樹神の二枚重ねのシールド（フルシールド）を展開、全て防ぎきったのだ。

二宮はその事実を飲み込むと、次に樹神が二宮の合成弾を防ぐほどのシールドを展開できるトリオン量を有していることを知った。

そして、恐らく自分よりもトリオン量が多いであろうことも。

『トリオン供給機関破壊。二宮、緊急脱出<sup>ベイルアウト</sup>。十本勝負終了。勝者、樹神一葉』

総合二位と噂の攻撃手の十本勝負。

接戦の末、樹神の勝利で終わった。

◆？ ◆？ ◆？

大戦終了後、俺は二宮とロビーで向き合っていた。

その側で、面白そうに笑みを浮かべる加古と心配そうに見守る荒船と村上。影浦は少し離れたソファで不機嫌そうに視線を向けていた。

なにかを言うのでもなく無言を貫く二宮に、俺も口を開くことは出来ない。

少し気まずく感じていると、ようやく二宮が口を開いた。

「お前、スコープピオン以外に攻撃用トリガーを入れていないのか？」

「……はい、入れてません」

高圧的な態度故か、少し声が固くなりながらそう返答すると、数秒もしないうちに再度二宮が質問を投げってきた。

「何故スコープピオンしか使わない？」

「何故って……単純に今の装備で十分と判断したからです」

あくまでもトリオン兵相手なら、と心のうちで付け加えると、二宮は俺を見据えたまま黙る。

またもや訪れた気まずい雰囲気。

そのまま十秒ほどすると、不意に二宮が言い放った。

「玉狛に行ってみろ。良い経験が出来る」

「え？」



首を傾げる俺を差し置いて、二宮は自身の胸ポケットに手を入れると、一枚の紙を取り出し、俺の前に差し出す。

思わず受け取ってしまったその紙に書かれていたのは携帯番号。余計混乱する俺に、二宮は踵を返して告げる。

「俺の番号だ。また相手しろ。その時は、もっと手強くなっていることを期待する」

そう言うのと、俺を見ることなく歩を進めていく二宮。

そこでようやく状況の整理がついた俺は、一つ深呼吸を挟んで言った。

「ありがとうございます」

反応はない。けど、不思議と嫌な感じはしなかった。

俺は二宮の携帯番号が書かれた紙を落とさぬよう胸ポケットに仕舞うと、荒船らに視線をやった。

「ごめん、勝手した」

「いや、見事だった。まさか二宮さんに勝つなんて」

「最後の方で負けかと思っただがな」

申し訳なさそうに謝る俺に、村上と荒船が笑みを浮かべて答える。対して、俺はスッキリした表情で返す。

「いや、試合内容では完全に負けだったよ。最後の二本もたまたまなんとかなっただけだ。正直、次やって勝てる気がしない」

俺の動きは完全に読まれ、シューター射手相手の立ち回りの悪さや他のトリガーの使用の悪さ、長年決まった型でしか戦っていなかった故の単純な攻めの傾向。

多くの問題が露呈した戦闘だった。

携帯番号を渡されたはいいが、俺から連絡して対戦を願うのは遥か先だろう。

俺は課題の多さに苦笑いを浮かべていると、ふと二宮の言葉を思い出した。

「そうだ、二人とも、ちょっと聞いていいか？ 玉狛って支部の名前だよな？」

「一体何処にあるんだ？」

そう二人に訊ねると、荒船と村上は思い出したかのように「あっ」と

眩いた。そして、気まずそうに顔を見合わせる。

「あく、えつとな、一葉。場所を教えるから、二宮さんの助言も兼ねて今から行つてこないか?」

「ん? まあ、それでもいいが、どうしたんだ?」

俺の疑問に、荒船は帽子のつばに触れて答えた。

「以前、一葉の後輩からお前のバイトのことについて聞いたつて言ったの、覚えてるか? その後輩から、出来れば近いうちに顔を見てほしいつて言うように頼まれてたんだよ」

荒船がそう言うのと、となりにいた村上も同意するように頷く。

それを言われて思い出した俺は、その時に抱いていた疑問が頭の中に浮かび、重ねて二人に質問した。

「そういや、あの時は流れで聞き忘れたけど、俺の後輩を称していた奴の名前はなんなんだ?」

そんな俺の疑問に、二人は何か横目にアイコンタクトを交わすと、同時に口を開き、その人物の名を述べた。

俺はその名を聞いて、これから玉狛に向かうことを決めるのだった。

◆? ◆? ◆?

「あの人、二宮さんに勝っちゃった」

「すごいと思ったけど、ここまでやるなんて……」

「えつと、熊谷先輩、二宮さんと十本勝負したことあります?」

「あるけど、一本も取れたことないよ」

「はええ」

苦笑い気味に答えた熊谷の言葉に、日浦が感心するかのようなため息をつく。その反応は日浦以外に聞き耳を立てていた訓練生も同様で、総合二位をギリギリながら下した樹神に各々賛辞の言葉を述べる。

そんな中、先程から反応がない那須に、熊谷が振り返る。

すると、那須は口元に手をやって、何かに堪えるよう身体を震わし

ていた。

「っ?! 玲、大丈夫っ?!」

現在の那須はトリオン体であるため、生身の影響は受けない。しかし、それでも病弱な彼女の様子がおかしいことに気付いた熊谷は慌てた様子で那須の背中をさすった。

その時だ。

「……………た」

「え?」

那須が小さく呟いた。

それを聞き取れなかった熊谷は疑問を口に出すが、それに構わず那須は熊谷に向き合い、先程より大きな声で続けた。

「見つけた。くまちゃんっ、ようやく見つけたのっ」

「え、ちよ、玲っ?!」

何か感動するように熊谷に言い寄る那須に、熊谷はさらに疑問詞を重ねつつ、近くにいる日浦に心当たりがないか視線で尋ねる。

しかし、日浦は全く心当たりがないようで首を大げさに何度も振つてみせた。

困惑する熊谷と日浦。

それに気付かない那須は、玉狛に向かっていった樹神の後ろ姿を見えなくなるまで見つめていた。

## 第八話 樹神一葉⑧

加古の入隊の誘いを丁重に断り、影浦に玉狛へ行く旨を伝えた俺は今、ボーダーが所有する六つの支部の一つ、玉狛支部の前に来ていた。俺が所属する弓手町支部と違って住民への窓口業務行なっていないためか辺りに人の気配はなく、また建物が河川の上に建造されているせいか、ポツンと佇む姿に少し寂しげな雰囲気醸し出されている。

俺は荒船からもらった玉狛支部への地図とその建物の写真を見て、ここが目的地と判ると、玉狛支部の玄関に続く橋を渡り始めた。

その際、荒船らから聞いた玉狛の情報を思い返しながら、玉狛支部を見てみた。

「鋼が所属する鈴鳴支部と同じく、部隊を持つ支部。しかもA級部隊。しかし、所属人数は少なく、加えて本部とはレギュレーションが違うトリガーを扱っている。本部の一部の上層部と仲が悪い、か。なんでアイツはここに入ったんだろうな」

弓手町支部より少し小ぶりであるものの支部としては十分な規模を持つその建物に、俺はそんな疑問を抱く。

そして、辿り着いた玉狛支部の玄関。俺はインターホンを一度押し扉が開くのを待つと、数秒後、ギィと音を立てて扉が開いた。

「客か？」

その声は思っていたよりも下から聞こえた。

ゆっくり視線を下げてみると、扉を開けて顔をのぞかせていたのは明らか年が十にも至っていないような子供であった。

想定外な人物の登場に、一瞬声が詰まる俺。

しかし、すぐに平静を取り戻すと、一つ咳払いをしてから口を開いた。

「弓手町支部所属の樹神一葉だ。要件は…」

「む、なるほど、おまえがうわさの……。いや、それいじよーは言わなくていい。らいほーのもくてきはわかってる」

右手の平を掲げ、どこか気取りながら俺の言葉途中にそう言い挟む

と、入れと言わんばかりに扉を大きく開ける子供。

お言葉に甘えて玄関の扉をくぐると、広いスペースに出た。吹き抜けになっていて天井が高いため開放感が強く、少し感嘆の声を漏らす。

それに対して満足そうに頷いた子供は、次いで俺を部屋の中心に据えられたソファに案内すると、座って待つように指示。その後、奥の方に向かっていった。

特にどうすることも出来ないので素直に座って待っていると、奥の方から何やら騒がしい声が聞こえてきた。

バタバタという走る音に加え、「ちよ、何なの!？」という女の声と「はやく」と急かす先ほどの子供の声。

そして現れた子供と一人の少女。

腰まで伸ばした茶色の長髪に、整った顔体、お嬢様学校と呼ばれる星輪女学院の制服を着こなしている。そして、無理やり連れてこられたのか右手を子供に握られており、引つ張られてやってきた彼女は俺の姿を見ると若干訝しげに表情を歪める。

俺の方も同様に、別に望んでもいない人物を連れてこられたことにより困惑の表情を浮かべる。

そんな俺たちの様子に気づく様子もない少年は俺の方を向いてドンと胸を張ると、嬉しそうな声色で言った。

「さあ、ぞんぶんにたたかうのだ」

状況の理解が追いつかず、首を傾げる俺とそんな俺を見て混乱する少女。

数秒視線を合わせていた後、俺はポツリと呟いた。

「誰だ?」

「……………うちのセリフよっ!」

俺の疑問に対して、広いこの空間に叫ぶような彼女の声が響いた。

◆? ◆? ◆?

防衛任務があつたために家に帰れず玉狛支部に泊まった後日、私こ

と小南桐絵は支部内に設えられた自室で試験勉強に取り組んでいた。他の防衛隊員のようにボーダーと提携している高校であるならば、試験の点数が低かろうが融通を利かせてくれるが、私が通学しているのはボーダーと提携していない女子校の星輪女学院であるため、赤点の一つでも取るものなら容赦なく補習だ。

まあ、そのおかげでボーダーに所属している者も少ないため、私が戦闘員ではなく一オペレーターとして偽っていられるため助かっている。

私も花を恥じらう女子高校生。戦闘員、しかも攻撃手三位なんて固い肩書きを知られたくはない。

話を戻そう。

昼食を終え、再度勉強のため部屋に籠っていると、陽太郎がノックもなしに部屋に侵入してきて、私の手を取ってエントランスへ走り始めた。

特に要件を言うのでもなく、ただ「はやくはやく」と急かすように繰り返す。勉強の疲れもあつてか、陽太郎に引つ張られるがままに連れられると、客人と対面。直ぐにボーダー関係の人間だと分かった。

本部のような一律した隊服ではなく、玉狛のように支部ならではのデザイン。よく見ると、襟元に弓手町支部のエンブレムが設えており、その姿から直感的に只者ではない雰囲気を感じ取った。

しかし、当の本人は陽太郎に連れてこられた私を見て、首を傾げる。正直、ここまでの流れからこの客人が私を呼んだのではないかと予想していたため、その反応で少し混乱してしまった。

そうして、数秒ほど経った時だろうか。

ふと口を開いた客人の疑問に、私は無意識的に大きな声で返してしまったのだった。

「そうか、要件は分かった。こちらの不手際で混乱させてしまい、申し訳ない」

「いえ、こちらこそ支部の人間とはいえ、お子さんの許可で勝手に支部

に上がってしまい申し訳ありませんでした」

私の大声から騒ぎを聞きつけた我らが隊長、木崎レイジがあらかた客人である樹神一葉から要件を聞き取り、その後頭を下げると、樹神の方も謝罪を口にして頭を下げた。

今回の騒ぎの原因たる陽太郎は私の隣で頭に浮かんだタンコブを涙目で撫でていた。

ブったのは一体誰かって？ 私よ。

「しかし、貴方が噂の樹神一葉だったのね。樹神先輩って呼べばいい？」

「先輩呼びでも呼び捨てでもいい。ところで、噂ってのは？」

さっきのこともあるって、少し高慢に言い放った言葉であったが、樹神は表情一つ変えず、視線をレイジさんから私に移して質問を返してきた。

それに対して私は少し気圧されるが、直ぐに持ち直すと腕を組んで口を開いた。

「そうね。本部の方では突然現れた実力者。期待の新人と呼ばれていたA級の黒江ちゃん、粗暴ながらも実力は全攻撃手の中で指折りの影浦先輩を全勝で打ち破った台風の目、といったところよ。けど、私やレイジさんが聞いた話は別」

「？」

少しもつたいぶるようにそこまで話すと、続けてからかうような笑みを浮かべて言った。

「右も左も分からなかった自分を導き、守ってくれた頼りになる先輩。バイトをし始めたせいとか、学力が落ちてきてしまった時に時間を割いて勉強を見てくれた先輩。差し入れと称して自分の家族宛にクッキーやケーキを作ってくれた先輩。オススメのバイト先の紹介や、進路やバイトの掛け持ちの相談を受けてくれた先輩。一葉さんがいたから今の俺がある。こんな風に、無表情ながら揚々と語ってたわよ」

「……顔から火が吹きそうなんだが。ほんとにそれ、アイツが言ったのか？」

「事実だ。あそこまで語るのは、半年と少しの付き合いのある俺でも

初めてだ」

頬を僅かに赤らめ、少し恥ずかしそうにしながら眉をひそめる樹神に、レイジさんは珍しく微笑をもって答えた。

すると、観念したのか樹神は表情を緩めると右手を上げ、人差し指で頬を掻いた。

「とりあえず、帰ってくるのは六時以降になる。それまでゆっくりしていってくれ」

レイジさんはそう言うのと、次いでソファから立ち上がり、恐らく夜と朝にあつた防衛任務の報告書を書くために自室に戻ろうとするが、ふと立ち止まって振り返った。

「積もる話もあるだろう。夕食、食べて帰るか？」

今日の夕食当番であるレイジさんは短くそうたずねると、樹神は小さく首を振る。

「いえ、家族が待ってますので、七時にはお暇させていただきます。お気遣い、ありがとうございます」

軽く頭を下げてそう言った樹神に対して、レイジさんは「そうか」とだけ言い放って視線を前に戻すと、歩を進め始めた。

一見ぶつきらぼうな対応に見えるが、長年の付き合いの私には分かる。あれは丁寧な態度を取る樹神を気に入った様子で、夕食の同伴を断られて残念がつてるレイジさんだ。

そんな風に思っていると、レイジさんの姿が廊下の奥に消えていき、今この部屋に残ったのは私と樹神、陽太郎の三人。

少し気まずい雰囲気を感じると同時、別の人物がレイジさんと入れ替わる形で姿を現した。

「およう。お客さん？」

書類の山をダンボールに入れて抱える眼鏡を掛けた長髪の少女。なにを隠そう、レイジさんを隊長とする部隊、玉狛第一のオペレーターを務める才女、宇佐美葉である。

挨拶を述べる樹神に対して、彼女はダンボールを抱えたまま此方に向かってくる。その際、書類ではあり得ないガチャガチャと物が振られるような音がダンボールから聞こえてきた。



それに対して、私は呆れた表情を浮かべる。

「また改造トリオン兵作ってたの？ 来週テストなのに、勉強しなくて大丈夫なの？」

同じ高校に通う身として、いつ勉強しているのか分からない宇佐美に心配の声をかける。

すると、彼女はダンボールを下に置くど得意げな表情を浮かべて不敵に笑った。

「ご心配ご無用、ちゃんとやるときはやってるよ。ところで、その眼鏡の似合いそうな男性は、どちら様？」

「弓手町支部所属、樹神一葉だ」

樹神がそう名乗った瞬間、宇佐美の眼鏡がキラリと光った気がした。

「ほうほう。貴方が噂の樹神さんでしたか。私は宇佐美葉、玉狛第一のオペレーターを務めています」

「へえ、君がボーダー最強部隊のオペレーターなのか。さぞ優秀なんだろうな」

「いやいや、それほどでも」

樹神の言葉に嬉しそうに謙遜する宇佐美。

だが、それよりも私は樹神の言った一言に反応した。

「あら、ちゃんと太刀川の隊よりも私達の方が強いを知ってるのね。分かってるじゃない」

フンと満足気に笑うと、彼は少し困惑の表情を浮かべて言った。

「その太刀川って人は知らないが、ここに来るに当たって、荒船や鋼に聞いてたからな。部隊としてボーダー最強はおそらく玉狛だ」と

「……へえ」

部隊として、ね。

私は少し物言いたげな気分になるが、一応初対面で先輩の相手だ。変に突っかかるべきではないだろうと判断して、腕を組む。

そうしていると、宇佐美が口を開いた。

「そういえば、樹神さんはどうしてここに？ 普通に会いに来ただけ？」

誰に、とはわざわざ言わない。

私達玉狛の人間ならば、樹神がここに来る目的は第一に彼に会いに来たのだろうと予測できる。

現に樹神自身がそうだと肯定したところだし。

だが、彼はふと思いついたかのように「あ」と声を溢した。

「そういうえば、少し聞きたいことがある。ここに来る前、二宮さんに経験のため玉狛へ行くよう言われたんだが、何かここにあるのか？」

二宮という名前に、私と宇佐美は一瞬言葉に詰まった。

「えつと、二宮さんがわざわざ玉狛に？」

「そうだ」

「ちよ、ちよつと待ったー！」

少し困惑気味に宇佐美が樹神にもう一度確認する。

しかし、それよりも私は自らの疑問をぶつけるべく言葉を荒げた。

「あ、あんた、二宮さんと面識があったの？」

「いや、会ったのは今日初めてだが、それがどうしたんだ？」

「……………もしかして、二宮さんとランク戦したの？」

「したぞ？」

「け、結果は!？」

「一応、五勝四敗一分けで俺の勝ちだったが、正直次は勝てる気がしない。だから——」

樹神が続けているが、私は彼が二宮さんに勝ったという事実心底驚愕していた。

二宮さんと戦ったことは片手で数えるほどだが、それでも彼の強さは身に染みている。本来ならサポートが主目的な射手シューターがエースとしての役割を果たすためか、攻撃手アタッカーとの戦い方を心得ている上に弾幕が他の奴らと比ではない。

自分でまとめるのも癪だが、恐らく二宮さんよりも歴の長い私がランク戦をした場合の戦績も、よくて引き分けだろう。

「(そんな二宮さんに、初見で勝った?)」

心の中でもう一度その事実を確認すると、私は自尊心なのか好奇心なのか、はたまた闘争心からなのか分からないが、樹神との模擬戦を

望んでいる自分に気付いた。

ふと時計を見ると、現在は五時頃。

六時まで一時間はある。

視線を樹神に戻し、いざ試合の申し込みをしようと瞬間だった。

「たぶん、小南じゃないかな?」

「へ?」

不意に呼ばれたことで間抜けた声がこぼれた。

自身の名を呼んだ宇佐美と樹神は特に変わった様子はないまま此方を見ていた。

どうやら、考え事をしていたために話を聞き逃していたようだ。

「玉狛は各隊員に本部とはレギュレーションが違うトリガーを一つ持っているんだけど、加えて小南は攻撃手三位で、ボーダー設立当初からいる古参。たぶん、同じ攻撃手として、レイジさん達よりかは得るものはあると思う」

「なるほど」

宇佐美の言い分を黙って聞いていた樹神は、納得の言葉とともに立ち上がり、私に向き直ると言った。

「頼めるか?」

話の流れを捉え損ね、少し困惑していた私は何を頼んできているのか分からず、すぐに答えることが出来ない。

しかし、樹神が急かすのではなくしつかり答えを待ってくれたため、徐々に話を理解。彼の頼みがかかった途端、思わず口角が上がり上がった。

「いいわよ、ボコボコにしてあげる!」

年上相手とは思えないそんな言葉にも、樹神は微笑を浮かべて感謝を述べたのだった。

## 第九話 樹神一葉⑨

場所は玉狛支部のトレーニングルーム。

その数は本部よりも少なく、トリオンも有限ということで単なる模擬戦であればステージを凝ることは滅多にない。

それ故に、今から始まる樹神と小南の試合も正方形をしたシンプルな戦場となっていた。

『フル装備での模擬戦五本。準備はいい?』

「ああ」

「オツケーよ」

ふと空間内にオペレーターを買って出てくれた宇佐美の声が響き、向かい合う小南と樹神は了解の声をあげる。

樹神の視線の先で好戦的な笑みを浮かべている小南は先ほどのロングヘアとは打って変わり、トリオン体に換装することでショートヘアと変化している。おそらく、自身の髪が戦闘で邪魔にならないようにするためだろう。

小さく息をついた樹神は体の力を抜いて両手を垂らし、戦闘の態勢を整える。

一見隙だらけに見えるが、反射のサイドエフェクトを持つ樹神からすれば、下手に体に入力されると対応の柔軟性に欠けてしまう。それ故構えらしい構えを取らないのだ。

そんな彼を見て、小南は腰の辺りから二本の手斧を取り出すと逆手に構えた。

「(手斧の二刀流? 恐らく孤月だろうが、初めて見るタイプだな。リーチよりも手数重視か?)」

主に孤月とは刀型のトリガーを指すが、小南らA級ともなるとトリガーの改造権が与えられる。彼女の手斧もその類だろうと樹神は判断した。

「(まあ、旋空もある上、今回は玉狛のトリガーの使用も有りの模擬戦だ。締まっていこう)」

感覚を確かめるように軽く両手を握って開くを二回ほど繰り返す。

その瞬間だった。

『それじゃあ、模擬戦一本目、開始!』

宇佐美の宣言とほぼ同時、小南は姿勢を低く構えたと思うと、ドンッと大きな音を立てて地面を蹴り、凄まじい速度で樹神に迫った。韋駄天ほどではないが、グラスホッパーで加速した速さと遜色ないものに樹神が驚いたように眉を上げる。

だが、それと同時に樹神のサイドエフェクト発動、彼の見る世界が急激に遅くなる。

その光景から、樹神は小南が右手の手斧を左手よりも後ろに引いてすることに気付き、右手からスコープオンを出現させる。

そして、樹神と小南の影が重なる瞬間、小南の右の大振りに合わせようと樹神が右手を上げた途端、小南は右足で再度軽く地面を蹴った。

すると、直線的に進んでいた小南の体に回転が加わり、右の大振りの軌道が変わる。そして、先ほどまで全く不動であった左手も回転による遠心力につられ、大きく薙ぎ払う形で攻撃に加わった。

ギヤイン、と刃同士がぶつかる音を残し、小南が樹神の横を通り過ぎる。

小南は樹神から十メートルほどして右手で地面に触れると、そこを起点に体が上に持ち上がって前転。回転の勢いを利用したため、前転後の着地には樹神に向き直っていた。

そうして視界に入った樹神は右手と左横腹にスコープオンを生やした形で此方に振り返る途中であった。

小南は、彼が無傷であることに驚きはしない。

影浦をストレートで下し、二宮にもギリギリながら勝ったのであればこれぐらい防がれているだろうと予測出来ていた。

完全に樹神が小南の方に向き直る前に、小南は再度樹神に迫る。

樹神は慌てた様子もなく、今度は両手で攻撃を防ぐ、もしくはすれ違い様に攻撃を加えようとして前に構えた。

だが。

「っ!？」

あと一メートルほどで小南が先ほど回転を加えた時よりも強く地面を蹴った。

より強い回転が加わるのかと思うが、それは違う。彼女が蹴った地面の位置は自身の体の直ぐ真下の位置。当然、回転が加わらず、樹神の上へと飛んだ。

高速に動いていたため、本来樹神目線からすれば小南がまるで消えたように見えるだろう。

しかし、樹神のサイドエフェクトはここでも発動、空中に飛んだ小南の姿を見逃さず――

「っー」

彼女に遅れて向かってきたトリオン弾にも気付くことが出来た。

先ほど小南がいた面にシールドを展開した刹那、響き渡る四度の炸裂音。その衝撃により地面の表面は砕け、砂埃が舞い、視界を塞いだ。

「(炸裂弾?!?)」

二宮と戦った時にも用いられた『置き弾』による偏差攻撃。

だが、それ以上に樹神は射手シューターではない攻撃手である小南が炸裂弾メテオラを使ってきたこと自体に驚きを感じていた。

「(いや、それよりも彼女は何処に?)」

砂煙で視界が塞がってしまったため、小南が何処にいるのか見失ってしまった俺はグラスホッパーを用いて脱出しようと試みる。

が、爆発の残響の中、先にまたもや強い踏み込みの音が後ろから聞こえた。

流れていた景色がスローモーションに切り替わる。

自身の動きも遅くなった世界で樹神は後ろに振り向くと、そこにも砂煙が舞い、先の景色を見せまいとしていた。

しかし、ほぼ高確率で後ろから来ることは確定。そして、小南側からも樹神の姿が完全に捉えられないことを理解した。

対応を回避から迎撃に。

もちろん、ここは回避にした方が安全性は高いが、向こうも攻撃を繰り返すまで相手が見えないのは同条件。故に、サイドエフェクトでほとんど後出しのように対応できる樹神の方が有利と判断した。

遅れて砂煙を切つて現れた小南。

ここまでは樹神の予想通りではあったが、彼女が持つ武器を見て目を見開いた。

「(なんだその大斧っ!?)」

小南が攻撃しようとする振りかぶるのは小さな手斧ではなく、彼女の身長近くの大きさがある大斧。

サイドエフェクトがまたもや発動、初見ということもあって咄嗟に回避に移行しようとする。

しかし、地面を踏みしめた瞬間上手く力がこもらないことに気付く。

——さっきの炸裂弾か!

先ほど樹神を襲った四つのトリオン弾。その内の二つは樹神ではなく、彼の直ぐ近くに着弾した。

それによりどうなったのかというと、足場である地面が脆くなり、踏みしめた瞬間から砕けてしまうという結果になった。

そして、ここまでお膳立てしてきたということは、この攻撃は彼女にとつて必殺ということになる。

「上等だ」

準備していたスコープピオンを左の一の腕に沿う形で短く生やし、右トリガーはシールドを準備。

彼のトリオン量はボーダーでもトップクラスであるため、全てを防御に回せば大抵の攻撃は防げる。

それでも両手ともシールドにしなかったのは、右トリガーのシールドで少しでも勢いを殺す、もしくは軌道をズラせれば左手でいなし、カウンターを打ち込めると考えたからだ。

サイドエフェクトを発動しながら、横に大きく振り払われようとする小南の大斧の軌道を予測。なるべく硬いシールドを展開すべく、より狭い面積のシールドに設定。

「フッー」

小南が力強い言葉と共に大斧を斜め下から上に振り払う。

ただ腕だけで振るのではない。大斧を腕で固定し、身体を回すよう

にして振り払うことにより、彼女の全体重を乗せた重い一撃となる。対して樹神は、大斧の軌道を読み切つてシールドを展開。次いで左腕を持ち上げた。

激突するシールドと大斧。

だが、シールドはその分厚さから想像できないぐらい簡単に裂かれてしまった。

軌道も全くズレていない。

まさかこんな簡単に破れると思つてなかつた樹神はカウンターから本格的に受け流す方に移行する。

そして、左腕に備えたスコープオンで大斧を斜めに受けたが――

「(なっ!?)」

大斧がスコープオンの刃に沿うように流れるのではなく、無理やりスコープオンの刃を裂きながら強引に進んできた。

本来ならマズイと思う間に切り裂かれるだろうが、樹神はサイドエフェクトが発動中のため、それを視認しつつもほんの僅か時間があ

る。頼りない足場ながら少しでも切られるのを遅らせようと身体を右に倒す。しかし、その傾きの角度からこのまま倒れても大斧を潜り抜けないと理解した。

――だから、左腕と左足を犠牲にすることにした。

「ッ!」

右足で比較的崩壊が進んでいない足場を蹴つて、大斧の上を転がるように跳ぶ。

しかし、既に当たりかけている左腕と跳び越すのが間に合わない左足はまるで豆腐のように切り捨てられてしまった。

明らかに致命的な部位欠損。

ここが避けられても次の攻撃はほぼ避けきれないだろう。

故に――

「(ここが勝負だな)」

左腕と左足がなくなる感覚を意識の外に押しやり、必殺の一撃をギリギリ避けられたことに驚愕しながらも俺の横を通り過ぎようとし



ている小南を見て、どう攻撃するかを考える。

以前、樹神のサイドエフェクトを聞いた荒船や村上、影浦は反射を行った際、世界が急激に遅れることで後出しのように対応を変えられることが強いと言った。

これに関しては樹神もそうだと考えている。

しかし、それはそのサイドエフェクトの強さの一面でしかなく、このサイドエフェクトの真価は『守りと攻めのスイッチの切り替わりの速さ』にある。

今回のような初見での攻撃はほぼ全員避けるか防御に精一杯になるだろうが、樹神は先ほどまで守りの思考・態勢であったとしても、次の瞬間には攻撃を繰り出すことが出来るのだ。

それを当たり前だと思っている樹神が辿り着いた攻撃は、瞬間的に右手から孤月よりも長い刀身を出現させ、裏拳を放つようにして後ろ頭部を狙うといったものであった。

本来なら自身の後ろから繰り出される攻撃が見えない小南には避けようがない攻撃である。

しかし、彼女はまるでそれが分かっていたかのように頭を下げたそれを回避した。

まさかそんな避け方をすると思わなかった樹神は何度目か分からない驚きに目を見開く。

ただ、驚いていたのは小南も同じであった。

まさかあそこまで無理に自身の四肢を犠牲にしてまで無理矢理躲しときながら、カウンターを打つ余裕があると思っていなかったためだ。

ちなみに、避けれた理由は勘である。

視線を地面に向けつつも、髪の毛が切断される感覚から攻撃を受けたことを知覚した彼女は次の攻撃をどうするかを考える。通常なら元より避けられた時の行動を考えておくべきなのだが、正直先ほどの攻撃が避けられるとは思っていなかったことと、腕と脚共に一本ずつ獲ることが出来たため下手に攻撃はしてこないと思ったこと、先ほどのカウンターで精一杯であろうと考えたからだ。

結果的にこの油断が致命的だった。

ゾクリと背筋が凍るような感覚に襲われたかと思うと、瞬間背中に大きな衝撃。肺から空気が押し出されるような不快さを味わいながらもなんとか後ろを見ると、樹神と背中合わせになっていた。

嘘でしょ、と心の内で唱える小南。

先のスコープオンによる頭部攻撃から一秒経ったかどうかと言ったタイミング、先程大ダメージを受けたばかりの場面でここまで攻撃に注げるものなのか。

しかし、現に樹神は右手のスコープオンで攻撃しながら、サブトリガーの方ではグラスホッパーを起動して、小南に体当たりがかませる角度で右足の着地点に展開していた。

樹神の体当たりが遅れて自身の心臓部に違和感を感じ、それに視線を落とすと胸部からスコープオンが突き出ていることに気づく。

と、なれば――

『と、トリオン供給機関破損。小南、ワンダウン……』

自分で言っておきながら信じられないと言った風に力の抜けた声で告げる宇佐美。

受け身を取りつつも、無様に数度転がった小南に対し、樹神はスコープオンで簡易的に左足を作り出して着地。次いでお互いの視線が混じると、二人のトリオン体が欠損が完治、二戦目の模擬戦が始まるのであった。

◆? ◆? ◆?

「もう一回よ! もう一回! 勝ち逃げなんて絶対許さないわよ!」  
「流石にもう勘弁だ。そろそろ時間になる」

訓練室から出て来た俺を、小南が声を荒げながら追う。

最初の五本、一本目のように危ない場面がありながらも完勝したわけだが、今のようになんか彼女が再戦を要求してきたため結局計十五本の模擬戦を行った。

結果は変わらず全勝であったが、この戦いで得た経験値は大きい。

まず、そもそものトリオン体を活かした運動能力の高さが凄まじいものであった。トリオン体での運動能力は生身の何十倍にもなるため、慣れていないものが下手に全力を出すと体の連動が崩れてポロポロになるが、彼女のそれは他とはレベルが違った。

例に挙げると、一本目にあつたはじめの突撃。たった一蹴りであそこまでの速度を出せるのは生半可なものではない。

さすがはボーダーの古株だけあって、トリオン体の扱いは頭抜けている。

次に、単純な戦闘能力の高さ。攻撃手三位の肩書きは伊達ではなく、一つ一つの攻撃が次の布石となっており、加えてあの大斧。なんとか集中フルシールドでスイングの勢いを殺すことは出来ていたが、弾くことはただの一度もなかった。さらに言うところ、戦闘経験値の高さからか、自らの危機に対する勘が異常だった。

「まさか、一閃を初見で反応されるとは思わなかったな」

三番目の途中で使用した一閃。

十メートルほど離れていた彼女はその予備動作を見ただけで回避に全力を回し、ほぼ必殺の一撃を左腕だけで済ますことが出来ていたのだ。

本来なら回避しようが一閃の方が完全に早いため、必中必殺を誇っていたのだが、予備動作の途中で彼女のトリオン体の身体能力の全力で地面を蹴り、弾けるように右に跳んだため回避成功に至った。

人は見かけによらないな、と背後で半分涙目になっている小南を見ながらそう思う。

「お疲れ様。ほい、スポドリ」

「ありがとう。助かる」

「……………ありがとう」

模擬戦を行った訓練室の外でオペレーティングを行っていた宇佐美が労いを兼ねて用意してくれていたスポドリを受け取ると、直ぐにキャップを開けて口にする。

昼間から何も飲んでいなかったためか、一度でかなりの量が喉を通った。

そうして一息ついていると、宇佐美が口を開いた。

「樹神さん、どうでした？ 何か掴めました？」

小南との十五回にも及ぶ模擬戦。

上位の攻撃手が操るオリジナルトリガーとの戦闘は、たしかに初見の戦闘としては大きな経験値として得ることができた。

当たればほぼ一撃必殺の大斧と、細かく短い小斧の二刀流の切り替えも、ある意味相手の呼吸やタイミングを読むといった意味では上等な経験値だろう。

だが――

「(……これじゃない気がする)」

二宮さんの提案の真意はまた別にあると、樹神は予想した。

ぶつちやけた話、今の自分は攻撃手に対しての戦績は全勝であり、それは今戦った小南も例外ではない。

特別自分の弱点らしき何かが露呈した訳でもなく、小南相手の戦闘中に、自身の戦闘を大きく変えなければならないと思うほどのなにかを見たわけでもない。

ここまで十五戦戦い、また考えても出なかった以上、二宮の考えが間違っていたとも思うが、あそこまでの実力と戦略を兼ね揃えた彼が見当違いなことを考えたとは到底思えない。

であれば、あと参考として残っているのは彼女の戦い方なのだが……。

「(……うん?)」

ふと、ある考えが頭の片隅で浮かび上がった。

一戦目、二戦目、そして終わりの十五戦目までにかけての彼女の戦い方。それをもう一度思い起こし、その時の自分の動きと考えを合わせ――

「(……ああ、なるほど。二宮さんが言っていたのはこれか)」  
一つの結論に至った。

俺は小さく笑みを浮かべて、宇佐美に視線を合わせる。

「ああ、おかげさまで見つけたよ」

「おつ、思わず笑っちゃうほどの発見ですか？」

嬉しそうに聞いてくる宇佐美に、俺はいやいやと首を振りながら口を開いた。

「いや、この笑みは自分の短慮に呆れて思わず漏れただけだ。ほんと、なんでこれが思い浮かばなかったんだろうなあ」

「ほー……。まあ、小南を推した私としては、しっかり得るものがあつて良かったです」

「良くないっ！」

安堵の笑みを浮かべた宇佐美の後ろから、小南の声上がる。

向かい合つてた宇佐美と俺の間に割り込むようにして小南がやってくると、「涙目になりながら目つきを鋭くさせ、ビシツと此方に指を指した。

「負けっぱなしは嫌よ私はっ！　ようやくアンタの動きに慣れてきた所なんだから、せめてあと十六戦付き合いなさいっ！」

「素直に勝ち越すまでって言えばいいのに……」

暗に全勝して勝ち越すつもりでいる彼女の発言に宇佐美は苦笑いを浮かべてそう呟くが、勝ち越すために十六戦という最低限の模擬戦数しか言わなかったのは負けん気の強い小南らしいと内心納得する。

自分が負けるなんてことは一切考えてないようだ。

しかし、そんな小南の提案に対して樹神は僅かに困った表情を浮かべて言った。

「悪いけど時間が時間だ。流石に十六戦もやってる時間はない」

「……六時まで、あと十分近くあるけど？」

やんわり断る樹神の言葉に、小南はチラリと壁に立て付けられた時計を見ると、再度視線を樹神に戻すとジト目で訴える。

その視線に小さく苦笑いを浮かべると、ゆっくり首を振った。

「木崎さんが言うには六時以降らしいけど、それはアイツがいつものペースで帰ってきたら、の話だろう？　ここに来る前に荒船達に俺が玉狛にお邪魔すると連絡してもらってる。多分、アイツのことだったら急いで戻ってきそうなの……」

そこまで言うのと、俺たちのいるトレーニングルームの扉が少しだけ乱暴に開かれた。

急な物音に俺を含め三人が反射的にそちらを見ると、扉を開けたと思われる一人の男性が肩で息をしながら此方を見ていた。

彼は一度深呼吸をして息を整えると、僅かに笑みを浮かべて口を開いた。

「お久しぶりです、一葉さん」

「ああ、久しぶり。元気そうだな、京介」

驚愕の表情を浮かべる宇佐美と小南とは対象的に、俺は同じく笑みを持って彼、烏丸京介と挨拶を交わした。

## 第十話 樹神一葉⑩

自分が、ここまで他人に心を許したのは初めてだった。母や弟らとは違う、また別の安心感を覚えたのは初めてだった。これは、たかだかバイトの先輩だから、というわけではないのだろう。

彼が自分の中で大きくなったのは一体何時頃だろう、と。

駆け足で玉狛支部に向かっている烏丸はふとそんなことを思った。

運悪く初バイトが劣悪な環境で、勝手に外見に嫉妬して八つ当たりしてくる男の先輩らから、角が立たないように立ち回りながら守ってくれた時だろうか。

バイトを始めてしまったせいか、学校での勉学の遅れが出た際に相談すると、直ぐに時間を設けて丁寧に教えてくれた時だろうか。

彼が守ってくれてはいるものの、それでも嫌がらせに耐えかねた自分に、新たな環境の良いバイト先を紹介してくれた時だろうか。

……いや、違うな。

頭の中で彼との記憶を掘り起こしてはいるが、それでも自分の納得のいく答えにはならず、烏丸は思わず足を止めた。

もちろん、これらに対して感動を全く覚えなかったわけではない。

しかし、これらが自分のこの感情の起因ではないことは何となく理解していた。

——ああ、そうか。

数秒ほど立ち竦んでいた烏丸は一つ息をつくと再度走り出し、そしてある記憶を思い出す。

それは、自分がバイトを始めて一年が経ち、新しいバイトにも慣れた頃、彼の事情をよく知る年配の店長から話を聞いた時だった。

『樹神くんは、第一次近界民侵攻で両親を亡くしているんだ。唯一の肉親であった祖母もついこの間逝ってしまった。親戚もおらず、一人で妹二人を守っていかなきゃいけない、頼れる人もいない、家のこと

も自分で回さなきゃいけない。

まだ高校生だろう。まだ遊びたいだろう。嫌なことばかり見えて、辛いだろうに……。それでも、あの子はああやって笑っている。ほんとに、強い子だよ』

ああ、そうだ、この時、この日だ。

自分も自分なりに他に比べれば苦勞している部類だという自覚はあった。

だからといって、誰かに愚痴るわけでもなく、重荷だと思ったこともなかった。

しかし、それでも、そのことが自分の足を引っ張り、苦勞したことはないわけではない。

故に、良き先輩であった彼には相談に乗ってもらったり、助けてもらったりしたわけだ。

ただ、あの時、自分は彼に自分の事情ばかりを聞いてもらい、理解者になってもらい……。いや、ならせてしまっておきながら、彼の事情を全く知らなかった。

今思えば、彼にとって自分は鬱陶しいことこの上なかっただろう。明らかに自分より辛い状況にあるのに、それを理由に救ってもらっていたのだから。

そこまで考えると俺は居ても立つても居られなかった。

本当は嫌われているんじゃないか、恩ある彼の重荷になっているんじゃないか、と嫌な予想が溢れて止まらなくなっていた。

故に、俺はバイトが終わった夜の九時の帰り道、先行く彼の背中を追って、呼び止めて、口を開いた。

『俺、迷惑じゃないですか？』

何も脈絡もないまま、開口一番にこの言葉だったのは自分でも驚いた。

今思うと、俺は本当に心の底から不安に感じていたのだろう。

しかし、それを彼が分かっているはずもなく、急な質問に疑問符を浮かべている彼に、俺は一つ一つ説明した。

『なんだ、そんなことか』



説明が終わった直後、彼はなんてことないようにそう告げた。

俺があまりにも焦っていたからか、身構えて損したと小さく笑う彼は、本当にいつもと変わらない姿だった。

『たしかに辛いかどうかって聞かれたら、ちよつとしんどいよ。けど、帰ったら妹たちが笑ってるんだ。あんなことがあっても、真つ当に良い子に育ってくれてるんだ。それを思えば、これから先もずっと頑張れる』

満面の笑み、というわけではない。というより、彼が大きな声を出して笑うのを見たことがない。

しかし、それでも、彼の表情に浮かんだそれは、一年間一緒にいた中で最も優しい笑顔だった。

『京介、君のそれは至極真つ当な感情だ。それを綺麗事の上塗りする必要はない。ただ、その時は何のために頑張ってるか思い出してみろ。俺は、いつもそうしてる』

そう言われて思い出すのは自分の家族のこと。

自分よりも小さな弟たち、働きづめで休む暇もないのにいつも笑顔を絶やさない母と父。

そうだ、自分は、そんな家族の力になりたくて始めたんだ。

ふと彼の表情に安心の色が浮かんだ。

おそらく、俺の表情から俺がどう思ったのか分かったのだろう。

彼は一度息をつくと、再度口を開いた。

『さて、京介が俺の邪魔になってないか、だっけか？』

身体が一瞬硬直したのが分かる。

しかし、彼はそんなことを気にせず、続けた。

『家族のためにこんなに頑張ってる後輩のことを、邪魔に思うわけないだろ？ 俺と一緒にだ』

——この先、他の誰かにこの人以上の尊敬と憧れを抱くことはないだろう。

困ったような笑みを浮かべる彼の姿を見て、心の底からそう思っ

た。

◆? ◆? ◆?

烏丸京介という人間を知っている人間であれば、今私たちの表情と同様のものを浮かべたであろう。

およそ一年前にレイジさんに弟子入りして、その半年後に玉狛支部に加入。玉狛に入って日が浅いだけあって彼の本部への顔は広く、その甘いフェイスからファンクラブがあるのでと囁かれているほどの有名人だ。

もともと感情が表に出にくく、一年ほどの師弟関係からレイジさんのクールさを譲り受けた彼はほとんど無表情に近く、私はもちろんレイジさんも声の強弱はあれど無表情以外の顔を見たことがない。

そんな彼が笑みを浮かべているのを見て、驚くなどという方が無理な話だ。

「最後に会ったのは大体一年前か？ 正直俺のことは忘れてるもんだと思ってたよ」

「そんな訳ないじゃないですか。たった一年で忘れようにも、一葉さんから受けた恩義が大きすぎます。今でもバイト先で物寂しくなるくらいですからね」

「別に大したことしてないんだがなあ……。それと、あの時は何も言わずバイトを辞めて悪かった」

「悪いと思ってるなら帰ってきてくれると嬉しいです」

「すまん、無理だ」

うん、見間違いではない。

啞然とする小南をそっちのけに、視線の先で穏やかに会話をする烏丸を見て、宇佐美はそう心の中で呟いた。

無表情がデフォルトである烏丸はその反面小南を嘘でからかうようなお茶目っ気があり、そのギャップにやられる女性も少なくない。

だが、もし今の彼を見れば、ほとんどの女性が一目惚れし、元々惚れていた女性たちはより一層彼に惹かれるだろうことが予想できる

ほど、今の彼の表情は柔らかく、温かいものになっていた。

本当に信頼しているんだな。

自分たちの知らない表情をしている烏丸を見て、宇佐美は思わず破顔した。

「それにしても、京介、ボーダー隊員だったんだな。知らなかった」「こつちのセリフっすよ。俺、本部にもそれなりに顔出してましたけど、一葉さんの姿を一度も見たことなかったんで、ログ見た時はめちゃクチャ驚きました。知ってれば防衛任務もご一緒出来たんですけど」

「まあ、入隊した三日間だけだったからな、まともに本部にいたのって」

「一体何年前に入隊したんすか？」

「大体三年半ぐらい前かな？ こつちでも俺は京介の先輩かな？」

「たとえボーダー歴が俺の方が上でも、先輩は先輩ですよ」

「そうか」

何気ない会話のように聞こえるが、そんなやりとりの中でも烏丸の表情はとても満足気なものだった。そして、それは樹神も同様のようで先程から全く用意したお茶に手を付けていない。

ふと思いついたかのように烏丸が懐から携帯を取り出した。

「一葉さん、連絡先を交換しましょう」

「お、そうだな」

同じく携帯を取り出した樹神は電源を入れて烏丸に渡すと、烏丸はいつもの無表情フェイスに戻り。携帯を操作して連絡先の登録を始めた。

それを見て、宇佐美は小さく手を挙げて伺うような視線を樹神にやりながら、言った。

「樹神さん、私も登録、いいですか？」

「……………っ！ わ、私もっ！」

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

宇佐美と小南の申し出に樹神は少し驚いた表情をするが、直ぐに微笑をもって答えた。

烏丸が登録を終え、二人に樹神の携帯を渡した時、宇佐美と小南はふと連絡一覧に視線がいった。

「(連絡先、すごく少ない……)」

影浦、荒船、村上、穂刈、北添、仁礼という知ってる名前が六つと樹神で始まる名前が二つ。そして、私の知らない名前が二つと、『博士』という名前が一つ。烏丸のも合わせて計十個の連絡先しかなかった。

烏丸から樹神の話聞いていた二人は、その一覧を見ただけで胸が締め付けられるような感覚に襲われる。

友達と遊ぶこともせず、バイトと学業に明け暮れ、妹二人の面倒を高校生という身分で請け負う先輩。

話だけだったからこそ、あまり実感が湧かない姿であったが、この一覧だけでも彼の苦労と努力が垣間見えた気がした。

ほんの少しだけ時間がかかりながらも、二人は烏丸と談笑を続けている樹神に携帯を返した。

彼は二人から携帯を受け取り、連絡先の一覧を見ると少しだけ雰囲気が柔らかくなった。

「? どうしました?」

そんな僅かな機微を感じ取った烏丸は、単純な疑問から樹神にそう尋ねる。

すると、樹神は少し恥ずかしそうに頬を掻きながら――

「いや、カゲたちの時もそうだけど、連絡先が増えるのが、嬉しくてな」

しみじみとそう言う樹神を見て、宇佐美、小南の両者とも反射的に樹神に詰め寄った。

「樹神さん! いつでも、ほんとにいつでも来て下さい! 社交辞令とかじゃなくて、ほんとに歓迎しますっ! レイジさんたちもきつと歓迎してくれますよっ!」

「そうよ! 今回は私だけだったけど、とりまるもレイジさんも、迅だって本部の奴らよりかは強いから、私とは別の良い経験ってやつが

積めるわよ！ 私も次は負けないうっ！」

とりまるとの会話よりもテンションの落差が激しいせいとか、樹神は詰め寄ってきた小南と宇佐美を御するように両手を前に出し、少し驚いたように眉を上げる。

しかし、彼女らの言葉を理解するにつれ、その表情は嬉しさを僅かに隠さないようなものへと変わっていき、最後には穏やかに「ありがとう」と言った。

言いたいことは言ったと言わん気に胸を張る小南と宇佐美に、烏丸は内心ほつとする。

その心は、純粹に人の苦労や努力を見てくれる先輩達で良かったというものであった。

そんな彼に対して、樹神はなにかを思い出したかのように視線を烏丸に戻した。

「そういうえば、京介。少し、ボーダーの人を紹介して欲しいんだが、頼めるか？」

「？ はい、自分ができる範囲なら、喜んで。どんな人ですか？」

樹神よりもボーダー歴は少ない烏丸とはいえ、本部での交友関係はまさに天と地ほどの差がある。

それを小南との模擬戦前に宇佐美らと会話して知っていた樹神は、単純に頼みやすい烏丸にあるお願いを口にした。

「————の人を紹介してほしい」

そんな彼の頼みに、烏丸は簡潔に「了解つす」と答えた。

◆？ ◆？ ◆？

「次、予定が空いたら玉狛うまに來なさいよっ！ 絶対の絶対よっ！」

「分かった分かった。予定が空いたら、ちゃんと連絡するよ」

「言ったわね！ 言質取ったからね！」

「ああ。約束する」

「……宇佐美先輩。小南先輩、ムキになってますけど、そんなにボロ負けしたんスか？」

「五十分で0勝の15連敗だからねえ。こなみの性格ならああもなっちゃうよね」

「……まじっすか」

「まじまじのまじ。私が証人です！」

「一葉さん、次は自分ともお願いします」

「おう。こちらこそ、ぜひ頼む」

「おう、短時間で仲良くなっちゃって」

目下、玉狛支部の玄関で樹神を見送る小南たちを見て、ボーダーの中でも二人しかいないS級隊員、迅悠一はぼんち揚を頬張りながらそう呟く。

場所は玉狛支部の屋上。外はほのかに暗くなり、あと数十分で真っ暗になるような時間であった。

迅はしばらくぼんち揚を口に運び続けたが、ついに中身が無くなる袋を傾けて残りカスを口にそそぐと、不意に後ろから声が上がった。

「行儀悪いぞ、迅」

声を聞いて、迅がゆっくりと背後に視線をやると、そこには屋上の扉から自分に歩み寄ってくるレイジの姿があった。

迅はいたずらが見つかかった子供のような笑みを浮かべつつ、空となった袋を綺麗に折り畳んでポケットに入れる。そうする間にレイジは迅の横に辿り着き、改めて口を開いた。

「一時間ほど前に防衛任務から帰っていたんだらう？ 樹神に挨拶はしないのか？」

言葉こそ柔らかいが、レイジの目付きは少しばかり鋭いものとなっている。同じく玉狛支部で働く者同士であり、さらに言えば相手は今の烏丸が過去に世話になった恩人だ。玄関で今も騒いでいる小南まではないかなくてもいいが、それでも挨拶ぐらいは交わしておくべきだろうとレイジは考えていた。

「うーん、そうするつもりだったんだけどねえ……」

レイジの心内を見抜いてか、迅はどこか歯切れが悪そうにそう言う  
と、続けた。

「俺、まだ彼と会うべきじゃないっぽい」

「……………なに？」

なんとなくそう言った迅に、レイジは今度こそ声に不快の色が宿  
る。

そんなレイジを見てか、迅は大きに首を横に振ってみせた。

「いやいやいや、俺だって出来れば親交を深めたいよ。けど、こればかりは少し事情がちがうみたいだ」

「……………つまり、そういうことか？」

彼の物言いによろやくある程度の理解を得たレイジは、少し言葉を  
伏して尋ねる。

対して、迅は苦笑いを浮かべてゆつくりと頷いた。

「うん、俺のサイドエフェクトがそう言ってる」

いつもは自信満々に告げるその決め言葉が、今はあまりにも力がな  
いことに、レイジはその事が本当であることと考えた。

二人の間に流れる無言の数秒。

次に口を開いたのはレイジだった。

「いつだ？」

「およそ半年後」

簡潔にそう告げた迅に対し、レイジは内心驚愕する。

迅のサイドエフェクトは『未来視』である。

確定した未来を見るのではなく、様々な可能性を孕んだ多岐に渡る  
未来を見ることを能力とし、その中から最善を選べるように対策を行  
うことで最悪を避けている。

これは彼個人だけでなく、ボーダーという組織の未来をも左右させ  
るため、玉狛と仲が悪い最高司令官ですら重要なファクターとして彼  
を重宝している。

しかし、この能力は見たことない相手や遠すぎる未来は見る事ができないという欠点があり、あまりにも多岐に枝分かれした場合は迅自身が読み逃す、ないしは突然にその未来が浮かび上がってくる事がある。

そんな彼が告げた、半年後という遠い未来。

つまり、迅が見た未来は現在ではほぼ確定した未来ということになる。

「迅」

「分かってる。可能な限り最善は尽くすよ。いつもとはちがって、半年もの長い時間があるんだ」

そう言う迅の視線は先ほどとは打って変わって真剣そのものであった。

レイジはそれを横目におさめると、次いで視線を下に向け、ちょうど玉狛支部と陸を繋ぐ橋を渡り切った樹神が見えた。

「迅」

「ん？ なに、レイジさん」

「頼れよ」

視線はそのままに短くそう言うレイジに、迅は一瞬呆けるとすぐに笑みを浮かべた。

「うん、頼りにしてるよ」

その一言を皮切りに目下の小南らが玉狛支部に戻り、次いでレイジが屋上から去った。

もう辺りは暗くなり、街にポツポツと光が灯る。

そんな光景を見ていた迅を冷たい風が撫でた。

「彼と面と向かって会えるのは、一体いつになるんだろうな」

そうこぼした迅の視線の先には、既に樹神の姿はなかった。



## 第十一話 チーム戦①

「ぐっ！」

スコープオンを右手に沿わせて出現させ、相手に分かりやすく、さながら手刀の如き大振りでの一撃を、相手は真つ向に孤月で防ぐ。

元々防がせるつもりでその攻撃を放った俺は、次いで右足の先に新たにスコープオンの刃を出現させると、下から両断させるべく右足を素早く蹴り上げるが、彼はそれを読んでいたかのようにバックステツプで回避。しかし、わずかに引くのが遅かったため、胸部に浅い斬傷が刻まれた。

避けきれなかったことにわずかに表情を曇らせる彼の名は辻新之助。彼の着こなす黒スーツから見て分かる通り、彼は以前俺がボコボコにやられた二宮隊の攻撃手<sup>アタッカー</sup>である。

そんな彼に対して、俺はすぐさま追撃を行うべくマンティスを放とうとするが、右からわずかな物音が聞こえたため、すぐさま中断、後ろに跳ぶ。

すると、先ほど俺がいた位置に白い刃が蛇のように唸りながら通り過ぎ、その攻撃を放った男は次の瞬間には俺に飛びかかってきた。

「よお、そんな奴はほつといて俺と遊べや」

「カゲ……」

凶悪な笑みを浮かべる影浦と数秒の鏝迫り合いの後、弾き返して数度の剣撃を交える。

しかし、次の瞬間彼の表情に変化が生まれたと思うと彼は横に跳んで回避行動、俺はシールドを展開して防御姿勢を取った。

それに数瞬遅れて襲いかかる数十もの銃弾。

その射撃方向を見ると、先ほど辻とは別の黒スーツを着込んだ男性が左に銃型トリガーであるP90を構えて此方に撃ちこんでいた。

「うお、シールドかったいなあ」

大きく広げて展開した割にはビクともしない俺のシールドに対してそんなことを呟く銃撃主、犬飼澄晴。

そんな彼に俺はサブトリガーでグラスホッパーを起動すると、射線

を避けるよう少し迂回しながら犬飼を取るべく配置。

犬飼がそれらに反応し切る前に行動を開始すると、グラスホッパーで加速した俺の軌道を先からなぞるように辻が旋空を放った。

目の前に突如迫ってきた旋空の刃に、俺は両手にスコープピオンを出現させて受け流すが、グラスホッパーによる加速のせいで下手に勢いがついたために完全には受け流せず、左の二の腕辺りに傷を受けた。

「辻ちゃん、ナイス」

遅れて銃口を此方に向けた犬飼。

しかし、その引き金を引くことは叶わなかった。

「デメエ、俺と一葉のサシに横槍いれんじゃねえよ」

そう言つて犬飼に襲いかかった影浦に、犬飼はサブトリガーのスコープピオンを使つて何とか彼の攻撃を受け止めた。

「おいおい、これ三チーム対抗戦だろ？ その文句は筋違いじゃないか？」

「じゃあ死ぬ」

反論した犬飼に短くそう言い放つた影浦は持ち前の攻撃力で猛撃を開始。

そんな二人から漁夫の利を得ようと一閃を放とうとするが、先ほど俺に旋空を放ってきた辻が、次は上段に旋空を放つ。それがちやうど俺と犬飼を攻撃する影浦と軌道が重なり、俺らは回避を強いられる。

加えて次の瞬間――

「誘導弾」  
ハウンド

別の攻撃が空から襲いかかってきた。

凄まじい弾幕のトリオン弾に俺はグラスホッパーによる回避ではなくシールドを傘のように広げてそれらを防ぐが、俺の右側二十メートルほど先にいつのまにか立っていた二宮から新たに六分割ほどしたトリオン弾が打ち込まれた。

「くっ」

なんとか彼の攻撃に気づいた俺は上にシールドを展開しつつ、後ろに跳んで回避しようとするが、攻撃を認知したのが遅れたため避けきれず左足をやられた。

「二宮あ……っ！」

俺に遅れて二宮の存在に気付いた影浦は忌々しげに彼の名前を呟く。

対して二宮は影浦の前に立って、内部通信で自身のチームメンバーに指示を下した。

『樹神の足は潰した。辻、犬飼はあいつの足止めをしろ。俺はその間に影浦をとる』

『辻、了解』

『犬飼了解！』

先制して俺に銃撃を開始する犬飼。

俺はそれに対してシールドを貼ることしかしない。

「(二宮隊が最初に集まったか。まずいな)」

犬飼の後ろからやってきている辻が俺のシールドを割るべく旋空を放とうと振りかぶっているのを視認し、サイドエフェクトが発動。その間にどうするかを考える。

突出した機動力はないものの、マンティスという特殊な攻撃法で通常の攻撃手よりも間合いが広い影浦だが、二宮相手ともなると上手く近づくこともできないらしい。先程強引に攻めようとしてはそこを狙った二宮の弾丸に気付き、回避を強いられているのが分かる。

俺、もしくは影浦の増援を待とうにもレーダーを見るにまだ時間がかかる。

「(トリオン兵なら十数体でも相手できるが、トリガー使い数人、特に連携がしっかり取れてる人らが相手になるとやっぱりキツイな……)」

この三チーム対抗戦を今回まで何度か繰り返していく内に、俺のサイドエフェクトと俺の戦い方が対人に特化し過ぎな上、対チームの経験が薄いのは身に染みていた。

加えて左足の欠損。通常防衛任務で体験することもないその状態で連携の取れたマスタークラスの防衛隊員二人を相手にするのは苦難である。

「(俺の隠し球も既に割れてる。今使おうにも隙がでかい。だからと

言って、これまで通りならジリ貧だ)」

そんなことを考えていると、スローモーションな世界で辻が放った旋空がこちらを切り裂こうと伸びてきた。俺はその軌道を読んで犬飼の攻撃を防いでいるシールドに当たらないよう形を変化させ、俺は僅かに横にズレて紙一重、空振りに終わらせる。

それを見た辻は驚きの表情を浮かべ、犬飼は銃のトリガーから指を引きながら感嘆の口笛を吹く。

だが、それは結局のところその場しのぎでしかない。

「くそつ、折角のチーム戦のラストだぞ。もつとしっかり考えて物にしろ、俺)」

俺は二撃目の旋空を放とうとしている辻と、その奥で影浦の相手をしてきた二宮から助太刀の如く飛来してくるトリオン弾を視界に収めながら、そう心の中で自分に叱責する。

B級隊十一個による三チーム対抗戦。

最終戦であるこの試合が始まって三分ほどで、俺はピンチを迎えていた。

◆？ ◆？ ◆？

時は遡って、九時間前。

「……なんだこの集まり」

玉狛にお邪魔した日からおよそ二週間後の日曜日。

本来なら土曜日に来ているんだが、今日は荒船たちからお願いされたため日をずらしてきた。

加えて、先週の土曜日はある事情で俺がカゲたちと模擬戦が出来なかったため今日は昼前と早めに本部に来たわけだが、いつもの待ち合わせ場所であるC級ランク戦ブースのソファ席の周りには、見ない顔の正隊員たちの集団があった。

いや、よく見たらいつものギャラリーの中にいた顔が何人かおり、ソコの防衛員に支給される制服を着ているものがないことから、全員どこかしかの隊に所属している隊員なのだろう。

しかし、この集団はなぜここにいるのだろうか。

「お、来たか。こつちだ、こつち」

もしかした別の場所に移動したのかと考えていた矢先、その集団の中から見慣れた顔が覗けた。

こちらに手を振りながら笑みを浮かべる荒船。いつもの帽子姿は場違い感ともいえるこの集まりの中では安心感を与えてくれる。

「荒船、なんだこの集団……ん？」

彼の元に歩み寄って気付いたが、彼の後ろには久々に会う穂刈と荒船と同じ隊服の少年一人がいた。

俺の視線に気づいた少年はぺこりと頭を下げる。

「どもつす。荒船隊の半崎義人つす」

「弓手町支部所属の樹神一葉だ。君のとこの隊長さんにはすぐくお世話になってる。よろしく」

「よろしくつす」

そんな自己紹介を交わす俺らを見て、荒船は何か言いたげに苦笑いを浮かべるが、特に何かを言うわけではなくそれを見守る。

対しての俺は半崎君との挨拶を終えると、次いで荒船に視線を戻して口を開いた。

「荒船の隊が揃ってるってことは、この後防衛任務があるのか？ それとも任務終わりか？」

「いんや、違う。ちなみに言うと、ここにいる全員も任務とは関係なく集まってんぜ」

そう言いながら辺りを見渡す荒船に、俺も再度周囲の隊員たちに視線を移す。

明らかに二十人以上いる正隊員。

これらが任務ではない目的で集まっていることに考えを走らせていると、気付けば一人の男が荒船と俺の近くに立っていた。

「はじめまして、樹神一葉君」

先ほどの半崎君のような眠たげな目に黒のロングヘア。人当たりの良さそうな笑みを浮かべてはいるが、学生ばかりのボーダー隊員の中で一際落ち着きと大人の風格を感じさせる男性だった。

俺はそんな男の雰囲気に対し言葉が詰まるが、すぐに口を開いた。

「……………どなたですか？」

「B級部隊東隊隊長の東春秋さんだ」

「加えて、『三チーム対抗戦』の主催者だ。今日行うな」

俺の疑問に、対面に立っていた荒船と穂刈が代わりに答えた。

その様子に東さんと呼ばれた男は苦笑いを浮かべる。

「二人に紹介された通りだ。何人かの希望で、今回の『三チーム対抗戦』を開かせてもらった。よろしく頼むよ」

そう言つて目の前に右手をやって握手を求める彼に、俺も右手を持ち上げて応じるが、それと同時に一つ言葉をこぼした。

「……………三チーム対抗戦？」

今日もこれまでと同じように個人ランク戦を行うと思つていたため、これから始めようというその対戦形式にオウム返しに呟く。

すると、東さんはゆっくり頷いた。

「現在の時刻は九時半。十時から試合時間四十分、休憩三十分の三チーム対抗戦を繰り返して計八試合行う予定だ。一応二試合目終了時に四十分の昼休憩を取ってる。組み合わせに関してはこちらでラウンドに組ませていただくよ」

淡々と説明を行う東さんに俺は最後まで書き終わると質問を投げる。

「俺は支部所属のフリーなんですけど、扱いはどうするんですか？」

「それなんだが、当日になって参加をキャンセルした者がいてな。その部隊に入ってもらって一部隊扱いにしようと考えたんだが、話し合いの結果それは無しになった」

「？ 何故？」

疑問符を浮かべて聞き返すと、東さんは薄く笑みを浮かべて続けた。

「どの部隊も、樹神君を使つてみたいという意見があつてな。組み合わせ

わけの際、一番順位の低い部隊か、合同チームに入ってもらうことになつた」

俺はその言葉に横目に荒船を見る。

すると、彼はニヤリと何やら含みのある笑みを浮かべた。

その反応を見た俺は荒船もこのイベントに一枚噛んでるだろうなと予測した。そして、今回参加してきた部隊の面々の目的も。

「俺のことが話題になってるとは聞いたが、なるほど。個人戦ではなくチーム戦での動きはどうなのかを見るのと、加古さんみたく勧誘目的もあるのかな？」

俺は再度辺りに視線をやる。

先程は気付かなかつたが、よく見ると何人かが此方をチラチラと伺っているのが分かつた。

「午前から参加するのは生駒隊、王子隊、東隊、来馬隊、諏訪隊、柿崎隊、那須隊、荒船隊、そして当日キャンセルで隊長とオペレーターがない香取隊の九部隊だ。午後からは以上の面子から柿崎隊と他何人かが個人の都合で抜けて、代わりに影浦隊と二宮隊が合流する」

午後からの参加組に良きライバルである影浦と指南を得てかつボコボコされた二宮の名前が拳がり、わずかに目を見開く。

別段ほかの隊を軽んじていたわけではないが、一段と緊張が引き締まったように感じた。

「香取隊の数が少し足りないのと、戦力バランスを考えて、何人か非番の隊員に声を掛けておいた。一応現時点で参加するのはA級の太刀川隊の出水、同じく草壁隊の緑川、加古隊の黒江、三輪隊の米屋。この面々に加えて樹神君で一部隊をローテーションで組んでいく。それでいいか？」

「四人もA級隊員が参加するんですね」

「ほんととはここまで呼ぶつもりはなかつたんだがな」

そう言いながら苦笑いを浮かべる東さんに、俺は彼にとって色々予想外の事があつたんだろうなと予想しながら、「喜んで参加させていただきます」と笑みを返す。

すると、彼は神妙な顔つきで続けた。

「もう気付いていると思うが、今回の催しとそれに参加した部隊の目的は君だ。それに伴って、他部隊や隊員の出番が平均して二回ずつなのに対し、樹神君の出番は多くなる。慣れない部隊に参入する上、初の部隊戦。当然肉体的にも精神的にも疲労する。だから、疲労が蓄積してきたら遠慮なく言ってくれ。無理は言わない。そも伝達していなかったからな。チーム戦には不参加で、チーム戦の観戦のみでも構わない」

ぶつちやけたな、と心のうちで苦笑いを浮かべる。

だが、たしかにこれらの部隊の殆どの目的がそうであるならば、俺が何度も出るのは自然の話で、精神的な負担となるだろう。しかし、俺としては個人戦がある程度重ねてきたため、新たな試みとしてチーム戦を経験するというのは良い刺激になる。なにより、B級がメインとはいえ、前線で奮闘している部隊の数々とお相手できるのはまたとない機会だ。

当然それを蹴るはずがなく、加えて俺は真剣な表情で口を開いた。「喜んで参加させていただきます。それに、ここまでのB級部隊の面々とお相手できるのは稀ですので、全試合参加でお願いしたいぐらいです」

そう言うと、東さんは数秒驚いた顔を浮かべるが、次には穏やかな笑みで「言ったな」とこぼす。

対して俺はニヤリと好戦的な笑みで返すと、彼は一度頷いて大きな声を張った。

「これより対戦の組み合わせを行う。組み合わせの発表後、出番となった部隊はそれぞれの隊室にて待機、そのほかはモニタールームで試合観戦をするなり、隊室で休憩するなり好きにしてよし。それと、今回の対抗戦は規模が規模なので手の空いたオペレーターと隊員には実況と解説をお願いしたい。勿論俺も解説をさせていただく。参加する隊員達の他、ここに今いる訓練生も興味があれば覗いてもらっても構わない」

彼がそう言うと、参加予定であろう隊員達と訓練生がどよめきたった。訓練生がどよめくのは分かるが、正隊員がどよめく理由が分から



なかったため少し耳をすますと、どうやら東さんの解説を聞くことができることに驚き、そして喜んでいる様子であった。

「個人で企画してここまでのメンバーを集めるぐらいだったから人徳やカリスマを持ち合わせている凄い人だと思っていたが、実際その通りだったみたいだな」

そんな風に思っていると、東さんが集まりから外れて、隅で二人の正隊員と待機していた美人のオペレーターらしき人と合流し、持っていた端末を操作。

それから一分ほどしただろうか、再度彼が口を開いた。

「対戦の組み合わせが決定した」

◆? ◆? ◆?

「失礼します。今回、同じチームとして部隊に参加させていただく樹神一葉です。ポジションは攻撃手。<sup>アタッカー</sup>なにぶん初めての部隊戦ですので、この身、自由に扱ってください。どうぞ、よろしくお願いします」

B級部隊を発足した場合、その部隊が防衛任務に着くに当たってチームワークや伝達事項、戦闘のサポートを行うためのオペレーション室が備え付けられた隊室が与えられる。

現在、自分がノックをしてから入室したのはボーダー本部内に設えられたとある一室、『柿崎隊』の隊室であった。

「お、来たな。初めまして、柿崎隊の隊長を務めている柿崎国治だ。よろしく頼む」

そう言って入室一步目から動かなかった俺を最初に迎えたのは、柿崎隊の隊長である柿崎さんであった。

座っていた椅子から立ち上がり、わざわざ俺の前まで来て握手を求め、誠実に俺は勝手ながら善い人なんだろうなと心のうちで呟く。求められた握手に応えた後、俺は右手に持っていた紙袋を差し出した。

「これ、つまらないものですが」

そう言うと柿崎さんは驚いた様子で受け取り、次いで納得の声をあ

げた。

「組み合わせ発表の後、探したのに樹神君がいなかったのはコレか。わざわざ用意してくれてありがとうな。嬉しいよ」

「本部の購買で買える、ほんとうにつまらないものですけどね」

一時とはいえお世話になる部隊へのお土産に用意したものが簡単なものすぎて少々苦笑いを浮かべる俺に対し、柿崎さんはニカツと笑う。

突然でなければしつかりとしたものを用意するのだが、時間が時間であったため妥協。正直、変な顔をされるかもと考えていたためにもちやくちや不安だった。

「ところで、自分を探していたとのことでしたが……」

「口調、崩してもらっていいぜ。樹神君を探したのは、なに、支部所属だつて聞いてたから、この場所が分からないかなと思つたから案内しようと思つただけだよ。余計な心配だつたみたいだけどな」

そう言つて小さく笑う柿崎さんに、俺は安心の息を一つ持つて返す。

チーム戦自体に文句はないが、知り合いが殆どいない部隊に加入するのは緊張していたので、その初っ端が彼のような人で本当に良かった。

そんな風に思っていると、いつのまにか後ろの方で立つて待機していた二人の男女と目が合った。

「照屋文香です。ポジションは万能手オールラウンダー。よろしくお願いします」

「巴虎太朗です！ ポジションは一応銃手ガンナーツスけど、孤月も使つて近接戦もします！ よろしくです！」

育ちの良さそうな雰囲気醸し出し、その通り流れるような美しい所作で挨拶を行った少女の名は照屋、ソワソワと活発そうで何やらテンションの高い少年の名は巴と言うらしい。

俺は彼らに向き直ると同じく挨拶を交わす。

すると、抑えきれないと言わんばかりに巴が口を開いた。

「樹神先輩のランク戦、全部見ました！ また今度、俺とも個人ランク戦お願いしますっ！」

「お、おお、来週の土曜なら……」

「あざますー！」

声の大きさからも感じるテンションの高さに少し押されつつ頷くと、やった！と嬉しそうにはしゃぐ巴。

不思議に思っている隣にやってきた柿崎が耳打ちした。

「樹神君の紙一重や最低限の回避や防御で戦うスタイルが虎太郎の琴線に触れたみたいだな。余裕があるなら相手をしてやってほしい」

その説明に俺は納得の声をあげた。

「そういうことなら、喜んで相手させていただきます」

「ああ、頼むよ」

「ご迷惑じゃなければ、私もよろしいでしょうか？」

会話にひと段落が生まれてから照屋がハキハキと尋ねる。

下手に言葉を挟まず、しっかり話の下地が整ったのを確認してから発言した彼女の気遣いに気付いた俺はゆっくりと頷いて「もちろん」と告げた。

そして。

「みんな、開始まであと十分切ったわよ」

そんな声と共に遅れて部屋の奥から姿を現した柿崎隊のオペレーターの宇井真登華とも挨拶を行うと、俺たちは対戦相手と動きの確認をするのであった。

『開始五分前となりました、東さん主催の三チーム対抗戦。第一戦目の実況は私、人見摩子と』

『えっと、解説役に何故か諏訪さんに連れてこられた古寺と』

『ブースに向かっている途中、諏訪さんに解説席にドナドナされた俺、出水』

『以上の三名でお送りします』

場面は変わってB級ランク戦ブース。

名の通り、本来ならばB級ランク戦時やボーダー上層部がたまに開くイベントの際に解放されるこの部屋は中央に解説席と実況席を置き、そのほかは試合の様子を映す特大のモニターを見るための観覧席

となっている。

一応、試合観戦だけであれば各部隊に振り分けられた隊室でも可能だが、人多い所が苦手な人物や身内だけで見たい者以外の大体はこちらで観戦する。

さて、話を戻すと、中央に備え付けられた解説席には東隊のオペレーターである人見摩子が座っており、その隣の解説席二つには机に向かって突っ伏して拗ねている出水公平と、そんな先輩をどう元氣付けるか悩んでいるA級部隊である三輪隊の古寺の姿があった。

古寺が解説席に座った経緯は自身の部隊の先輩である米屋に呼び出され、到着の際何やら忙しそうな諏訪洸太郎に半ば強引に連れてこられたから。

元々少し遅れ気味にやってきた出水は満面の笑顔を浮かべていた米屋と緑川に迎えられて嫌な予感がしていたところで諏訪さんに発見。初っ端の解説ということで断ろうとしたところ、馬鹿二人に生贄にされるかのように置いていかれたという経緯がある。

ただ、まあ、それだけであれば、出水もまだここまで凹んでいない。では彼が解説席という目立つ場所で見えた目完全拗ねている理由とは。それは至って単純であった。

『三チーム対抗戦一戦目の組み合わせは、暫定B級10位諏訪隊とA級隊員の米屋隊員、緑川隊員、そして暫定B級6位香取隊の若村隊員による合同部隊。そして最期に弓手町支部所属の樹神隊員が加わった暫定B級13位の柿崎隊の三チームになります』

たった今人見が述べたように、盛り上がるであろう初戦の合同チームに米屋と緑川がいて、自分がハブられたせいであった。

元から東さんをお願いされて初戦の実況を行う予定であった人見はそんな彼の様子にはてなマークを浮かべているが、その一部始終を見ていた古寺は苦笑いを浮かべながら不貞腐れてる出水を慰めていた。

「出水先輩、初戦に出れなかったのは残念でしょうけど、これが最後つてわけじゃないんですから、元氣出しましょう。ほら、三チーム対抗戦、始まつちやいますよ?。」

「分かってらー。もう少しこうさせろバカヤロー」

テンプルともいえる古寺の言葉に、出水はピクリとも動かずに一定のトーンでそう返す。

古寺は顔に苦笑い、額に冷や汗を滲ませ、人見はそのやり取りにクスリと笑みをこぼす。

そんな三人の様子を上席から見ていた荒船はふと隣にいた村上と穂刈に尋ねた。

「そーいや諏訪さんらの隊、今日の午後から防衛任務だったよな？  
なんで無くなつたんだ？」

「知らないな、俺は」

「ああ。それは昨日、諏訪さんが茶野隊にシフトを代わってもらおう  
うお願いしたそうだ」

「おねがい……？」

「脅迫の間違いじゃないのか、それは？」

村上が自らの隊長である来馬からの情報を返すと、荒船らは少々失  
礼なことをボソリと呟く。

しかし、自分もその様子を想像してみると、ボーダーの先輩であり  
粗にして野をいく諏訪がオドオドしてる茶野達を脅すとまではいか  
ないが、勢いで押し付けられている様子が思い浮かび、自然と苦笑い  
が浮かんだ。

そんな会話をしていると、通路側に座っていた村上の側に一人の男  
性がやってきた。

「おまたせ、鋼」

「っ！ 来馬先輩、お疲れ様です。早い到着ですね」

一瞬驚いた表情を浮かべたものの、すぐに引っ込めて挨拶した村上  
に対し、ほんの少しだけ申し訳なさそうにしている男性の名は来馬辰  
也。樹神のように本部ではなく支部に所属しているが、一部隊の長を  
務める正隊員である。

彼は自然と立席し、席を譲ろうとする村上を「大丈夫だよ」と諫め  
つつ、村上達の真後ろにある三席ほど空いている席に回った。

「来馬さん、お久しぶりです」

「おつかれ様です」

「荒船君、穂刈君、こんにちわ。半崎君や加賀美さんはどうしたの？」

「半崎は今飲み物買いに行ってます。加賀美の奴は……」

「片付け中だな、部隊室を」

今回の三チーム対抗戦。先ほど東さんから説明があつたように樹神はチーム戦を行う際に一番ランクが低い部隊に参加することになり、今回参加する部隊は全隊中位以上という。となると、荒船隊に樹神が来ることになる可能性が高い。

そこで問題になるのが今の荒船隊の隊室だ。初期の頃、そこまでルールで縛る必要性を感じず、なるべくアットホームな隊であろうと考えていた荒船は隊室への私物持ち込みを許可していたが、最近の荒船隊のオペレーターである加賀美倫の私物で溢れかえっている。私物といっても、その大半が彼女の創作物である奇抜な人形の数々であるが、人を迎え入れる状態ではないことには変わらないので、隊長命令で片付けをしてもらっているのだ。

元々片付けるように言っていたのだが、荒船隊自体が仲良いのもあつて後で後でとしているうちに、今日に至ってしまった。

今彼女は泣く泣く隊室にこもって要らない己の作品の片付けと言う名のゴミ捨てを行なっている。

「もう隊室への持ち込みを制限するべきか……」

「いいと思うぞ、俺は。そろそろストッパーをかけるべきだ、加賀美に對しての」

「ひとごとみたい言ってるが、お前の筋トレ器具も対象だかな。あれも大概場所取ってるぞ」

「……………」

「そういえば、太一と今はどうしたんです？」

隊内の事情を話し合ってる荒船らの横で、村上は本来来馬と来るはずだった別役と今の存在がないことに気づき、後ろの来馬に質問を投げける。

すると、来馬は困ったように笑みを浮かべて口を開いた。

「本当はもつと本部には早く着いてただけ、荒船くん達みたいに」

軽く隊室を掃除しようとしたら、ね」

「……太一がやらかしたんですね」

「いや、ついでにいつも掃除してないところを一緒にやろうとしただけらしいんだけど……ちよつと悲惨なことに」

「隊室に向かいます」

「いや、待つて！ 今ちゃんからお願ひされて、僕と鋼だけは一戦目からしつかり見てきて欲しいんだつて」

「それは何故？」

「鋼は樹神君のことを知つてると思うけど、僕達は彼のことをあまり知らない。だから、せめて隊長である僕と彼を良く知る鋼だけでもチーム戦での彼の動きを知つてあげなきゃ彼を迎えるに失礼になつちやうからつて」

僕もちよつと強引に送り出されちゃつた、と困つたように笑う来馬に、村上は来馬隊長にこんなことで時間を取らせまいと『隊長である責任』と『初めてのチーム戦で動きにくいであろう樹神をサポートしてあげようとしていた来馬の優しさ』に巧みに訴えかけて送り出した、現在ここになき今の思いを受け取り、あとで差入れを持つていこうと心に決めて「分かりました」と席に着いた。

すると、時間になつたのか、再度人見のアナウンスが始まつた。

『みなさま、お待たせしました。東さん主催、三チーム対抗戦一戦目開始のお時間となりました。改めてまして、解説の出水隊員と古寺隊員、よろしくお願ひします』

『よ、よろしくお願ひします』

『よろしくつす』

『では、確認として三チーム対抗戦のルールを説明させていただきます。まずは――』

そう言つてルール説明を行う人見を聞きながら、荒船は改めて周りに目をやる。

やはりというか、現在A級部隊の大半とB級部隊の一部が防衛任務に就いているため席に座る半分がC級隊員となっている。

しかし、それでも樹神の注目と大規模なイベントであることから残

り半分は見知った顔や実力者の姿があった。

『さて、そういうしている内に今回のステージ決定権を持つ柿崎隊がステージの選択を終えたようです。ステージは……工業地区、となりました』

ステージ名を聞いて、ブース内が軽くどよめいた。

『工業地区は配管や工業タンク、製鉄建物が多く並んだステージですね。狭い範囲に建物が密集しているに加え、縦に長い建築物や入り組んだ配管などで射線が通りにくいいため狙撃を活用するのが難しいマップですが……』

『今回、どのチームにも狙撃手はいない。合同チームにはマスターランクの米屋隊員に加え、軽くて小回りが利く緑川隊員がいるし、高さがあつてそれなりに狭い地形だからこそ諏訪隊の主戦術である諏訪隊員と堤隊員の散弾銃による中々距離の面攻撃も活かしやすい。正直、数で利を得ることが大きい柿崎隊がここを選んで得る自隊のメリットよりも、他の隊のメリットの方が大きい気がしますね』

古寺のステージ説明に続けて言い放った出水の解説に、荒船含めた他の隊員も同意するかのようにつつと顎を引く。

ステージを選択できるということはそれだけで地形による利を得ることができ、逆に他の隊に不利を与えることが出来る。勿論、これらは自らの部隊の戦術・相手の戦術にもよるが、戦う前にスタートラインが変わるのは大きな要因となる。

だが、それはB級ランク戦の時の話、今回のような当日に対戦相手が決まる場合は時間がないためチーム戦毎に戦術を組む時間は全くない。故に、相手に合わせた戦術を組むことなんて到底不可能であり、さらには合同チームの存在もある。となると、大抵は柿崎隊自身が目に見えて利になるステージを選択するのだが、

「(そもそも、柿崎隊の基本戦法は合流優先からの数による攻め。単純だが、その分ステージによる利を得るのが難しい。なら下手なステージを選んで相手部隊の利になるより市街地あたりを選んだ方がいいはずだが……)」

荒船がそう考察していると、不意にポケットに入れていたスマホが



震えたのを感じとり、手に取って起動。

画面に映ったのはある人物とのライン会話。

彼は一番新しいメッセージを読むと、フツと笑みを浮かべた。

「荒船、どうした？」

「いや……これを見る」

荒船の変化に気付いた村上がふと荒船に尋ねると、荒船は自身の携帯を村上に放る。

それを難なく受け取った村上は携帯の画面に目をやり、荒船と同じく笑った。

そして。

『各者一斉に転送開始っ！ 転送位置は珍しく部隊員がバラける形にはならず、逆にまとまっている様子！ これはチーム単位の戦闘になると予想されます！』

『北に合同チーム、西に諏訪隊。南東に柿崎隊といった形ですね。何人かバツグワームを起動しましたが、距離と動き的に諏訪隊と合同チームが最初にぶつかりそうです』

『古寺隊員の言った通り、柿崎隊は合流することを優先し、遅れて戦闘に参加する模様。……いや、しかし、柿崎隊に参加した樹神隊員は真っ直ぐ諏訪隊と合同部隊の接敵地点に向かっていきます。到着すれば乱戦必至。個人ランク戦しかデータがない樹神隊員、一体どう動くのでしょうか？』

『グラスホッパーとスコープオンの扱いが長けている樹神隊員ですが、部隊戦ともなると対人ではなく対複数、当然各々の間合いや動きが異なるため、行動が制限・戦場が複雑化します。それらにしっかりと対応できるかが樹神隊員の最初の課題になるでしょうね』

『なるほど。その点、出水隊員はどう考えていますか？』

『——いやあ、俺たちが思うより、樹神隊員はできるよ』

その一言にはてなマークを浮かべる人見と古寺だったが、出水はニヤリと口角が吊り上げるだけで視線をモニターから変えることはない。

そして、同じような表情を浮かべている荒船と村上。

彼の手に持つスマホには、簡潔な文のやりとりが映されていた。

『暴れてやれ』

『任せとけ』

◆? ◆? ◆?

「柿崎隊長、なんでステージの決定権を樹神先輩に委ねたんですか？」  
三チーム対抗戦が始まって二分ほど。

元よりある程度まとまった状態で各地に転送された柿崎隊は既に柿崎と巴が合流済みであり、今は照屋との合流を目指して足を動かしていた。

その最中に巴から発せられた質問に、柿崎は正面を向いたまま答えた。

「今回の三チーム対抗戦は、大半が樹神の実力を見るために集まった人達だ。俺たちにみたいには、半分勧誘目的の人らもいると思う。俺たちも含めて、一戦一戦が貴重な物差しだ。けどさ」

不意に固かった彼の顔が崩れた。

「樹神からしたら、部隊戦なんて初めてだろう。右も左も、味方も分からない状態なのに、俺たちばかりがそれじゃダメだろう」

そう言う柿崎の横顔は、困ったような笑みを浮かべていながら、どこか慈愛に満ちた表情であった。

作戦会議の時、柿崎は樹神に尋ねた。

「どこがいい?、と。」

それに対して、少し驚きを交えながら樹神が指定した工業地区。それに対して照屋も巴も、あまり良い顔はしなかった。

しかし、柿崎はニカツと笑うと、分かったと了承。樹神も含めて周囲が驚愕してる中、さらにはこう告げた。

「自由に動け。俺たちがサポートする」

樹神がどういう考えで工業地区を選んだのかは分からない。

それでも、柿崎は樹神に対して、後始末はするから好きに動けと

言ったのだ。

隊長のことだ、何か考えがあるに違いないと思っていた巴だが、ここに来て少し不安に思い、口から出た疑問。

甘い考えだった。自分たちは午後から防衛任務で参加もできなくなる上に樹神の働きを見ることが出来ないことを考えると、貴重な機会をドブに捨てるかのような行為だった。

しかし、それ以上に自分たちの隊長らしい考えだった。

「俺、やっぱり柿崎隊長が隊長で良かったです」

「……嬉しいこと言ってくれるな」

こそばゆいと言わんばかりに頬を掻く柿崎は、ちょうど諏訪隊と合同部隊がかち合った地点に向かう樹神を思う。

個人戦での彼の實力は分かっている。だからこそ、試行錯誤でもいから部隊戦というものを少しずつ分かっていってほしい。

故に単独行動を許した。

故に彼の考えを尊重した。

どうか部隊戦という新しい戦場で、彼に多く得るものがあるようにと。

これを直接彼に語りはしていない。

——しかし、そんな思いを樹神はしっかりと受け取っていた。

工業地区に建てられたタンクの上を、配管の上を、まるで地上を走破するかのように駆ける。

初の部隊戦、参加する部隊の戦術に合わせるよう強制されるかと思っていた。自分勝手な行動は咎められるものだと思っていた。

しかし、今走っているのは自らが選んだステージ。

そして、自らが考えた動き。

それらを許してくれた柿崎には感謝の言葉しかない。

聞けば、柿崎隊は午後から防衛任務で抜けると聞いた。時間的にも二戦目は彼らにないだろう。

恐らく、柿崎は分かっていた。

それでも、俺に好きに動けと託してくれた。

「応えなきや、いけないよな」

俺はポツリとそう零しながら、思考を回す。

三チーム対抗戦。個人戦とは異なる対部隊による戦い。

当然、個人ランク戦のような今までの動きではダメだろう。ポーターには映像として記録を見直すことができる機能がある。それを活用されているのであれば、一対一や二ならまだしも複数にもなると、ある程度動きを予測され逃げ場がなくなる。反射的であるが動き自体は理性的であるため、それは当然だ。

今マップで確認できる、六つの敵の反応。おそらくモニターに映る風景も火花を散らすよう攻防を繰り返しているのだろうが、それでも誰かが落ちることはない。

恐らく、俺の存在を気にして、両チームともにストッパーをかけているのだろう。下手に人数が減ると、俺の動き先を潰す駒が減ってしまうから。それでも戦闘を続行するのは、漁夫の利を得ようとした俺を釣るため。

一対一では影浦を無敗で下すほどの強力な戦力である俺だが、部隊戦ともなると話は別。このまま突っ込んで俺は恐らく袋叩きで潰されるだろう。

で、あればどうするか。

確認してみよう。

相手から見えてる俺の手札は、小回りは利かないがグラスホッパーによる高起動力。他、接近戦における攻撃力と不可避の一閃、サイドエフェクト、高トリオンによる超硬シールド。

一人で防衛任務に着くことが多いため、多対一の立ち回りもそれなりに分かってるが、今回はプログラムであるトリオン兵じゃなく、防衛隊員。あまり一人で無茶は出来ないだろう。

次に、俺が得ている利について。

数は完全に向こうの方が上。

チームでの立ち回りも俺なんかよりもよっぽど長い。

そんな中で、現在俺が有利なのは何か？

「個人戦みたく、対面してから開始じゃないってとこだな」

顔を合わせてから始まる個人戦ではないという点。戦闘中のあの場に自分のタイミングで仕掛けられるという点だ。

つまりは奇襲。それが今俺が取れる大きなアドバンテージだ。

ならば、どういった風に攻めるのか。

まず一閃は論外。あれは隙も大きければ、戦闘中狙えるのは一人のみ。一人落とせたとして、あとの五人を一人で十分に相手取れると思いがたりはしない。

そうなると、残りの手札で真つ先に上がるのはグラスホッパーによる高機動攻撃。

これ自体には大きなデメリットは存在しないが、それは今までの個人戦で見せてきた。諏訪隊も、合同部隊も恐らくそれで来ることが分かってる。

俺がそれで奇襲をかけてきても対応できるよう、万全な体制で待ち構えているだろう。

……と、なるとだ。

その体制を崩してやればいい。

「ちゃんと使いこなせるまでは、使うつもりはなかったんだけどな」俺は苦笑いを浮かべながら、そう呟く。

今用いようとしている手は玉狛から帰ってきてから習得を志した、いわば新たな手札。ぶっちゃけ奥の手ともいえるレベルのものだ。

だが、今の状態ではまだ完全習得には至っておらず、本部には二人を除いて誰も知られていない。

本当は二宮さんと再び相見えるまでは取つとくつもりだった。

だが、柿崎隊の皆に好きに動かせてもらってるこの現状で、俺が手を抜くことなど言語道断だ。

最も効果的と分かっているのに使わないのは、単独行動を許してくれた彼らに申し訳が立たない。

「グラスホッパー」

工業建築物の上を走っていた俺は、諏訪隊・合同部隊たちの元まで約百メートルとなった地点でグラスホッパーを真上に向けた形で起

動。

元々地上から十数メートルあった地点から、更に高度に昇る。先ほど柿崎隊のオペレーターである宇井さんに確認を取ったところ、敵は比較的広く、高い建物や配管などで囲まれた広場で、地に着いて戦っているらしい。

見晴らしが良く、人数による有利を活かすための場所であるだろうな、そのおかげで今上空に無防備になった俺の存在に気がついていない。

俺はグラスホッパーの加速による慣性で上に昇りながら、ふと両手を大きく前に差し出した。

そして、小さく呟く。

「誘導弾……十……炸裂弾……」

瞬間、両手の先に出現した巨大なトリオンキューブ。

二宮のものよりも少し大きなそれを、俺はゆつくりと近づけて徐々に融合させていく。

そうすること、七秒ほど。

ちやうど、加速が限界に達し、上空でピタリと俺の体が停止した瞬間だった。

——合成弾が完成した。

「誘導炸裂弾」

キン、と音を立てて八分割されるトリオンキューブ。

それらは次第に丸みを帯びると、鋭い音を立てて上空から降り注ぐように広場へと射出された。

俺もそれに続くよう、新たにグラスホッパーを起動して広場に向かって加速する。

彼らの姿を視認すると同時、先ほどまで激しい攻防を行っていた全員が上を見上げて俺を捕捉した。

まあ、入り組んだ地形をほぼ真つ直ぐ走破した上、バックワームも着ていなかったので、上から来るとある程度の予測はされていたのだろう。

だが、俺より先じて向かってくるトリオン弾は予想外だったようだ。

「っ!？」

「回避っ!」

八分割とはいえ、一発一発の大きさはそれなりにデカイ。

咄嗟にシールドを構えながら回避行動を行う誰かに弾丸を視認誘導で集中させれば二人は落とせるだろう。

——玉狛に行ってみろ。良い経験が出来る。

サイドエフエクトによりスローと化した世界を眺めながら、ふと二宮さんの言葉を思い出した。

実際に気付くまでずっと胸の内にあった疑問。

射手トリガーを扱う切っ掛けとして、何故わざわざ玉狛の、より詳しく言えば小南を挙げたのか。

射手自体は二宮さんを含め、まだ何人もいる。

そんな中、小南を見てみると言ったのか。

その答えは、実際に闘ってみて、すんなりと頭に浮かんだ。

この強大なトリオンで力任せに圧倒するためじゃない。

小南が炸裂弾で双月の一撃に繋がったように。

「俺の武器を、活かすためだっ!」

瞬間、爆発音。

予想していなかったのもあるだろうが、爆風を撒き散らしながら炸裂することで、この場にいる全員が直撃を避けたものの、大きく態勢を崩した。

……あとはいつも通りだ。

グラスホッパーを六つ、各々の近くを通るよう角度を付けて配置して、最高速で飛ぶ。

横を通り過ぎる時は、胸を突くか、首を刎ねて。

「ちくしょう……っ!」

誰かの横を通り過ぎる際、そんな声が聞こえた。  
誰の声か判別できない。

それほど、六人を倒すのは一瞬であった。

『トリオン体活動限界、緊急脱出』

爆煙が舞っていた戦場に、場違いな機械音。

そこから六つ、光が空に打ち上がった。

それを見届けて、小さく眩く。

「さて、締まっていくか」



## 第十二話 チーム戦②

「俺は誘導弾ハウンドしか使えない」

三チーム対抗戦第一戦目が終了したおおよそ十分後。

荒船達に呼び出された休憩室で、荒船から奢られたスポーツドリンクを一気飲みした後吐いた言葉であった。

それに対して、俺に向かい合うようにして座る荒船、村上は僅かに眉をひそめた。

「使えねえってのは、慣れてないっつー意味か？」

一瞬荒船と村上が横目にアイコンタクトを取った後、すぐに視線をこちらに戻してそう尋ねる。

俺はその質問に対して、小さく苦笑いを浮かべた。

「慣れじゃなくて、相性の問題だ。どうやら俺は分割したトリオンキューブを一つ一つ細かく弾道設定するのが苦手らしい」

手元で中身が空になった空き缶を弄びながら、俺は先週のことを思い出す。

まず、自分が弾トリガーの扱いを学ぶ機会を作れたのは京介のおかげだ。

以前京介にした頼み事の内容は至ってシンプル、ベテランの射手シューターとの仲介をお願いしたいというもの。

正直マスターレベルに至ってなくても良かったが、京介はまさかのA級一位部隊である太刀川隊の射手シューター、出水に教わる機会を用意してくれた。

最初に出水と対面した時は心底驚いたものだ。

向こうは俺が来るのが分かっていたため、特に変わった様子はなかったが、次いで俺が弾トリガーの扱いを教えて欲しいと頭を下げると驚いた表情を浮かべていた。

京介と出水の間で話が付いているとはいえ、こちらは教わる立場だ。例え年下であったとしても、けじめとして頭を下げて頼むのは当然と考えていたが、向こうはそう思ってはなかったらしい。

まあ、その後になんやかんや弾トリガーを扱う時のイメージやそれ

それぞれの弾の特徴と有効な場面、メリット、デメリット。しまいには合成弾も教わったわけだが、それらを通じて思い知ったことは、俺に射手スタイルで弾トリガーを撃ち出す才能がないというものであった。焦ると変な方向に撃ってしまうということはサイドエフェクトによる恩恵で一度もなかったが、正直サイドエフェクトがなければ心が折れていたと思う。

そのことを見て理解した出水は渋い顔をしていたが、俺が完全に全ての弾トリガーを扱うことを目指しておらず、一つの手段として持つておきたいということを知ると、すぐさま誘導弾ハウンドのみに絞った。

誘導弾はその性質上、大雑把な射角で撃ち込んでも勝手に追尾してくれる上、変化弾バイパーと比べると見劣りするが、それでも多角的な攻撃、つまり、相手に回避・防御姿勢を強制させるのには最適なトリガーであった。

最後に炸裂弾メテオラによる合成弾を覚えてくれたのも、威力の底上げもあるが、究極的には相手を崩すのに効果的なものであるからに他ならない。

そして、それが今回の戦いでぶっ刺さったわけだ。

俺がそう説明し終わると、村上がふと言葉をこぼす。

「何故、扱いが簡単な銃型ではなく射手の方を選んだんだ？ 一葉のトリオンは本部全体で見ても頭抜けている。わざわざ射手に拘らなくても良かったと思うが」

そんな彼の疑問に、俺はあらかじめ言葉を用意していたかのように答えた。

「およそ四年間、無手のスタイルでやってきた。今更銃を使っても十分に扱えるどころか、扱えきれずに本来よりも弱体化する可能性もある。そもそも、さつきも言ったが、俺が弾トリガーを使い始めたのもより確実に相手を倒すための手段としてだ。直接相手を倒す手じゃなくて構わない。それに」

一つ間を開け。

「弾を打ち出す細かい設定は苦手だが、威力・弾速・射程の調整、分割したトリオンキューブの大まかな射出方向を決めるのは大体出来る

し、それだけでやれる事の幅が大きく広がる。撃ち出す方向・威力が常に決まってる銃じゃこうもいかないぜ」

そう言つて含むような笑みを浮かべた樹神に、二人は僅かに額に汗を滲ませる。

先程見た誘導炸裂弾サラマンダーによる爆撃とグラスホッパーによる高機動攻撃。不意打ちだったとはいえ、あの二つが交わるだけ六人も隊員を一瞬で撃破してみせたのだ。

それに加えて、樹神には回避不能の一閃もある。細かく多方向に分かれて襲いかかってくる誘導弾ハウンドに対応してる合間に一閃を打ち込まれるだけでアウトだ。

確実な強化として弾トリガーを会得してきた樹神に二人はこの野郎、と言いたげに小さく笑みを浮かべるが、樹神は次いで一つ力を抜くようにため息をついた。

「けど、まあ、今回のチーム戦ではどう生きるかは分からない。俺自身、まだ弾トリガーを使いこなせてはいないし、さっきの戦いも弾トリガーの情報がないまま、使うにちようど良い機会が舞い込んできたから上手くいったに過ぎないからな。次はこう簡単に行かないだろう」

その言葉に村上は表情を引き締め、荒船は背凭れにもたれ掛けながら上を仰ぐ。

「確かに、さっきのアレで一気に皆の警戒レベルが上がった。加えて、次の対戦相手が相手だもんな」

「? そんなにヤバイ人らなのか?」

荒船の懸念に俺は首を傾げながら、先程決定した対戦相手の隊を思い出す。

「たしか、王子隊と生駒隊……だったよな」

「ああ、どちらもランク戦上位の常連だ」

村上が肯首すると、荒船が「よっと」と勢い良く体を起こして両肘を膝に置き、手を組む。

「生駒隊はボーダーでは珍しい四人構成の隊だ。隊長である生駒さんは攻撃手五位の猛者、孤月での間合いは攻撃手1だ」

流れるように説明を始めた荒船に、横に居た村上が声を上げる。

「荒船。俺らで教えていいのか？」

「いーくんだよ。俺が言うことはボーダー共通の情報だし、どうせ後で同じ隊の奴らに教えてもらえる。それに、折角一葉が速攻で終わらせたことで伸びた休憩時間だ。ここで言ついても得はあつても、損はねえさ」

数秒して、それもそうかと納得した村上。

その様子を横目に確認した荒船は再度視線を戻した。

「生駒さんの伸びる孤月、『旋空』の間合いは一葉の全力の『一閃』より短いぐらいだ。こうして聞くのと実際に受けるのとじゃ、だいぶ違う」

「下手に受けに回ると一気に持つてかれるぞ。少し前、俺のレイガストもそれで割られたこともある」

「今は？」

「スラスターで寄つて、あとは接近戦だな。一応、旋空の軌道が線である分、大まかな剣筋は読める。あと、レイガストをスラスターで加速させて投げるつても、数える程だがやったことはあるな」

「なるほど」

黒江で始めて見たのから始まり、荒船や鋼が扱っていた旋空。

どれも伸びて十数メートルほどであったが、生駒さんのそれは格別らしい。

旋空の特徴として、先端に近いほど威力が上がるという点があるため、村上はスラスターによる移動で剣筋から逃れる、もしくは前進して高威力の間合いから外れ、硬いレイガストで受けることが出来たのだろうか、自分ではそうもいかない。

グラスホッパーで動くのはいいが、あからさまだと動きが読まれる可能性もあるし、シールドだと普通に割られる可能性もある。

「(と、なれば、それ以外の方法か……。普通に先手を取つて受けに回すのが無難か?)」

そんな風に考えていると、荒船が再び口を開く。

「次は射手の水上なんだが、これが結構曲者でな。言い放つたトリ

ガーと実際のトリガーが違うんだ。それと、一応生駒隊の司令塔でもある」

「毎回、アステロイド通常弾と言いつつ、ハウンド誘導弾、メテオラ炸裂弾をかましてくる。受ける身としてはやりづらいぞ」

「弾トリガーの飛ばし方は？」

「投球スタイルだな」

「了解した」

水上の特徴、実際に放った弾と言う弾が違うってのは、確か出水も高等技術として取り上げていた。

曰く、ある単語をタイピングする際、別の単語を口に出しながら行うのに近いらしい。

ただ、俺のサイドエフェクトの効果的に大した影響はないと思われる。

「次は生駒さんと同じく攻撃手の南沢だな。コイツは上位常連の部隊だけあって腕は良い。今は違うが、一時はマスターレベルまで登ったことがある。が、ノリや勢いに身を任せる癖があつてな。釣れば乗ってくることが多い」

「荒船を蹴散らした樹神からすれば、一対一なら大した脅威じゃないな」

「うっせえ、お前も負け続けだろうが」

「次は勝つよ」

「次も勝つぞ」

最後のやりとりで村上と俺の間で火花が散る。

それを見かねた荒船は息を一つつき、手を叩いて一区切りを付けさせた。

「ほら、次行くぞ。生駒隊の四人目は狙撃手の隠岐だ。腕に関しては言わずもがな、狙撃手には珍しいグラスホッパーを扱う」

「狙撃手がか？」

「別に分からないことじゃねえぞ。お前はまだ狙撃手の立ち回りを知らないから仕方ないことだが、素早く狙撃地点に着く、位置バレした時の逃げ、一度撃つた後の場所変えにはうつつつだ。俺も使用を考

えたこともある」

「荒船、ああいうの好きそうだしな」

真剣な表情でそう言う荒船の隣で、村上がからかうような笑みを浮かべた。

ほつとけ、と半分村上を睨みつけながら言う荒船。

俺はそんな彼らのやりとりを見ながら、ふと荒船の言い分の中で気になった点を挙げた。

「荒船って、狙撃手だっけか？」

「ん？ ああ、そういや言ったことなかったな。六月から俺、攻撃手から狙撃手に転向してんだ」

「まじか」

「そういえば、もうそろそろで七千ポイントだったな？」

「おうよ、半年でマスターレベルになってやんぜ。見てろ」

「攻撃手から狙撃手に転向して、半年でマスターランクってヤバくないか？」

弾トリガーを扱ったが故に、攻撃手から狙撃手が変わった時のポイントの取りにくさを感じた俺は、苦笑いを浮かべながら荒船を見やると、彼はいつものようにニヤリと凶悪に笑う。

ふと隣の村上を見ると、俺と似たような表情を浮かべていた。

やはり半年でマスターレベルってのは凄いらしい。

「さあ、話を戻すぞ。次は王子隊だ」

「王子って、名前が凄いな」

「お前の苗字も大概だけどな」

純粹に王子という名前に驚いた俺に対し、荒船と村上が苦笑いを浮かべながらそう呟く。

少しして荒船が咳払いを一つ。

「王子隊は質実剛健、どんな相手にもしつかり分析を重ねた上での対策を敷いてくる。純粹な自力では生駒隊の方が上だが、一葉にとってやりにくいのは恐らくこっちだ」

「隊全員が走れる上、三人とも中距離攻撃方法を備えてる。下手に顔を合わせて戦っていると詰まされるぞ」

「王子自身、チェス好きだからそういうの好きそうだしな」

何やら王子という人物は随分と頭の切れるらしい。

二人の話を聞いていると、どうやら俺の動きが読まれる可能性が高いようなので次戦では要注意だ。

「まあ、隊としての話はこれぐらいにして、まずは隊長の王子からだな。王子は攻撃手だが、その中では少し変わったトリガー構成だ。メインは孤月なんだが、サブにスコープピオンとさっき言った中距離攻撃方法として誘導弾の二つを使い分ける変則的な戦い方をしやがる」

「王子自身、何か突出した技術を持つてるわけじゃないが、リアルタイムで対策を練ったり、相手の戦略を読んだりとする力が強い。加えて、隊でまとまって動くことが多い分落とすににくいが、先に落とすことが出来るなら比較的楽にはなると思うぞ」

「なるほど。チーム戦らしい強みだな」

個人ランク戦ではない、新たな強みに俺は次の戦いに期待を膨らませる。

先ほどのチーム戦はどっちかと言うと、チーム同士での戦略を展開するのではなく、俺という共通認識を持つてお互いが俺を釣り出そうと動き、それを上回った俺がただただ蹂躪しただけだったため、正直チーム戦というよりか個人ランク戦のような感覚に近かった。

故に、王子のような切れ者がどのように俺を封殺しようとしてくるか、正直楽しみであったりする。

そんな風に考えていると、ふと荒船が思い出したかのように口を開いた。

「これはチーム戦に関係ない話なんだが、王子には同輩や後輩、年下に変なあだ名をつける癖があつてな。一葉にコダマルクっつーあだ名付けてたぞ」

「……俺も、王子くんにあだ名を考えた方がいいか?」

「いいだろ、別に」

荒船がからかうような笑みでそう告げるのに対し、俺が少し真面目な表情でポツリと返すと、村上が苦笑いを浮かべる。

そうしていると、荒船が表情を引っ込めた。

「んじゃあ、次だ。王子隊の射手、蔵内だ。名前、聞いたことあんだろ？」

「蔵内って……まさか生徒会長か？」

俺の予想に荒船が「正解」と答える。

荒船や俺が通う高校は俗に言う進学校。それだけあつて普通の生徒にさえ課題が多いのだが、生徒会ともなると忙しさは他の生徒の比ではないだろう。

「ボーダーに副生徒会長がいるのは知ってたけど、生徒会長もいたのか。忙しいだろうに、すごいな」

「……単純な忙しさでいうなら、お前も大概だと思っけどな」

素直に感嘆してた俺とは別に、荒船が俺に聞こえないギリギリの音量で呟き、村上が頷く。

それに俺が何か言ったかと反応しそうになるが、それに先じて荒船が説明を再開した。

「蔵内は……言いにくいから呼び方を戻すが、会長は隊全員が中距離持ちだけあつてあまり目立たないが、合成弾も扱うベテランの射手だ。王子自身も誘導弾<sup>ハウンド</sup>を扱うが、結局のところ中距離での間合いは會長が一番厄介だ」

「王子も樫尾も、誘導弾<sup>ハウンド</sup>を相手を落とすための手段として扱うのは上々だが、味方のアシストでの使い方は蔵内の方が上だしな」

村上の補足に、荒船はため息をつきながら全くだ、と小さくこぼす。

「蔵内の使う弾トリガーは何がある？」

「誘導弾<sup>ハウンド</sup>に加えて、通常弾<sup>アステロイド</sup>と炸裂弾<sup>メテオラ</sup>と扱<sup>ホーネット</sup>う合成弾は誘導炸裂弾<sup>サラマンダー</sup>と追尾弾かな？」

俺の疑問に、村上が右手を顎に手を触れながら答える。

合成弾の内、誘導炸裂弾<sup>サラマンダー</sup>は分かるが、追尾弾<sup>ホーネット</sup>は情報でしか知らない。確か、誘導弾<sup>ハウンド</sup>よりも探知誘導能力も誘導半径、威力や速度といった性能も高いと出水が言っていたような。

まあ、使わせないようにするに限る。

「最後に王子隊攻撃手の樫尾だな。攻撃手としては中の上、動きも正直で安直なところも多い。コイツも、一人の時は大した脅威じゃない



な」

「中距離もいけるぐらいしか、特筆することもないしな」

「ん、分かった」

生駒隊計四人、王子隊計三人。

試合前に敵となる人物合計七人の情報を得ることが出来たのは大きい。特に生駒さんの旋空や水上の射撃、初めての狙撃手相手である隠岐、加えてチーム戦では手強くなりそうな王子隊全体の動きの情報を知れたのは本当に荒船と村上に感謝だ。

初戦は時間の余裕的にも相手の情報を知る時間がなく、味方の情報しか——あ。

「そういえば聞きたいことがあった。次戦、俺が参入する部隊についての情報が欲しいんだが……」

「ん？ ああ、分かった。たしか次に一葉が参加する部隊は……」

そこまで言って、何か思い当たった荒船はふと隣の村上に視線をやった。すると、村上は微笑を浮かべて小さく頷く。

「あく……一葉、それは実際に会って話してみた方がいい。向こうも聞きたいことはあるだろうし、これに関してはそっちの方が早い。今から部隊室に向かえば十分な時間を取れるしな」

「柿崎さんらと話して分かっただろうが、チームの面々と話し合うのって結構大切だぞ？ 初対面なら尚更だ」

荒船と村上がそう言うのと、次いで俺は休憩室に取り付けられた時計に目をやる。

次戦の対戦開始まで残り三十分ほどになっていた。

「うん、そうだな。そろそろ向かうことにするよ」

ソファから立ち上がり、両腕を上げて身体を伸ばす。

パキパキと心地いい音が体の内で鳴り、心なしか体が軽くなったように感じる。

「隊室の場所は分かるか？」

「ああ、柿崎さんのところ向かうついでに、あらかたの部隊の部屋は覚えただ。あとは土産を取りに行かないと」

「礼儀が良いな」

「そりゃあ、短い時間とはいえお世話になるわけだからな。用意して当然だ」

そんな風に軽く言葉を交わし終わると、荒船に向かって「飲みモンご馳走さま」と一言、歩き始める。

対して荒船は「おうよ」と軽く手を振りながら、休憩室の外へ向かった俺の背中を見送った。

その後、休憩室に二人だけとなった荒船と村上は同時に小さくため息をついた。

「どう思う?」

「この機会に一発倒したい」

「だよな」

短く言葉を交わし終わると、二人は笑みを浮かべてその場を後にし、ランク戦観客室に向かった。

◆? ◆? ◆?

時を同じくして、ある部隊室。

部屋の隅々まで清掃され、室内に設えてある本棚にはギチギチになるまでの本。部屋の真ん中には低い長方形のテーブルとその三辺を囲うようにするソファがあり、残りの一辺の先には大型のモニターが壁に備え付けられていた。

そして、室内には四人の防衛隊員の姿。黒を基調とした軍服のような隊服を着揃え、内三人はテーブルを囲うようにソファに座っており、残りの一人はモニターの前で立ちながら、指示棒をクルクルと回していた。

「さて、とりあえずチーム戦初戦のコダマルクと個人戦におけるコダマルクの動きを映像で見直してみた訳だけど、どう思った?」

人当たりの良さそうな笑みを浮かべながら、他の三人にそう尋ねる男の名は王子一彰。王子隊の隊長である彼は、まるで教師が生徒に質問するかのように自身の隊の隊員である仲間たちに問いかける。

そんな彼に真っ先に応えたのは、顔からして生真面目が滲み出る黒

髪の少年であった。

「一言で言えば、圧巻ですね。近接では影浦先輩を寄せ付けず、中距離でも高火力。たった一人でも一瞬で部隊を壊滅させられる力を持った人物だと思います」

語っている内容とは裏腹に、あくまで分析の一環であるといわんばかりの落ち着いた表情で淡々とそう告げた彼の名前は榎尾由多嘉。

王子隊の中で最も若いのが、年上に臆さず積極的に意見を述べる彼の姿に王子は満足そうに二度頷いた。

「うんうん。たしかに、それが今のコダマルクの総評だろうね。それじゃ、次はコダマルクの戦闘の根幹にある部分を探っていこう。クラウチはどう思う？」

ふと榎尾に向けていた視線を、対面に座する男に移す。

前髪を左右に分け、表情が薄い顔つきをしているその男の名は蔵内和紀。

彼は顎に手をやり、視線を下に向けながら幾分か考える素振りを見せると、次いで顔を上げた。

「樹神のサイドエフェクトに目が行きがちだが、樹神の原点はトリオン体での運動能力とスコープイオンの練度なんじゃないか？ その前提があつて、サイドエフェクトの恩恵を存分に発揮できるのだと俺は思う」

「うん、その通り。それらを踏まえつつ、一つ見て欲しいことがある」  
蔵内の答えに榎尾と同じく満足そうに頷くと、次いで王子は最後の一人に目配せを行った。

目配せを受けた女性、王子隊のオペレーターを務める橘高羽矢は手元の電子端末を操作し、王子の後ろにあるモニターにある映像を再生する。

自然と他の面々の視線はそちらに移り、何かあるのかと集中する。そこに映っていたのは、二宮対樹神の個人ランク戦であった。

「これに一体何が？」

眉をひそめる榎尾に対して、蔵内と王子は黙ってその映像が流れていくのを見届ける。

数十秒後、そんな彼らとは反面的に、樫尾が思わず疑問が口から出そうになった瞬間だった。

「ここだ」

王子がびしやりと言い放つと、樫尾が再び映像に注目する。

そこには二宮を中心<sup>ピンホール</sup>に、乱反射と呼ばれる既存の技よりも遥かに大きく、およそ半径三十メートルの球状にグラスホッパーを展開し、その間を飛び回る樹神の姿があった。

数十を超えるグラスホッパーを巧みに扱う樹神の姿に感嘆のため息をつく樫尾と蔵内。そして、気付いた。

「なんですか、この速度……」

「速すぎるな」

ふと樫尾が言葉をこぼし、蔵内が結論を述べる。

そんな二人の様子を見て、王子は同意するように小さく首を縦に振った。

「そう、速すぎるんだ。グラスホッパーは足場でもあるけど、加えて簡易的な加速盤でもある。けど、その加速度もグラスホッパーの展開数が多ければ多いほど減少する。パツと見た感じ、コダマルクが展開するグラスホッパーの数は二十を超えてる。なのに、コダマルクは普段のグラスホッパーの加速とほとんど変わらない速度を維持してるんだ」

王子の言葉に、樫尾と蔵内は各々のその推察を始める。

グラスホッパーの加速効力が低下したのに、それを維持している理由。それはトリオン能力の差だけではない。緑川などが扱うグラスホッパーを見ると、トリオン能力の差がどれほどあっても、あれほど数を展開していれば、その効力がトリオン能力の高さだけで説明できないのは理解できる。

そこまで考えて、二人は同じ結論に至った。

「トリオン体における身体能力の高さとは別に、グラスホッパーの扱いも、おそらくスコープオンと同等レベルの練度だ」

まるで樫尾、蔵内両者の頭の中を覗いていたかのようなタイミングで王子がそう結論づける。

そして、彼はそれだけで終えず、それによる考察を続けた。

「グラスホッパーは性質上、身軽な使い手の方が扱いやすい。それは軽ければ軽いほどグラスホッパーの効力を得やすく、触れるだけでそれなりの反発を得られ、小回りの利く動きへと昇華することができからね。けど、彼のグラスホッパーはそれらとはまた別の進化を辿ったものだ。

ただひたすらに直戦。

足場を目的とした小回りとは別に、単純な機動力の補助に特化した使い方なんだろうね。つまり、あれらの動き全てに、コダマルクは全力の跳躍を挟んでる」

そこまで言って、ふと王子は後ろのモニターに目を向けた。

モニター内ではスローモーションになった映像中に、グラスホッパーで加速した瞬間、元々そのつもりであったかのように身を翻し、次のグラスホッパーの足場に左足を合わせる樹神。

触れる前に左足を折りたたみ、左足平がグラスホッパーに触れた途端に左足を伸ばして跳躍していた。

傍目では目でギリギリ終えるぐらいの速さの中で、そんな動作をなめらかな身のこなしで行う樹神に、推測した王子は勿論、王子隊全員が戦慄する。

王子は指示棒を持ってない手で二本指を立てた。

「チーム戦においてのこれによる大きな脅威は二つ。さっきのチーム戦を見たとおり、爆破で体制を崩したとはいえA級二人を含めた六人を撃破できるまで至る、攻撃のヒットアンドアウェイ戦法の確立。誰もコダマルクの攻撃に反応できなかったことから、相当な速度を持つてるだろうし、三年間ほど一人でトリオン兵を相手していたところを見ると、近接戦よりこっちが彼のメインだと考えられる。

次に、場所から場所への移動の速さだ。さっきの戦いでは全力で駆けることがなかったようだけど、コダマルクが全力で向かえば、およそ半分の時間である戦闘に介入できたはず。初戦ではバックワームを使わなかったけど、ふとリーダーから消えたと思った途端、いつのまにか遠い位置にいるってことも十分にあり得るだろうね」

そこまで言い切ると、王子は小さく息を吐いてから「さて」と一区切りを付け、全員を見渡した。

「これらを踏まえて、コダマルクを抑えるにはどうするのがいいか考えよう」

「そうだな……。合流最優先、数の有利で動きを潰すのが一番じゃないか？」

「二人で樹神先輩と相対するのは考えたくないですね。自分も蔵内先輩の考えに賛成です」

二人の考えを聞いた王子は笑みを深くすると、続けた。

「オーケー。じゃあ、次はその数のぶつけ方だね」

「？　どういう意味ですか？」

王子の言ってる意味が理解できなかった樫尾が進んで疑問をぶつける。

すると、王子は橘高に視線で合図を送り、橘高が端末を操作。モニターに先ほどの諏訪隊、合同チーム、樹神含めた柿崎隊の試合の配置図を映し出した。

「さっきの試合、諏訪さんらの戦略は悪くはなかった。お互いが戦闘中に見せかけてコダマルクを釣って、数で倒そうとする。数つてのはチームならではの重要なファクターだからね。その展開を早いうちに完成させることが出来たのも、上々だったろう」

「そこに未知の攻撃、樹神の弾トリガーの強襲。それを考え付かなかったのが、諏訪さんらの敗因ってことか？」

ポツリとこぼした蔵内の一言に、王子はゆっくりと首を振った。

「いや、そうじゃない。諏訪さんらが負けた要因は『コダマルクを待つてしまった』って点だ」

蔵内はその一言で納得したように顎を引くが、樫尾はわずかに理解に及ばず、眉をひそめる。

それを見た王子は諏訪隊と合同チームが集まっている箇所に指示棒を指して、口を開いた。

「コダマルクを乱戦に引き込む。それ自体は僕も異論はない。けど、その展開に持っていく方法が少し違う。」

カシオ、そもそも何故コダマルクを乱戦に引き込もうとしてるか、分かるかい？」

樫尾は即答した。

「樹神先輩のサイドエフェクトによる恩恵を上回る情報を押し付けるためです」

「うん、正解。じゃあ、それに至るまでの過程はどうするのが一番良いと思う？」

王子のその言葉に樫尾は数秒考え込むと、ハッと何かに気付いた。

「……乱戦を、樹神先輩を中心に組み立てる？」

「うん。僕も同じ考えだ」

王子は指示棒で肩をトントンと叩きながら、モニターに視線を向ける。

「さつき言ったグラスホッパーによる機動力と合成弾を含めた弾トリガーを扱うなら、放置は絶対ダメだね。ふとした一瞬で全部荒らして持ってかれる」

「だからと言って、樹神ばかりを狙って、他との戦闘を避けるのも不味い。俺たちにとっての一番良い展開は、樹神が孤立した上で俺たち他数人を含めて乱戦になること。樹神の味方が一人でもいれば、また変わる」

「そうだね。そうなれば、自ずとやれることは限られる」

「全員バックワームを使用しての単独戦闘中の樹神先輩に奇襲、樹神先輩の味方を先に落とす。もしくは、回避しようにも間に合わない一撃で落とすとかですね」

樫尾が上げた案に王子と蔵内がゆっくり頷く。

「今回のメインはコダマルク。けど、敵はそれだけじゃない。彼らがどう動くかで、僕たちの動きも変える必要がある」

そこまで言って、王子は同チームの顔を見渡していく。

彼らの表情を見て取り、より一層笑みを深めた王子は一言。

「さあ、詰めていこう」

「そういえば、樹神のアイコンは作らなかつたのか？」  
「一応作ったんだけど、ちよつと納得いかなくて……。満足のかな  
いものを出すつもりはないわ。失礼なもの」  
「……………（誰にだろうか？）」

◆？ ◆？ ◆？

場所は変わって、生駒隊作戦室。

二戦目開始まで三十分を切ってるだけあって、室内には生駒隊の面々が揃っており、円形の机を囲うようにして座していた。

いや、それだけではない。いつもは娯楽室として機能してしまつて  
る作戦室にポツリと用意されたモニターに電源を入れ、そこに流れる  
映像をいつもは賑やかな隊の全員が黙って見ているのだ。

不意にドオン、という炸裂音。続けて、何かを連続で撃ち抜く音が  
響いた。

そんな明らかな戦闘音に、見る人は珍しく生駒隊が真面目に敵情推  
察していると驚くだろう。

だが、実際はどうかというと、こんな感じである。

『チェックメイトだぜ、マーク。俺たち相手に、たった一人で良く戦つ  
たな。百点をあげちやうぜ』

『そうかい。ジョン。俺もあげれるもんならお前にあげてえよ。百点  
じゃなくて、鉛玉だかな』

『おいおい、勘弁してくれ。俺はもうお腹いっぱいなんだ』

映像の場面は小さな建物のとある一室。壁にもたれかかっている  
のは足を撃ち抜かれて『赤い液体』が流れ出ている西洋風の男。そし  
て、その男を囲うように待機している五人の屈強な男達の姿があつ  
た。



全員が片手に銃を持っているのはいいが、足から流れるのはどう見ても血液。加えて、それなりに歴が長い彼らでも映像内に出てくる人物の顔は全く見覚えのないものだ。

なんて事ない、彼らはただ映画鑑賞をしてるだけだった。

「あの、イコさん？」

視聴し始めてからおおよそ十分ほど経った現在、目元のホクロが特徴的な美青年、隠岐がふとモニターから視線を外して、モニターの対面に座る男性を見た。

両手をこぶしにししながら膝に乗せつつ、両目にはゴーグルを装着し、視線が分からないようになっていいる彼、生駒は表情を変えないまま隠岐にゆっくり視線を移し、三秒ほどジッと見つめ合った。

その後、また何事もなかったように表情を変えないまま再度モニターに戻っていったが、付き合いの長い隠岐は彼が「もうちつと待つてな」と言わんとしていることが分かった。

そんなことをしていると、映画のクライマックスとなっていた。

『そんじゃあな、マーク。先に地獄で待ってる。お前のお仲間も、すぐに送りつけやっから』

『……………足りねえな』

『？ 何を言ってる』

『三途の河あ渡んのに、俺だけじゃ足りねえって言ってんだよ』

マークと呼ばれた男が上着を開く。

上着の下、彼の体に巻き付けられていたのは無数の爆弾だった。

『一緒に死ねや』

大爆発。

激しい閃光と空気も轟く爆音に、隠岐はお金かかってそうだなと内心苦笑いを浮かべると、ピツという音と共にモニター内の世界が止まった。

次は隠岐だけでなく、ほかの隊員も生駒の方を見る。

生駒は組んでいた腕を解いて、モニターにリモコンを向けていた。

彼はゆっくりと息を吐きながらリモコンを机に置くと、次いである人物を見る。

「水上」

「嫌です」

即答だった。

水上と呼ばれた彼は自身のポリューミーなモサモサした頭を少し乱暴に搔く。

「なんで俺なんすか？」

「水上やったらなんやかんや考えながら相手引きつけて道連れチュドーン出来そうやん。かつこよく散れそうやん。俺やったら自分からワくって突っ込んでチュドーンの自爆テロで終わりやで」

「サイバイマンみたいなやつちな」

生駒の言い分に静観を決め込んでいたはずの女性、細井真織が突っ込むように呟いた。

そんな彼女に対して、生駒隊の残り一人が元気よく手を上げて口を開いた。

「俺、サイバイマン好きっすよー！」

「ええ子やなあ、海。サイバイマンになった俺でも変わらず隊長って呼んでくれるんか？」

「はいっす！ サイバイマンになっても隊長は隊長です！」

「よし、ちよいとサイバイマンに外見変えてくるわ」

「なんでやねん」

席を立った生駒に水上と真織が同時にツッコむ。

その光景を見てた隠岐は心の内でいつも通りやなあと笑った。

「イコさん、樹神先輩の対策練らんでええんですか？」

「ん、ああ、樹神クンな」

隠岐の一言を機に生駒が押し黙る。

硬い表情のまま机を見つめる彼に、何か対策を考えているのだろうと周囲の隊員は特に何も言わず彼の答えを待つ。

数十秒後、ようやく彼の視線が持ち上がり、ゆっくり口を開いた。

「イッチってあだ名、よおない？」

「「あだ名考えてただけ？」」

水上と真織に加えて、隠岐も同時にツッコむ。

そんな光景を南沢が楽しそうに笑いながら見ている。

やはりというか、いつも通りの生駒隊だ。

「イツチ、ヤバない？ イツチの一閃とか、俺の旋空の完全上位互換なんやけど」

「完全は言い過ぎつすけど、たしかにヤバいつすね」

「二宮さんの個人ランク戦とか滅茶苦茶見てんだけど、みんな見た？」

「見ました見ました！ 一万回見ました！」

「嘘つけ」

数を増して誇張する南沢を真織が指摘した。

それを見て笑う隠岐は、いや〜と一言挟んで続ける。

「彼に当てるの、骨でしようねえ」

「頼むで隠岐。お前のイケメン力でぶち当てたれ」

「いやいや、イケメン関係ないでしょ」

「まず言うほどイケメンじゃないですって、俺。ほんまに。てか、イコさんは斬ってくれないんすか？」

「残念なことに俺はイケメン力足りんから無理やねん。イケメン力、足りんから、無理やねん」

「なんで二回言ったんすか」

腕を組みつつシミジミと虚空を見つめて呟く生駒に、水上が疑問符を浮かべる。

他。

「まあ、実際近接で樹神を斬るのは難しそつすね。鋼やカゲすら落とせたことないつすもん」

「獲れるとしたらおれの狙撃か、イコさんの旋空かつすね」

「俺は無理やから、隠岐やな」

「頑張れ隠岐」

「頼んだで隠岐」

「頑張つて下さい隠岐先輩」

「ええ……」

こんな会話があつたり。

「イツチ、何回頭ん中で戦つても勝てる感じせえへんわ。敵に回つた

らどうしようもあらへんやん」

「まあ、緊急時は味方なんですから、心強く思つときましようよ。ほら、『昨日の敵は今日の友』って言うやないですか」

「なるほどなあ」

「……………？ 急にスマホ取り出してどうしたんですか？」

「……………意味調べようと『敵は』って打ったら、『本能寺にあり』って出たんやけど？」

「知らん」

こんな会話もあつたり。

あとは次戦開始まで延々と上記のようなやり取りが続いたので、ここで割愛とさせていただきます。

◆？ ◆？ ◆？

「到着」

ゆつくりと歩いて十分ほどして、目的地の前へと辿り着いた樹神。

片手にはお土産が入った紙袋をぶら下げ、もう片方には簡易的な地図を持っている。

この地図はここに向かう途中に会った柿崎さんからいただいたもので、今回参加する部隊の作戦室の位置を記したものであった。

ある程度位置を把握はしているものの、こうして用意してもらえたのは凄く有難い。

次彼らと個人ランク戦をするときは何かお礼を持って行こうと心に決めながら、俺は目の前の作戦室のインターホンを押す。

すると、数秒ほどで扉が開き、ひとりの少女が出迎えた。

育ちの良さそうな立ち姿に、近未来的な白色の隊服。薄いクリーム色の髪をした彼女は少し緊張した表情を浮かべている。

「弓手町支部の樹神一葉だ。次戦はよろしく頼む」

そんな表情に気付いた樹神は先制して自己紹介、なるべく柔らかい表情でそう告げる。

次いで、手に持った紙袋を手土産として渡すと、目の前の彼女は胸

に片手を当てながら小さく深呼吸をして、口を開いた。

「ようこそいらつしやいました。今回部隊を率いらせていただきま  
す、那須玲です。よろしくお願いします」

そう言つて小さく頭を下げる那須。

その様子を見て、俺は内心うまくやっていけるかどうか少し不安に  
なる。

聞いたところ、今回の部隊員は全員女子で俺より年下らしい。

年上の男性相手に緊張するなという方が無理な話だが、それでも正  
直なところ、思うところはある。

「(まあ、それは仕方ないか。今回は遊撃として一人で動き回る形の方  
がいいかな)」

心のうちで勝手にそう結論付けていると、ふと那須があのと声を挙  
げた。

俺は小さく首を傾げて「どうした？」と聞くと、彼女は僅かに頬に  
朱をさしながら、言った。

あなたのファンです、と。

### 第十三話 チーム戦③

あれは確か四年前の時だった。

小学校から中学科に上がり、私は中高一貫の私立星輪女学院に、くまちゃんは公立の中学校へと別れて、約半年ほど経った頃だった。

小さい頃から体が弱く、病弱な私と仲良くしてくれたくまちゃんと別れたことは寂しかったが、学校が別れても付き合いが疎かになることはなかったから大丈夫だった。

けれども、元から体調を崩して学校を頻繁に休んでしまう私は学校の行事に参加することは難しく、加えて皆新しい環境故か自分のことに必死で、友達があまりできなかつたのは凄く寂しかった。

どうにかしないと、と。

私自身そう思っても体は言うことはきいてくれない。

あの時だつて、くまちゃんも新しい環境で大変なのに私が寝込むとすぐに家に来てくれた。

前々から外で元気に遊べない私に外のことを話してくれるくまちゃんだったけど、その時は新しい友達や勉強、学校の雰囲気について話してくれた。

ほかの中学校からの派閥とかがあつて、くまちゃんもちよつと苦勞しているらしい。

そんな時だ。

「玲、新しい学校は大丈夫？」

——これ以上心配はかけられない。

今まで散々心配をかけて今更何を、と笑われるかもしれないが、その質問に対して真つ先に心に浮かんだのはそんな言葉だった。

僅かに言い淀みはしたが、自分なりに明るく返せたと思う。

けど、くまちゃんからしたら大根芝居もいとこだったらしい。

口には出してなかつたが、すぐに嘘と見抜かれた。

この二ヶ月後に、くまちゃんが通う学校の文化祭に招待された。

文化祭と言っても、中学生がやれることなんて高校生と比べるとか

わいいもので、多くのクラスは何かしらの作品を作ってクラスルームに展示。あとは有志で舞台上で漫才やカラオケ、凄いものになるとバンドなどをするぐらいだった。

私の通う中学校は中高一貫の私立だけあって、公立の人らのものと比べたら豪華だったし、高校生の人らは出店などを行なってもいた。

そんな学校に通う私をくまちゃんが文化祭に誘ってくれたのは、私が自校の文化祭に参加出来なかったからだろう。

正直、当時の私にとってはそんな優しさが痛かった。

頑張らなきゃいけないことは分かっている。

私だって、出来ることなら元気でいたい。

でも、やはりこの病弱な身体が現実を知れと言いたげに邪魔をする。

焦りが苛立ちに変わってしまう。

そんな苛立ちで、自分の心の醜さを知る。

自分で分かっってしまうほどの悪循環だった。

そんな風に考えながら、体育館内でくまちゃんと有志による発表を見ている時だった。

「くまっー！」

不意にくまちゃんの横に知らない女の子がやってきた。

くまちゃんは彼女の名前を呼んで、言葉を交わし始める。

聞き耳を立てると、どうやらくまちゃんは今回の文化祭に際しての委員になっていて、クラスをまとめていたらしい。

自身のクラスの出し物で少し不手際があつて、少し手を貸してほしいっていうのが彼女の目的のようだった。

まだ半年ほどしか経っていないが、くまちゃんはクラスから頼りにされてる存在になっていた。

「(凄いな、くまちゃん)」

内容自体はすごく事務的なやり取りだったが、側から見れば仲良く話しているように見え、それが私に見せつけられているように感じた。感じてしまった。

「ごめん、玲。ちよつとだけ離れるけど、いい？」

「うん、大丈夫。ここで待ってるね」

笑みを浮かべてそう言うと、くまちゃんは申し訳なさそうな顔のまま行ってしまった。

それと同時に有志の発表が終わる。

すると、体育館からかなりの人が抜けていった。

不思議に思っていると、館内放送が響く。どうやらこの後の中庭で有名なお笑い芸人のお笑いライブがあるらしい。

気づいたら、百人以上いた館内には十数人ぐらいしかいなくなっていた。

動こうという気持ちになれない。

くまちゃんに待ってる、と言ったからではない。

単純に、気持ちが悪くなかった。

「(どうなるんだろ、私)」

どうするんだろう、ではなく、どうなるのだろうかと内心で呟く。

何をやるうとしても、もう無理だと決めつけてしまった。

この体質に最後まで振り回され、そして、なされるがままにしないのだろうか、思ってしまった。

そんな風に、考えている時だった。

『え〜……、皆さん、こんにちわ』

次の有志の人が、たった一人で壇上に上がっていた。

男の人だった。

彼はどこか慣れない様子でソワソワとしながら、次の言葉を探していた。

かわいそうに、と口には出さないが素直に思った。

辺りを軽く見渡せば、先ほどよりも明らかに人が減っており、残っている人も何処かサボりに来た人や物見遊山で馬鹿にする気満々の男の子たちばかり。

せっかくなのでこの日のために準備してきたのに、これでは報われない。

しかし、彼は続けた。

『え〜、人が少なくなっちゃってしまって可哀想って思ってる方、大丈夫です。わざとこの時間を狙って順番を練ってもらいましたので』



緊張した笑みを浮かべながら、そう言う彼。

その言葉を聞いて、私は少し安心したように肩の力を抜いた。

だが、ほかの人たちは何やらクスクスと笑っていた。

『今回、自分歌うんですけど、ここで一つ。自分が歌うのは既存の曲ではなく、自分で作詞作曲した歌です』

周りの人たちが急にヒソヒソと話し始めた。

曰く、大丈夫かと。黒歴史確定だなと。お笑いの方に見に行った方がいいんじゃないかと。

二人ぐらいが席を立って外に出た。

まあ、それも当然といえば当然だと思う。

自分で曲を作ったのは凄いが、所詮は中学生が独力で作った曲だ。純粹に期待しろという方が無理だ。

『本当ならバンドでやりたかったんですが、見ての通り、集まりませんでした。楽器できる友達、居なかったとです』

本当に落ち込んでるようという彼に、私を含めて何人かがクスクスと笑う。

『なので、今回あらかじめ自分が録音した曲でやらせて頂きます。ちゃんとカラオケバージョンで作ってきたので、口パクとかじゃないです。安心してください』

気にしてねえぞ、と一人の男の子が声を上げた。

それを聞いて、壇上の彼は苦笑いを浮かべてヒラヒラと手を振る。

ここで一つ咳払いを挟んだ。

『ここまでの話で出て行かなかった皆さん。ありがとうございます。自分が人前で歌うのは多分今日だけです。自分の歌を聞けるのは、後にも先にも試聴してくれた文化祭実行委員会の一部と貴方方だけです。ラッキーとでも思ってくれたら嬉しいです。それと』

そこで区切ると。小さく笑みを浮かべて続けた。

『歌詞に注目しながら、聞いてくれると幸いです』

そう言うや否や、音源の人たちに合図を送る彼。

スピーカーを通じて館内に響く音楽。

その完成度に皆が息を呑み――

「あ……………」

私は、曲に乗せて送られた彼の『言葉』に救われた。

◆? ◆? ◆?

「たしかに一時期話題になってたけど、そんな事があったんだ」

「那須先輩がたまに鼻唄で歌うのって、その時の曲だったんですね！」

納得しました！」

恥ずかしそうに視線を下に逸らし、頬を赤く染めながらそう告白した那須に熊谷と日浦が各々感想を述べる。

かく言う俺は両手で顔を覆っていた。

理由は明確。誰でも黒歴史を晒されればこうなるだろう。

「まさか、ボーダーにそれに知ってる人がいるとは……。というか、よく覚えているな。もう五年程前だぞ?」

ポツリ、と小さく独り言として呟く。

俺が中学二年、より細かく言えば両親が死ぬまでの趣味であった曲の製作であった。

パソコン内で各楽器の音を作るのではなく、俺は自ら楽器で音を奏でて、音声も専用のマイクを使っていた。

ドラマやキーボード、ギターやベースといった楽器や専用のマイクは高価なものだ。通常の家なら、ここまでのものを子供に買い与えたらしないだろうし、部屋の防音だっしてなくてはいけない。

けど、俺の両親は俺がしてほしいという対価はあったものの、了承してくれた。

以前、俺が中学二年まで両親に好きにやらせてくれたって言うのはこの事だ。

もちろん、これは趣味であったため、中一までは自身の中で完結し

ていたが、中二の頃にほかの人に聞いてみてほしいという欲求が沸いた。

で、結局文化祭の、そして大人数に聞かれるのは恥ずかしかったため人数が一番少なくなる時間帯を狙って歌わせてもらったというわけだ。

「もつとも、両親が死んでからは楽器には一度も触ってないんだけどな」

おそらく埃を被っているだろう楽器を思い起こしながら、俺は区切りをつけるため一度息をついてから口を開いた。

「と、とりあえず、次のチーム戦に向けて話し合わないか？ 次の対戦相手の情報はあらかじめ聞いたけど、俺は君らのことを知らない。お互いの情報交換をしようか……」

そう言うと、帽子を被った小柄な子が手をピシッと挙げた。

「日浦茜です！ ポジションは狙撃手！ よろしくお願いします」

「樹神一葉だ。日浦さん、よろしく……ん？」

ふと、何やら含むような笑みを浮かべる彼女から目の前に右手が差し出されているのに気づいた。

それが握手と気づいた俺は素直に応じていると、日浦と以前会ったことある黒髪の子のあいだで何やらアイコンタクトが交わされた。

「熊谷友子です。ポジションは攻撃手。どうぞよろしくお願いします」

「ああ、以前はわざわざすまなかった。よろしく頼む」

日浦に次いで自己紹介を終えた熊谷は、同じように自然と右手を差し出して握手を求めた。

当然応じる。

すると、熊谷と日浦が那須の方へ視線をやり、からかうような笑みを浮かべて口を開いた。

「玲も、もう一度しっかり自己紹介」

熊谷がそう言うと、那須が驚いたように僅かに両目を見開き、頬を薄く赤めながら視線を下にやった。

この自己紹介の流れでいうと、熊谷は遠回しに握手しなさいと言っ

ているようなものだ。

小声で日浦が「那須先輩、フアイト〜」と呟いた。彼女たちは知ってる。

那須が樹神を迎えるための台詞を、壁に向かって何度も練習していたことを。

樹神が来ることで一番緊張しているのが、那須だということ。

一番楽しみにしていたのが、那須であることを。

だからこそ、日浦も熊谷も、樹神も那須の言葉を待っていると、やがて那須は覚悟を決めたようにゆっくりと視線をこちらに向けて声を挙げた。

「改めて、那須玲です。ポジションは射手。よ、よろしくお願いします」

オズオズと差し出された那須の右手を、ゆっくり、それでいて力強く握る。

「改めて、弓手町支部所属の樹神一葉だ。ポジションは攻撃手。迷惑をかけるかもしれないが、よろしく頼む」

そう言つて小さく笑みを浮かべると、那須も、どこか安心したように微笑を浮かべるのであった。

『時間が迫ってきました、三チーム対抗戦第二戦目。実況は私、太刀川隊の国近と、解説には初戦で樹神くんにもボコボコにやられた米屋くんも諏訪さんをお招きしてま〜〜す』

『ボコボコされた言うな』

『あんなの、初見じゃ無理だろ』

再度場面は変わって、Bランク戦ブースの観客席。

先程人見が座っていた実況席には、おっとりとした雰囲気纏う国近の姿があり、実況席には拗ねたように両肘を机に乗せ、両手で頬杖をついている諏訪と米屋の姿があった。

気合い入れて臨んだせつかくの第一戦目を速攻といわんばかりに

終わらせられた諏訪は不機嫌の色が濃く出ているが、米屋は諏訪の真似をしているものの、笑みを浮かべている辺りある程度ふつきれているようだ。

ふと、米屋が国近の方を向いて問うた。

『弾バカと国近先輩だけっすか？ アレ、知ってたの』

『そだよ。つい先週、出水君が連れてきて、太刀川隊室で練習してたの。一応、秘密って言われたけど、樹神隊員が自分でバラしちやつたからね』

『かあ、まじかあ』

『うちの出水くんをハブった罰だねえ。諏訪さんは、言うところ出水くんを生贄にした罰？』

『うっせえ！』

そんなやりとりをしながら、米屋が「緑川じゃなくて、弾バカにしときゃ良かった」と呟くと、実況席の前に座していた緑川がジト目で米屋を見つめ、出水は舌を出していた。

『さて、そろそろ時間ですので、始めてきましょ。解説のお二人さん、この試合、どう思います？』

『まあ、まず、樹神先輩が中位の部隊に参加して、相手が上位勢ってところが注目だよなあ。生駒隊と王子隊って、今何位でしたっけ？』

『生駒隊は暫定三位、王子隊は暫定六位だねえ。ちなみに、那須隊は暫定十一位だよ』

『パワーバランス、結構ちようどいいんじゃないか？ 樹神のアレも既に割れてやがるし、危険度もダントツだ。動き方次第じゃ簡単に袋にされるぞ』

『王子隊は言わずもがなだけど、生駒隊も流石に無視は出来なさそうだねえ。樹神隊員は影浦隊員や村上隊員にも完全に勝ち越してるし、生駒さんもそこは意識してるじゃないかな？』

どこか柔らかい口調で進められるやり取りだが、ほとんどの者が彼らの言葉に同意する。

元からあった近接の攻撃力に加え、第1戦目で目にした樹神の高トリオン能力による中距離の攻撃力。

先程誘導弾と炸裂弾しか使っていないが、彼のトリオンキューブは二宮よりも大きい。威力が最も高い通常弾を使えば、シールドを張ろうとも削り落とされるのは容易に想像できる。

たった一人の存在とはいえ、無視するには脅威が大きすぎるのだ。

「まあ、通常弾は使えないみたいなんだけどな」

ほかの面々が考えてそうなことをまとめた荒船は、ふと内心でそう呟く。

加えて、訓練生らは二宮の脅威と比べて戦慄しているが、そもそも二宮の攻撃力は彼のトリオン能力の高さによるものではなく、彼自身の戦術と経験から来るものだ。単純な射手としては樹神は二宮にまったく及ばない。

だが、それらも樹神の高機動による攻撃力や一閃といった技能と組み合わせれば一流へ昇華する。

これにどう対処するか、それが重要とも言える。

「王子の奴、どうするんだらうな」

「さあ？　まあ、なにかしら対策はしてるだろうから、そのお手並み拝見だな」

先程よりも後ろに位置する席で並んで座る荒船と村上。

その二人のやり取りに、ようやく隊室の掃除が終わり、先程合流して二人の前の席に座る来馬隊の別役が言った。

「存外、生駒さんの旋空でポックリ落ちちゃうんじゃないですか？」

両隣にいるはずの来馬と今が飲み物を買って行って不在のためか、行儀悪く身体の向きを反転させ、席に両膝を乗つけて後ろを向く別役。

その姿に苦笑いを浮かべながら荒船が答えた。

「ん、まあ、あり得ない話じゃない。あの人の旋空は、警戒してて完全に防げるモンじゃないからなあ。けど、近づけば一葉に軍配が上がるんじゃないかな？」

影浦と村上との戦闘を見て、樹神の近接戦闘能力の高さを知る荒船はそう結論付ける。

たしかに、生駒は現在攻撃手五位であるため、現ランクでいえば影

浦や村上よりも上だが、元々影浦は攻撃手四位であった上に、生駒に對しての村上の勝率も、最近は高い。

それらを踏まえれば、生駒は攻撃手としては影浦や村上よりも下であると考えられる。

そう思つての結論だったが、その言葉に小さく「いや」と否定の声を上げたのは村上だった。

「生駒さんの厄介さは旋空だけじゃない。多分、一葉も苦勞するんじゃないか？」

『さあ、そうこうしているうちに始まりました三チーム對抗戦第二戦目。那須隊の選択マップは市街地A。各隊員の配置は……え？』

『は？』

『ん？』

『ひっでえ』

実況、解説の面々が言葉を無くし、出水が苦笑いを浮かべて小さく呟く。

彼の見つめる先、第二戦目のマップで各隊員の位置情報を写したモニターには、真ん中に那須隊を置いて、綺麗に王子隊と生駒隊が分かれているのを写していた。

「ラッキーだね」

『ああ。おかげで合流しやすい』

そう言つて即座に動き始める王子と蔵内。

マップを見てみると、左端に王子隊が集まっている状態で、横長に各隊員が展開している。

今一番王子隊の中で敵に近いのは、櫛尾だ。

「カシオ、一番近いのは誰か、分かるかい？」

そう聞かれた櫛尾のスタート地点はマンションの上であつたため、

直ぐにバックワームを起動して下を見渡す。

すると、次いで櫛尾の息をのむ声が通信で聞こえた。

『樹神先輩です！』

『なんやラッキーやな』

『そつすね』

王子隊と同じようなやり取りを行う生駒と水上。

一番右端に転送された生駒は急いで中心に向かって疾走しており、水上は屋根伝いに最も真ん中寄りに転送された南沢へ向かいながら、マップを見ていた。

「海、お前がいつちゃん敵に近い。誰か分からんから少し待て」

『りよ〜かいっす』

いつもなら突撃をかます南沢だが、樹神だったときのことを考えて大人しくバックワームを起動して屋内に待機する。

水上はその返事に満足して、再度マップに視線を落とす。

現在は生駒隊全員がバックワームを起動して中心へ向かっており、左端に転送された向かい側の面々も同じのように動いている。

次いで、戦闘が勃発してそうな真ん中の面々の動きを見ると、水上は気づいた。

「隠岐、海にいつちゃん近い奴、誰か分かるか？」

『え〜つと、ちよい待ってくださいね』

水上の言葉を聞いて、グラスホッパーを使って高層建築物へ登る隠岐。

その流れのまま狙撃位置についてスコープを覗くと、数秒して発見した。

『くまちゃんつすね』

「うし、海、詰めえ。俺らもすぐに着く。隠岐は狙撃はせんでええ。一応ほかの奴らの索敵を頼むで。マリオ、タグ付けと隠岐、海の支援頼む」

『は〜よ』



『隠岐、了解』

『え、いいんすか?』

生駒隊オペレーターの真織と隠岐の了解の声に対し、南沢は素直に疑問を口にした。

すると、水上は頭を掻きながら告げた。

「なんや挟み撃ちになつてゐるっばいわ。んで、真ん中の敵さんは那須隊。樹神クンを落とすんなら他を早よ落とした方がええ」

『おけつす!』

『海、那須隊の援軍来る前に落としてまえ!』

『んじゃ、一応敵さん来ないか見ときますね』

そう言つて、生駒隊各個動き始めた。

『なーなー、隊長の生駒さんには何かないん?』

「特にないっす。はよ来て下さい」

不味い、と。

マップのド真ん中に転送された那須は思った。

自分に最も近いのは、自身の転送位置より左に位置する日浦茜。その奥に樹神。そして、右の離れた場所に熊谷。

味方の四人が真ん中にある程度固まっているのはいいが、右側に四人、左側に三人に挟まれるようにして展開していた。

那須は右側と左側でどのような組み合わせが考えられるか、即座に頭の中でシミュレートする。

リーダーを確認すると、自身の味方以外の反応は四つ。つまりはバックワームを起動しているのが三人いるということだ。

そのうち、生駒隊の狙撃手である隠岐であることはほぼ確定。

では、他は誰なのか。バックワームで反応が消えていない最初のリーダー情報を見るに、消えているのは樹神側の一人と熊谷側で一人であると分かる。

では、何故バックワームを起動したのか。

転送直後に反応が消えたのは、恐らく隠岐。では、それ以外の消えた反応の共通点は何かと言われると、敵である私たちに近かったという点であった。

「(多分、一人でいる状態で樹神先輩から狙われないためのバックワーム。じゃあ、それ以外は……)」

今レーダー上に見える、他の敵の動きを観察する。

左端では真ん中に向かいつつ、二つの反応が合流したことから、恐らく同チーム。足の速さから王子隊。

右では少し動きがバラついてはいたが、今となつては各々が真つ直ぐ目的地に向かっている。左端に王子隊二人が集まっていることから、消去法的に生駒隊がまとまっているのだろう。

どちらの隊も、動きに全く迷いがなさそうに見える。

そう、まるでバックワームを起動した隊員を歯牙にもかけないように。

「っー」

ここで、那須は完全に自身の隊がキツチリ王子隊と生駒隊に挟撃される寸前であることを理解した。

「くまちゃん、急いで北西に向かつて！ 絶対に捕まっちゃダメ！」

今から援護に回ろうと、那須が到着したと同時に敵の面々も合流してしまう。

それだと私たちに勝ち目はない。

そう考えた那須は、どうにか北に逃げて、三角形のような三つ巴にするためにそう指示したが。

『ごめん、玲。見つかったみたい』

熊谷が僅かに焦りの声色を含んで言葉を返す。

次いで、耳元で先ほどまで別室に引きこもっていた那須隊のオペレーターである志岐小夜子が、熊谷が戦闘状態に入ったことを報告してきた。

「駄目、このままじゃ」

移動してはいたものの、考える時間が長すぎた。

そのせいで指示が遅れ、完全挟撃という最悪の展開の手前に足を踏

み入れてしまっている。

耳元から入ってくる情報を聞くに、熊谷と戦闘しているのは生駒隊の南沢。合流を阻むように位置取りされながらの戦闘とのことだ。

これでは合流は出来ない。

モタモタしていると、生駒隊が熊谷の元に揃うことはおろか、王子隊丸々が樹神とぶつかってしまう。

一度指示が遅れ、後手に回ってしまったこと。そして、樹神という憧れの存在が自身の隊にいることの緊張から、那須はいつもより頭が回らなくなってしまうた。

その時だ。

『俺が熊谷のフォローに行こうか？』

ふと、樹神からの通信が入った。

那須は一瞬反応に遅れたが、すぐに口を開いた。

「で、でも、樹神先輩の方には……」

『王子隊三人が揃ってるんだろ？ さっきマンションの屋上に反応の消えた黒色の隊服の奴を見た』

言葉を先回りして答える樹神に、那須は口を閉じる。

これで熊谷の方に生駒隊が集結してるのは確定。絶望的な状況へ王手がかかる。

ここから先は、対応が遅れば詰む。

『幸い、王子隊が中心から一番遠い。俺が最速で熊谷のところまで生駒隊を引き受けるから、那須たちは後ろに引きながら、王子隊を少しでも足止めしてほしい。そっちが俺らのとこに来た時には、最低二人は落とすとく』

「それなら、樹神先輩が王子隊を相手取るのは無理ですか？」

『いや、それがもう既に補足されてるようで、合流を優先してるみたいだ。部隊全員で満を辞して待ち受けられれば、俺も落とされない自信はない。それに』

樹神は一呼吸挟んで、続けた。

『生駒隊も王子隊も、俺の最高速を知らない。熊谷の近くが俺じゃないと知れば、生駒隊も踏み切ってくるはずだ。そこを突いた方が、

俺としては落としやすい』

そう締めくくる樹神は、そのまま那須の返答を待つ。

那須は、一度熊谷の方に向いていた足を止めて樹神の方を見る。

この通信は那須と樹神だけの通信。元々全員で共通にしたかったが、自身の隊のオペレーターが男性恐怖症なのもあって、樹神とのパスは那須のみしか持ち得ていない。

故に、今の決定権を持っているのは那須のみ。

時間がないと分かっているとはいえ、少しだけ考えてしまおうが、那須はついに決心した。

「……分かりました。お願いします」

『了解した。おそらく生駒隊の狙撃手が他を警戒しているはずだから、那須はなるべく上空を迂回しながら王子隊の方に変化弾を打ち込んでくれ。それで俺が近くにいないと知れるはずだ。あと、一分耐えてくれと、熊谷に伝えてくれ。直ぐに向かう』

それを最後に、通信が切れる

これが最適解かは分からない。

だが、元々チームの自力では王子隊や生駒隊の方が上なのだ。那須たちがどれほど集まっても、そのままぶつかれば不利なのは那須隊。ここでのジョーカーは樹神なのだ。それをどう動かし、ぶつけて活かすのかが、この戦いの鍵。

那須は三度ほど小さく呼吸を挟むと、右手を上に掲げた。

「変化弾っ！」

「誘導弾」

メイントリガーの方で誘導弾を発動させながら、炸裂弾メテオラに変わり、新しくサブトリガーの方に入れてもらったバツクワームを起動する。慎重にトリオンキューブを分割した後、マンシヨンのほうへ放つ。すると、広く撃つたはずのトリオン弾はマンシヨンのある階に向かうように収束していく。

「(やっぱり見ていたか)」

誘導弾ハウンドの誘導方法には二つある。

まずは使用者の視線の先へ向かう視線誘導。そして、トリオンを感じて自動的に追尾していくトリオン感知誘導。

今回は当然後者と、いうより俺が使う誘導方法は主にこれだ。

これにより、先ほどの黒服の隊員の位置が粗方割れる。

と、なれば相手はどうするかというところと全力逃走だろう。

それは一人では俺に勝てない、と思ってる故の行動だ。俺を見てすぐにバツグワームを起動したことからこれはほぼ確定だろう。

加えて、初めてバツクワームを起動する俺の存在もあり、一度逃走のため俺の捕捉を切ってしまった向こうは俺の存在に気になって慎重にならざるを得ない。

「(これで少しは足を止めてくれればいいんだけどな)」

俺はそう思いつつ、家屋の屋根から道路に降りると、道路スレスレのところまでグラスホッパーを起動し、加速を開始した。

『すみません！ 樹神先輩を見失いました！』

「いや、それは仕方ないね」

樹神とは真反対の面でマンションから降下する櫛尾を遠目に捉えながら、王子は櫛尾をフォローする。

王子は、地面へ落ちていく櫛尾に一つ質問を飛ばした。

「コダマルクが来る様子はないかい？」

『え、あ、はい。今んとこ追っついてきてないようです』

その言葉を聞いた王子は、次いでレーダーに視線を落とした。

樹神の反応が消えているのにすぐさま気付いた王子は、走りながら数秒すると、結論を口にした。

「うん、コダマルクはイコさん達の方に向かったみたいだ」

『え？ それは、何故？』

「わざわざおよその位置が分かったコダマルクがカシオを追わない理由はそれくらいしかないよ。僕たちがカシオの元にまだ着かないのはレーダーを見ても明らか。その気なら僕たちが着く前にカシオを

落とせただよ

檜尾が飛び降りたマンションがトリオン弾によってガラガラと一部崩壊しているのを見ながら王子がそう言うと、蔵内が不意に口を開いた。

「なるほど。だからか」

「？ 何がだい？」

「王子がバックワームを起動しないようにした理由だ。樹神の動きを浮き彫りにするため、わざと起動しなかったんだな」

王子と並走している蔵内の指摘に、王子は得意げに「まあね」と呟いた。

王子は檜尾の元に急ぎながら、続ける。

「おそらく、那須達ナースはイコさんらの方をメインに、引き気味にこつちを足止めだと思う。今生駒隊と戦闘してるのは、二人の距離感的に熊谷ベアトリスだね。本気でこと構えてくることはないと思うけど、中距離ナースの那須と遠距離ヒューラーの日浦には注意していこう」

「了解」

『了解です』

「(……………二、十秒ッ!)」

心の中でそう唱えつつ、熊谷は自らに振り下ろされた刃を受け止める。

上段からの振り下ろしを防がれた目の前の少年、南沢は笑みを浮かべながら直ぐにヘソの位置に両手を下ろすと、柄で熊谷を押すようにして体当たり。

「うっ！」

熊谷は後ろに軽く飛ばされながら態勢を崩す。

それを見た南沢は舌を出して――

「旋ッ空、孤月ッ！」

見え見えに横へ一閃。

軌道が分かったことが助けに、熊谷は孤月を自身の身体に固定して斜めに受けた。

あまりの威力に弾かれかけるが、なんとか耐える。

那須の言葉を受けてからは、受けに回って時間を稼いでいる熊谷だが、段々と押され気味になってきていた。

熊谷は典型的なカウンター型の攻撃手だ。

相手の攻撃に合わせて己の一撃を乗せる、もしくは返すのを得意としており、それには相手の動きをある程度知る必要がある。

そんな彼女の相手をしている南沢は、正直言つて熊谷との相性が悪い。

彼の剣筋や身体の運びは通常のそれとは異なり、自由なものが多い。先程から受けて南沢の動きを観察するが、数瞬前の彼の動きは未  
来の彼の動きの参考にならない。

『熊谷先輩っ！ あと十数秒で生駒隊の援軍が到着してしまいます！』

あえて受けに回つてようやく凌いでいた状況に、志岐の報告で暗雲が立ち込める。

それが一体誰なのか。生駒、水上のどちらにせよ、彼女にとって最悪であることに変わりない。

「(あと、三十秒。もしくはもつと)」

そう内心で呟きながら再度構え直して、南沢を見つめる熊谷。

正直、樹神が来るまで持ちそうにない、と思っっている。

先ほど樹神がいた場所からここまでおよそ2キロはある。

それをたつた一分で走破できるとは到底思えなかった。

そして、それは熊谷だけではない。

『樹神先輩、レーダーから消えていますね。一応警戒しときます』

『いや、流石に間に合わんやろ。海、いけそうか？』

『もうちよいつすね。やっぱ熊ちゃん先輩固いつすわ』

『柔らかそくな見た目しとんのにな』

『やかましいわ』

隠岐の報告を聞いた生駒隊も、熊谷と同じ結論に至っていた。

水上は向かってきているか不明だが、樹神が来る前に熊谷を落とすべく動き出す。

「ぐうっ！」

約束の一分まで残り二十秒ほどで、再び体当たりで体を浮かされる熊谷。

すでに四肢には軽い斬傷がいくつもあり、彼女自身も既に限界に近い。

そして。

「アゝステ……」

不意に左の家屋の屋根から新たな声が聞こえた。

そこに視線を向けると、水上がトリオンキューブを投げるべく構えてる姿が写った。

加えて、視界の端でギリギリ捉えれた南沢の後ろおよそ三十メートル先。

そこには、すでに上段の構えで旋空を放とうとする生駒の姿。

「(残り、十秒……もう無理)」

流石に避けきれないと判断した熊谷は、悔しさに表情を歪めつつ、せめてと水上の方はシールドを展開し、防がないと知りつつ生駒の旋空のおよその太刀筋に孤月を添える。

「(ごめん、玲)」

そう、心のうちで謝罪を浮かべ、瞳を閉じようとした時。

急に水上が爆発した。

「な!？」

「水上先輩?!？」

『警戒ッ!』

南沢と生駒の耳元に、細井の鋭い声が抜ける。

すると、生駒の元には上空から曲線を描いてトリオン弾が襲来。南沢の元には、横から凄まじい速度で一人の人物が突っ込んできた。



樹神だ。

「っ！」

南沢は彼の姿を確認すると、すぐさま孤月を振り抜いた。

今、生駒にトリオン弾が襲いかかってきているため樹神の対処は難しいと考えた末、自分が止めなくてはならないと判断したが故である。

だが、彼に樹神を止める力はなかった。

「うえっ!？」

そんな情けない声を上げながら、南沢は一瞬で両腕を切断されてしまった。

次の瞬間、両腕をなくして無防備になった南沢の胸ぐらを掴むと自身に引き寄せる。

その行動の意図を読めず混乱する南沢は腹に何か当たる感触がしたと思うと、凄まじい速度で後ろへ射出された。

「……グラスホッパー」

樹神の後ろで見ていた熊谷は、彼が一体何をしたのか理解する。

だが、何をされたか分からない南沢は勢いを殺すことができず一直線に生駒の元へ吹き飛ばされる。

狙われた生駒は上空からのトリオン弾をギリギリまで引きつけ、前に飛び出すことでなんとか回避したところであり、目の前に飛んできた南沢に驚きつつ、キャッチしようと思構えた。

『イコさんっ！』

「!？」

不意に耳元から隠岐の声が聞こえた。

生駒はそれに反射的に伏せると、南沢の身体を何かが貫通し、生駒の髪の毛を掠めた。

『トリオン 配給機関破損。緊急脱出』

ベイルアウト

聞き慣れた機械音が響いたと思うと、南沢の身体は淡い光に包まれ上空へ登っていった。

何をされたのか、生駒は理解する。

視線の奥の樹神の姿から一閃を放ったのだ。

「隠岐」

『……すみません、声を発する間もなかったツス』

「ちやうちやう。ナイスや、助かった」

生駒の呼びかけに、報告が遅れたことを咎めるのかと勘違いした隠岐は謝罪を口にし、生駒はそれを訂正して感謝を述べる。

実際、隠岐は肉眼で、彼らのオペレーターである細井真織も直前に樹神がバックワームを外したことでレーダー上で樹神の反応を確認できた。

それを告げるよりも、樹神が速かっただけの話だ。

「……流石に、全員とはいかないか」

視線の先に生駒を捉えながら、小さく呟く。

それを聞いた熊谷は思わず苦笑いを浮かべてしまった。

聞いてたより、十秒も早い到着だ。

樹神はチラリと熊谷を見ると、安心したように微笑を浮かべて、短く息を吐いて言った。

「まあ、とりあえず、間に合って良かった」

## 第十四話 チーム戦④

『……なんか一瞬で二人落ちちゃったね』

『おいこら実況』

五秒にも満たない一瞬の間に起きた攻防にランク戦観戦室全体が言葉をなくしている中、実況席に座っている国近がポツリと呟き、それを諏訪が突っ込む。

しかし、実際全てを認識するには第三者視点では難しく、現に樹神が何をしたのか分かってるものは少なかった。

故に、一人一人が認識できた範囲内で擦り合わせることになる。

『最初の誘導弾は、バックワームを解除したと同時に発動したモンだよな?』

『そうですね。樹神隊員は生駒隊までおよそ百メートルの時点でバックワームを解除、誘導弾に切り替えて上に撃ち出した所は確認できました。そこからは……うん』

そう言つて諦めたように目を閉じて笑う国近に、たまらず諏訪は苦笑いを浮かべる。

すると、両手で頬杖をついていた米屋が口を開いた。

『水上先輩は自爆ツスね』

『おつ? 米屋隊員、分かったの?』

期待の瞳を米屋に向けながらそう尋ねる国近。

すると、米屋は目を細めて続けた。

『樹神先輩が炸裂弾を外してバックワームにしてるのはさっきので確認してるから、水上先輩が放とうとしたのは多分炸裂弾。その爆発に巻き込まれたんじゃないかな?』と』

『待て待て。炸裂弾で自爆つーのは分かったけどよ、なんで水上が放った瞬間に爆発したんだ? 東さんみたいに、発動と同時に狙撃で射抜いたって訳じゃねえだろ?』

そう詰めた諏訪に思い出されるのは二週間前のB級ランク戦。生駒の援護を行おうとした水上が炸裂弾を発現させたと思うと、それをライトニングで狙撃、爆破したという出来事だ。

二宮や出水といった高トリオン能力を持つ者であればキューブ自体が巨大であるため狙撃出来そうであるが、それと比べれば水上のそれは小さい。

加えて、五百メートルほど離れた位置から撃ち抜くなんていう神業は他では見れない。

本当に変態だなこの人、と。

諏訪が東に対してそう感じたのは久しくない。

そう思つて米屋に詰め寄つた諏訪だが、米屋は簡潔に述べた。

『シールドツスね。水上先輩が撃ち出す手前にシールドを張つたみたいツス』

『あゝゝ、なるほどゝゝ』

『なるほどゝ、じゃねえだろ!?! あの瞬間であんなピンポイントにシールド貼れるかつつの!?!』

米屋の言い分に納得の声を上げる国近と、乱暴に声を荒げる諏訪。実際、シールドを扱つたことがある面々は高速で動いてのピンポイントシールドの技量の高さに驚いており、心情的には諏訪派だ。

だが、荒船ら樹神を知る面々に関しては納得していた。

「元々、グラスホッパーでも似たようなことしてたし、一葉ならこんぐらいは出来るだろ」

「あそこまでピンポイントなのは予想外だけだな」

荒船が帽子のつばを触りながら吐き出した台詞に、村上が苦笑いとともにそう添える。

別役ら初見勢は、未だに目を白黒してる。

そして、それによつて落ちた生駒隊はというと。

「うっそやん。そんなんありか」

「しゃーないしゃーない。切り替ええや」

緊急脱出後に転送されるベットから起き上がつて細井の隣に移動してきた水上は心底嫌そうに述べ、細井は支援端末を操作しながらフオローする。

水上は小さくため息をついて、自身のモサモサした頭に右手をやつ

て軽く搔きながら言葉を溢す。

「東さんにやられた時とおんなじや。何されたんか訳分からんかったわ」

「あんな一瞬じゃあどうしようもあらへんやろ」

『せやで水上。次は氣い付けえ』

「どうしようもないことをどう気をつけろと?」

我らが隊長の言葉にそう突っ込む水上。

しかし、次いで大きいため息をつくとき切り替えて口を開いた。

「んで、どうします?」

『せやなあ……とりあえず、やれるだけやってみるわ。とりあえず、水上。隠岐の狙撃のタイミング、お前に任せたで』

「了解。隠岐」

『分かってます。あれはズルいつすわ。下手に撃てません』

先ほどのグラスホッパーの速度を肉眼にて捉えていた隠岐は、冷や汗を滲ませながらそう呟く。

もし下手な一発で樹神に位置バレし、こちらに標的を変えられでもしたら此方もグラスホッパーを使えど簡単に追いつかれ、やられる。

加えて、今スコープ越しに見える樹神は生駒を捉えつつ、周囲からの攻撃、つまりは狙撃を警戒してるのが見て取れた。このまま撃つてもただ居場所を晒すだけだ。

だからこそ。

『俺が撃つのは、イコさんに注意がいった時ツスね』

「せや。タイミングはこつちで見極める。いつでも撃てるよう、準備しとき。確実に、削れ」

『……了解』

そう言うと、隠岐は手に持ったイーグレットを高速度狙撃銃であるライトニングへ切り替える。

威力や射程を捨てて弾速を重視した理由は二つ。グラスホッパーによる樹神の速度の緩急が激しいため、通常の狙撃では外してしまう可能性があるため。

そしてもう一つは、なんて事ない。

威力など捨てていい。結局のところ、シールドを展開させなければ  
良いのだ。

『イコさん、頼んます』  
『おう』

隠岐のそんな一言に、生駒は短く答える。  
戦闘が始まった。

◆? ◆? ◆?

日浦は隠れていた。

自身の得意狙撃銃であるライトニングを体に抱きしめながら、バツ  
クワームを纏い、とある一軒家の一室に身を潜めていた。

狙撃手が隠れる理由というのは、至極単純だ。

狙撃手というのは、一度撃てば位置が割れてしまう。遠距離攻撃と  
いう絶対的なアドバンテージを持つ狙撃手だが、その分寄せられれば脆  
い。

このデメリットはどの狙撃手でも共通であり、あの始まりの狙撃手  
である東でもそれは変わらない。もちろん、例外はある。玉狛に所属  
する木崎レイジは完璧パーフェクト万能手オールラウンダーというボーダー内で唯一の防衛員。  
彼に限って言えば、寄せられれば近距離中距離の戦闘にシフトするのみ  
で、その腕前も非常に高い。だが、それ以外の狙撃手はそうではない。  
だからこそ、狙撃手は一度撃てば逃げる、もしくは隠れるということが  
常だ。

では、日浦もそういった理由で隠れているのか、といえはそれは違  
う。

現在彼女が隠れているのは、近くに狙撃にはうってつけの高層マン  
ションがあり、その上、もう少しで近くを王子隊が通り過ぎる場所に  
隠れている。

何故わざわざそんなところで隠れているのか。

たしかに、敵が近くを通るところに隠れるというのは危険極まりな  
い。だが、それを加味しても王子たちが通り過ぎた後、直ぐに那須と

挟撃できるというメリットが上回った。

近くのマンションを狙撃位置にしようとは思っている。だが、そこが絶好の狙撃位置というのは王子も分かっている。

だからこそ、そこで隠れてしまうのは危ない。

だからこそ、狙撃の射線がほぼ通らず、それでいて本来なら隠れるはずもない一軒家に隠れる。

もちろん、万全を期すならば王子たちが通らない、よりマンションから遠い位置に隠れるべきではある。

だが、日浦自身、足の速さというのは言うほど突出してはいない。下手に狙撃位置から遠ざかれば挟撃が遅れてしまう可能性もある。

そして、これが決まり手。

わざわざ王子たちが通るのであろう位置に隠れるというセオリーから外れた方法。それであれば、あの聡明な王子を上回れる気がしたのだ。

那須やオペレーターである志岐にも、この試みは伝達済みだ。二人からも了承は得られている。

あとは、王子たちが変化弾バイパーを繰り出しながら後退する那須をそのまま追っていつてくれれば良い。

大丈夫、と。

抱えたライトニングを一際強く抱きしめながら、その時を待つ。

。。

荒々しい破壊音と屋根を踏破していく音が遠ざかっていった。

日浦は小さく息を吐くと、次いで立ち上がり、外に出るべく玄関へと向かい始めた。

急げ急げ、と内心自分に言い聞かせながら駆ける。

今は追ってくる三人を後退しながら変化弾バイパーで進みを邪魔する事で何とか那須一人で抑えられているが、それでも少しずつ詰められている。

早いうちに挟撃できるならそれに越したことはない。

そう思って玄関の扉を開けて外に出た時だ。  
ドシン、と黒い壁にぶつかった。

その壁に顔から突っ込んだ日浦は、思わず尻餅をつく。  
無意識に涙目になりつつ自身の鼻は右手をやりながら、ぶつかった  
黒い壁を見上げる日浦。

結果的に言うところ、ぶつかったのは黒い壁ではなかった。

「日浦、見つけ」

優しい笑みを浮かべながら、日浦を見下ろす王子。

そんな彼に対して日浦は――

「は、はひい」

そう呟く事しかできなかった。

『ここで王子隊員に見つかってしまった日浦隊員が緊急脱出<sup>ベイルアウト</sup>。惜しかったねえ』

『隠れ方は悪くなかったんだけどなあ。王子の奴が一つ上をいったな』

『あの発見のされ方、怖っ』

『ナイスだ、王子』

『ナイスよ、王子くん』

『ナイスです！』

「ありがとう」

内部通信でそう言葉をかけてくれる二人に感謝を述べながら、王子は先行くチームメンバーに追いつくべく走る。

樫尾や蔵内、オペレーターである橘高は、王子が相手の戦略を読み取った上での一点と知っているが、王子自身、確信を持って動いていたわけではない。

王子にとって、日浦の発見はラッキーぐらいのものだった。

現状、王子隊にとっての最優先事項は生駒が落ちる前に、その戦いに参入する事。生駒や隠岐が落とされれば、数の優位性が一気に失われる。



故に、今王子たちが最もされたくないのは、時間を稼がれる事であつた。

那須を追うこの時間は、王子の中では必要経費として織り込んでいるが、日浦が背後から挟撃してくることは勘定に入れていない。

前と後ろの方向を同時に意識することなど出来ない。

一度挟撃の形が出来てしまえば、日浦を取るために大きく時間を取られる上、数が一つ減ってしまう。

それを危惧した王子は日浦が居ないことを想定に入れながら、すぐに挟撃へ移行できそうな場所を優先して搜索した。それによつて時間が取られようとも、挟撃されるよりはマシであると。

もし、日浦のいる位置が北か南で、前後に挟まれていなかったとしても、王子の優先は変わらない。

前後にさえ挟まれなければ、樹神の元へ参入するまでは日浦は無視するつもりであつた。

「まあ、落とせたのは僥倖。あとは那須ナースと熊谷ベアトリスだね」

そう考えているうちに、蔵内たちに追いついた王子。

相変わらず、那須は三人が用いりそうな道筋を予測し、変化弾バイパーを飛ばしていく。

三等分にされた攻撃などシールドで簡単に防げるのだが、小賢しいことにたまに全員狙いと見せかけた一人打ちをしてくるので、あまり油断はしてられない。

加えて、そろそろと熊谷が那須に合流してくるはずだ。

王子はそこまで考えて、笑みを深めた。

そろそろだ、と。

「みんな、少し勝負しようか」

時をほんの少しだけ遡ること、生駒と樹神。

熊谷をすぐに那須の方へ逃がした樹神は、視線の先三十メートルほど先で居合の型を保つ生駒と睨み合っていた。

荒船や村上、そして那須隊室に行つてから重ね重ね聞いた、攻撃手の中で最大間合いと威力を誇る生駒旋空。

簡単な話だが、生駒旋空は間合いが遠ければ遠いほど威力が増す。『旋空』というオプショントリガーが孤月の切っ先に近い方が威力があるという、そんな理由ではない。

単純な理屈だ。

本来の二倍以上の間合いを誇る生駒旋空が四十メートルという距離で振られれば、例え通常十五メートルほどの旋空が目で追える速度であっても、生駒のそれは目で追えない。

得物が長ければ長いほど、それが振られた時の切っ先の速度はより速くなる。

そして、速ければ速いほど、威力は上がる。

そも、何故彼が生駒旋空という神業に等しい一撃を持つのか。

それは生駒自身が居合の達人ということが挙げられる。

関西からのスカウト組である生駒は、元々祖父により剣術を教わっていた。剣道ではなく剣術。居合が特筆されているが、純粋な剣の腕も高い。

それが、現攻撃手五位生駒達人だ。

「(さて、どう出る?)」

視線の先で居合の構えで此方を見つめる生駒を見ながら、俺は出方を探る。

本来ならグラスホッパーで距離を詰める、一閃を打ち込むとするが、生駒の旋空は俺の手札のどれよりも速いらしい。

下手に動いて先を読まれれば一瞬でやられそうだ。

で、あれば、読み逃させるしかない。

「」

グラスホッパーを起動し、俺の一步先に上向きで置く。

俺の右足を前に出し、それを踏もうとすると――

横に鋭い一閃が薙いだ。

ほんの一瞬の拡張でありながら、俺の両脇に建っていた家宅は瞬間的に斬り崩され、音すらも斬り裂いたかのように明瞭に響く。

それは予想よりも速く、グラスホッパーで跳べば腹を横に両断されるような一撃であった。

跳んでいれば、の話だが。

「っ!？」

先ほど右足が踏み出した先。

そこはグラスホッパーではなく、その横の地面であり、その踏み込みのまま態勢を下げた。

ほんの一瞬遅れて俺の毛先を掠めた生駒の旋空。

それを確認できた後、すぐさま新しいグラスホッパーを起動して左足で蹴る。

加速して突撃した先にいる生駒が二の太刀を振る前に一撃を与え、るつもりで攻撃した。

だが、生駒は振り切った孤月を手慣れた様子で手元に引くと、俺の一撃を受け止め、そのまま鏢迫り合いに移行。

一瞬で距離を詰められたことで口元を歪ませる生駒に対し、俺は平静を装いながら内心で安堵のため息を吐いた。

「(死んだかと思った……)」

紙一重に生駒旋空を躲した時、これまでで一番生きた心地がしなかった。

想像以上に、俺が予測した以上に、話に聞いた以上に速い一撃。傍目から見て完全に俺の一閃の上位互換のように感じた。

それでも。

「(距離は潰せた)」

ここからは俺のスコープオンが届く間合い。

村上のように此方へ寄せ付けない盾を持っているわけでもなく、影浦のようにスコープオンの二刀流というわけでもない。

荒船の時と同じだ。

孤月の間合いより近づいてさえいけば、向こうのほうが不利である。

速攻で落とす。

時間がないのだ。

「(流石に鋼より固いことはないだろ!)」

そう結論つけて、俺は猛攻を開始した。

『さあ、生駒旋空を回避して距離を詰めた樹神隊員！　ここは俺の距離だと言いたげにスコープオンを振ります！　生駒隊長も後ろへ引きながら一撃一撃を捌く〜！』

スクリーンにデカデカと表示された生駒と樹神の戦闘を実況する国近。

その攻防のレベルの高さに訓練生どころか、正隊員の面々も思わず息を飲み、実況の国近も無意識ながら実況に力が入る。

米屋は二人の一手一手を読みながら、俺だったらと頭の中でシミュレートを行い、「あ、俺なら死んだ」と何度か呟く。

ちなみに諏訪は何か言おうと口を開いては閉じてを繰り返していた。

そんな実況解説を視界に捉えつつ、最後列の席で樹神と生駒の剣戟を観戦していた荒船と村上は感嘆のため息をついた。

「イコさん、流石だな。樹神の攻撃を真ん前に、初めてで良くいなしてる。俺ですら慣れるのに二十本はかかったつっのに」

「元々孤月の扱いはボーダー随一だったからな。加えて引き気味に戦ってるってのもあるけど、あれは多分経験則だろう」

「？　経験則って何ですか、村上先輩？」

お互い視線をモニターにしたまま、それぞれ自らの感想を告げる二人に、彼らの前の席に座る別役が視線を後ろに向けて、そう尋ねる。すると、村上は笑みを浮かべて口を開いた。

「そのままの意味だよ。俺やカゲみたいな二刀流、荒船のような我流の孤月術と違い、根本としてあるイコさんの剣術。それを軸に、相手の動きや視線で攻撃を予測して動いてるんだ。小さい頃から学んでいたからこそ、反射的に体が動いてるんだろうな」

そんな彼の説明に、別役は姿勢を戻してモニターに戻しつつ、「はへ〜」と感動をこぼす。

その時、ふと別役とともにその説明を聞いていた荒船が小さく呟いた。

「けど、このままじゃ結局ジリ貧だ。一葉の猛攻に、少しずつイコさん

も追いつかなくなってきた」

実際その通りで、当初はうまく捌いていた生駒だったが、小さな斬傷が次々とその身に刻まれていく。

生駒自身も、その状況を良くは思っていないはずだ。

それだというのに、大きく仕掛ける様子もなければ戦法を変える様子もない。

であれば、彼が待っていると考えられるのは外部からの要因だ。

「隠岐の狙撃か？」

ポツリとこぼした荒船の一言に、村上がすぐさま否定した。

「いや、それだけじゃ不十分だ。一葉自身、狙撃手というポジションを警戒してる。攻めてるのが一葉である以上、そこに気を配るのは容易だ。今隠岐が撃つたとしても、それが効果的だとは思えない」

腕を組んでそう淡々と告げた村上。

すると、荒船が横目に村上を見つめ、「お前の考えはどうなんだ」と答えを催促。

その視線に苦笑いを浮かべながら、村上は小さく答えた。

「いや、まあ……多分、イコさんはもっと引きつけたいんだろうな」

一分ほど樹神の攻撃を捌いている生駒は、表情は変わらないが、そのやりにくさに内心「アカーン」と叫ぶ。

孤月の剣戟、剣筋というのは直線を描くのに対し、樹神の剣筋というのはひどく自由でかつ多角的だ。右へ振られた刃が、次には彼の左足から顔を出し、下から襲いかかる。

「っー」

そうしているうちに、生駒は気づく。

僅かに後退しながら刀で受け、晒し、躲していたそれらが加速していくことに。

「ぐっー」

加速する。

「っ！」

加速する。

「——ッ!!」

加速する！

「ぐおっ！」

ついには襲いかかってくる刃に孤月が間に合わず、身を引くことでなんとか軽傷に済ませる。

無理に身を引くのではなく、軸足とは反対の足を後ろに引き、即座に重心を退くことで安定した態勢で回避とする。

回避後の態勢が崩れてしまえば、次に来る刃を防ぐことは叶わず、結局仕留められてしまうことは明白。

それを無意識下に理解していた生駒は、ギリギリで致命傷を回避する一方、態勢を崩すことはなかった。

そんな生駒に、焦るのは樹神だ。

元々早いうちに落とすつもりで望んでいるこの攻防。狙撃手という援護が見込まれてはいるが、それ以外の南沢や水上援護役を早いうちで落とせば、優位性はあつてないようなものである。

攻撃に必要な間合いもスコープピオンの方が孤月より近いだけあつて、こちらの攻撃は容易であるが、孤月は攻撃に必要な動作分の距離がない。

もちろん、無理に距離を取って攻撃に移す手もある。

だが、それが一度防がれれば、次の防御に手が回らなくなってしまうため、生駒が攻撃に移る手はない。

完全に後手へ回っている生駒。

対して先手を取れていることから、樹神が狙撃手を警戒する余裕は十二分にある。

十二分にあるが——

「(殺しきれない……ッ!?)」

目の前で孤月を構える生駒。

影浦のように同じ間合いの二刀流でもなく、村上のようにレイガス

トという大きな盾で身を寄せられないようにしてるわけでもない。  
それでも、殺しきれない。

「くそッ」

そう小さく吐き捨てる樹神は、より鋭く深い一撃を当てるべく大きく前進、生駒の元へ迫っていく。

ほぼ体が密着してしまうほど近づき、手刀の要領で横薙ぎに首を狙う一撃を防がれ、迫ってしまう。

迫ってしまった。

「あ、まずい」

その様子を見ていた村上は思わずそう呟き、

「――」

ゴッグル越しに生駒の鋭い瞳が光った。

剣術の話をしよう。

刀という武器が生まれ、戦争が起こらなくなっていったことで、本来圧倒的な優位性を持つ槍や弓が衰退していった頃、剣に覚えのある各々が自身の生み出した剣の技すべを修めて生まれた剣術。

有名どころでいえば、巖流島の戦いで有名な宮本武蔵の二刀流剣術である『二天一流』、佐々木小次郎の『巖流』、幕末の天才剣士として有名な沖田総司の『天然理心流』などがある。

剣術というのは、流派が違えばほぼ別物だ。

故に、それらと生駒の学ぶ剣術の違いを挙げればキリがない。

だが、それらと生駒の剣術には明確な違いが一点ある。

剣術の中には、『体術』を技として修める流派が少なからず存在する。それはキックやパンチといった直接的なものではなく、どちらかといえば柔術に近い。

足を掛ける、腕を巻くといった技術を持つ流派がある。

しかし、生駒の剣術に柔術が修められているかといえば、そうではない。

では、古来の剣術との違いは何か？

——それは殺し合いではなく、現代のスポーツとして化した剣道にも残る攻撃。

手刀を弾いた生駒は、俺のみぞおちの元に孤月を握った両手を添える。

——それは罅迫り合い、といった膠着状態でも有効な一打。

防御に回していた孤月を樹神と生駒の間に入れたことで、守りがあまくなった側部へ向けて、樹神がスコープオンを突き刺そうと右腕を振りかぶる。

——それは、ボーダー内でも随一の生駒の一踏<sup>いっとう</sup>。

「か……ッ!?!」

——なんてことない、ただの『体当たり』だった。

◆? ◆? ◆?

打撃の一点から弾けるように広がる衝撃。

樹神は自身の一閃と同等か、それ以上に鋭い踏み込みによるものと反射的に判断した。

体を大きく使った踏み込みではなく、限られたスペースで小さく足を前に運び、わずかな重心の前進のみで莫大な踏力と反発力をそのまま相手に打撃として伝える一撃。

ただの体当たりと侮ることなかれ。

スポーツとして広がる剣道においても、有力者による体当たりは相手を数メートルは吹き飛ばす一撃となる。

それが生身より十数倍の身体能力を持つトリオン体と、長年剣を



培ってきた生駒によって成り立った『体当たり』。それは、村上が用いるスラストーによる盾突撃をも上回る威力だ。

それを想定外のタイミングで打ち込まれた樹神が踏ん張りなどしているわけがなく、凄まじい速度で吹き飛ばされた。

「……っ！」

即座に樹神のサイドエフェクトが発動。

突き抜けるような衝撃をその身に受けながら、どうすべきか思考を開始。

スローモーションに動く世界でも、ほんの一瞬で十数メートル以上吹き飛ばされている中、自由に体が動かせるわけもない。

腕を引こうにも、足を畳もうにも、体当たりの衝撃で後ろへ吹き飛ばされたことによる風圧で満足に行えない。

思考の果てに導き出した答えは、グラスホッパーを俺の背後に展開し、無理やり体を起こすこと。

もちろん足で踏まない以上、起こした態勢が安定とは程遠いものになるのは想像つく。

だが、起こせさえすればある程度リカバリーは効く。

起こせさえすれば、だが。

「旋空」

風の暴音でほぼ聴覚が機能していない中、なぜかそれは明瞭に聞こえた。

視線の先で、居合ではなく、上段からやや斜に構えた状態で孤月を振りかぶる生駒の姿。

俺がサイドエフェクト中、手を錯誤している内に手慣れた様子で次なる一撃に繋げるべく構えた彼は、小さくそう告げた。

「――孤月ッ！」

グラスホッパーを起動して、なんとか背後に展開した数瞬後に振り下ろされる孤月。

最初の居合による生駒旋空。

それが走馬灯のように思い返された俺は、理解した。

間に合わない、と。

## 第十五話 チーム戦⑤

初めは順調と思っていた。

自分たちより上位の相手、しかも一部隊全員を引きながらの戦闘とはいえ上手く足止めできている、と。

那須は距離を取りながら着々と迫ってくる王子達を見ながら、そんな風に考えていた。

日浦があえなく落とされた時は表情が軽く歪んだが、それでも時間稼ぎとしては充分。加えてもうそろそろで熊谷も合流する。

この時まで那須一人で足止めできたのは、王子隊の動きによるものがデカイ。

元々射角が広い那須にとって、されて最も嫌なことは三人がバラバラに散って、屋根を伝っている自分から見えないよう住宅を盾に下道を縫ってくることだった。

変化弾ハイパーによる障害物関係なしの複雑弾道も、流石に対象がバラバラに動き、さらにはオペレーターの情報なくては補足出来ない状態では真価を發揮しない。

しかし、当の王子隊は全員下の道路に降りて死角を攻めず、那須が視認しやすいよう三人とも屋根を踏破してまで直線的に那須へ向かっている。

おそらく複雑な下道を抜けて時間をかけるよりも、被弾や姿を補足されるというデメリットを無視してでも、より早く樹神のもとに向かいたいのだろう。

だが、それも今となっては悪手に思える。

時間を優先する王子隊だが、現に那須一人に抑えられて時間も食っている。

そんな現状を、あの王子が良しとするわけがない。それでも策を変えないのは今の状況を打破する手段がないか、それとも――

ここまで考えた那須は、ふと王子の表情に目がいった。

那須が撃ち出す弾をシールドで的確に防ぎつつ、屋根を伝う彼の表情は見慣れた笑みが浮かんでいる。

まるでこれはいつも通りである、と。観察するように細めた視線を向けながら言外から伝えてくるそれに、那須は背筋に冷たいものが駆けた感覚に陥った。

そして、確信する。

「(初めから狙いが——)」

「もう遅いよ」

那須の考えるを読み取ったが如く、王子が小さくそう告げたその瞬間、三つの声が同時に上がった。

「誘導弾」  
ハウンド

今まではシールドで防ぐばかりで攻撃など一切しなかった王子隊の全員が一斉にトリオンキューブを発現。そこから射角・弾速・威力の設定を行う段階、その速さに三人の差異はない。つまり、全員が最速かつ同時に撃ち出してくる。そうなれば三人の位置関係的に多角でより防ぎづらい攻撃を放つことができる。

それを可能としたのは、この攻撃が策として知らされていたわけだからではない。

「(これまでずっとやってきたことだ。言わなくても皆分かってくれてる)」

射手が本職の那須は、その三人の様子からすぐさま同時に誘導弾<sup>ハウンド</sup>を撃ち出してくるであろうことを察知。横並びに、およそ百メートル感覚で離れた三人の位置的に広くシールドを展開しなくては防ぐことができないが、それだとシールドの強度が足りない。

そこまで考えた那須が展開したのはシールドではなく変化弾<sup>バイパー</sup>。相手の攻撃が撃ち出された数瞬後にそれらを撃ち出す。

「やるね」

明らかな攻撃に対して受けに回るのではなく、出来る限り攻勢を取り後手に回らないようにする那須を見て、王子はそう呟く。

ただでさえ人数という点で不利を得ている以上、一度後手に回れば最後まで振り回されることになるのを分かっているのだろう。

曲線を描いて那須へ到来する誘導弾<sup>ハウンド</sup>とは違い、変化弾<sup>バイパー</sup>らしからぬ直線を進んで右の蔵内、真ん中の王子、左の櫛尾へ向かってきた。

王子たちは最低限のシールドを貼って防ごうと試みる。攻撃が来る前に複雑な弾道を設定することは出来ないだろうという読み故の対応だ。

そして当の那須は、正面と左右からやってくる誘導弾ハウンドを後ろに下がりとつぎりぎりまで引きつけると、不意に前へ跳んで正面の誘導弾群ハウンドに突っ込んだ。

左右の誘導弾ハウンドはその誘導半径のため那須を追うことが出来ずに、その大半が住宅の屋根に当たって消えるが、正面の誘導弾ハウンドは別。

しかし、正面のみの弾幕だけではシールドを抜くほどの威力はなく、那須はフルシールドで耐えた。

それら正面を突破した後、那須は王子へ視線を移して相手の所動を確認。続けて蔵内と檜尾へ。

「っ!？」

最後の檜尾に視線をやると、彼が一直線に自分に向かってきているのが見えた。その速度は先程追ってきた時と比べて一段階速く、先の足止め時は手を抜いていたことが分かる。

そこまで考えて、那須は再度変化弾バイパーを発動。

半分は檜尾へ、もう半分は王子達の方へ向かわそうとするが、そこで気付き、足を止めた。

「(王子先輩達がいらない!?)」

さっきまでは屋根を伝っていたはずの王子達の姿が消えていた。おそらく、視線が檜尾に移った瞬間に屋根から下道に進路を変えたのだと判断した那須は、続けて苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

それもそのはず、王子が動き始めてから流れるような動きで連携していく王子隊は、とても一人で相手できるほどのものではなく、最善を尽くしているつもりでも後手へ回されたのが感じ取れてしまう。

少なくとも、相手すべき三人のうち二人を見失った時点で詰みの一歩手前まで来たようなものだ。

「(警戒はしてたのに……ッ!)」

多方向からの敵を相手取る際は、大前提として全ての相手を視認できなくては不味いと知っていた。格上とならば尚更だ。

せめてものの攻勢、檜尾に全ての変化弾バイパーを向けて王子達が自分に到達する前に落とす。いや、むしろこちらから目に見えて近づいてくる檜尾に向かい、一人でも削ろう、と。

そう思い、いつものようにトリオンキューブを檜尾へ撃ち込もうとした瞬間だった。

「足を止めたのは良くなかったね」

そんな言葉が耳に届いた瞬間、那須は反射的に左に跳ぶ。

刹那、鋭い衝撃が走ったと思うと、右腕が切断され、右横腹に浅い斬傷が刻まれた。

声の主は王子。先ほどまで五十メートルは離れていた先にいた人物だ。

那須は左手で横腹に開いた傷を抑えつつ、わずかに目を見開く。

「来るのが早すぎるッ!？」

彼の速さを甘く見ていたわけではない。

彼どころか、王子隊は全員が走れる隊として有名だ。

正直なところ、今まで自分が一人で抑えられたのが不思議なぐらいの速度を有しているのが彼らだ。

だが、それでもこれは速すぎる。

このマップは高いビルなどはない代わりに住宅が密集しており、下道は複雑な構成をしているというのに、まるで何処をどう通れば最短か分かっていたかのような――

『正確なオペレート、ありがとう』

『どういたしまして』

困惑する那須とは対照的に、王子は振り切ったスコープピオンの刃を変形させながら、ここまで最短距離を示してくれた自隊のオペレーターである橘高にお礼を述べる。

今回、王子が仕掛けたタイミング。これは橘高がマップの構成を調べ上げ、最も素早く移動できる下道の進路を正確に示すことができるタイミングであった。

たとえ複雑な行路でも、行先が分かれば迷いはない。

その結果、那須の想像よりも早く彼は近接に臨むことができたわけだ。

「さて、詰みだよ。那須」

そう不敵に笑い、無理な回避で態勢が崩れた那須にとどめを入れようとスコープオンを振りかぶる王子。

だが、その刃が那須に届くことはなかった。

「まだよー」

那須を庇うように横から介入してきたのは那須隊の攻撃手である熊谷だった。

彼女は先に自身の得物を王子と那須の間に入れて攻撃を防いだ後、続けて自らの身体を差し込んで鏑迫り合いへ。

那須を王子から守るように立ち回る熊谷に対し、那須は後退。変化弾を撃ち込むためトリオンキューブを発現しようとして――

「っ!？」

あることに気付いてしまった。

「玲ッ!」

語気を強める熊谷の言葉にハツとした那須が見たのは、王子の背後から迂回するように向かってくる誘導弾の群。

咄嗟にシールドを構えて防ごうとする那須だが、それと同時に別方向から直線的に向かってくるトリオン弾に反応が遅れてしまった。

「クッ……」

誘導弾は完璧に防いでみせたが、もう一つの攻撃はシールドが間に合わず、緊急回避で直撃は免れたものの左足のふとももを撃ち抜かれる結果となった。

さらに漏れ出すトリオン、削られた機動力。

それ以上に那須の反応が遅れたことに疑問が浮かんだ熊谷は思わず眉を八の字に曲げた。

そんな彼女に、王子は先ほどと変わらない笑みで告げる。

「詰み、と。僕は言ったはずだよ」

途端、先ほど後ろから誘導弾を放った檜尾が熊谷に迫り、弧月を振

るう。

流石に王子と同時に相手取ることが出来ないと判断した熊谷はバックステップで那須の元へ退がり、那須は自身のふとももを撃ち抜いた蔵内へ向き直る。

『玲、どうしたの!?!』

『熊ちゃん……』

僅かな睨み合いの間、内部通信で那須の違和感を訪ねる熊谷に、那須は焦燥を滲ませて返した。

『トリオンが……もう……』

『——そんナツ』

あまりにも早いトリオンの減少に、熊谷は思わず言葉を零す。

だが、考えてみれば有り得ない話ではない。

継続的に使用し続けた変化弾バイパー、それは普段よりも明らかに使用頻度は過多であった。

加えて王子と蔵内によるダメージから漏れ出すトリオン。

既に致命的な展開であるが、瞬間熊谷はある可能性を想像してゾツとする。

熊谷のその予感  
は命中だった。

「悪いね。樹神コダマレックとやりあうのに、君たちが居たら困るんだ。ここで脱落してもらおうよ」

那須のトリオン切れによる攻撃不可。そのトリオン切れのタイミングで熊谷による介入を呼び込んだこと。王子らと蔵内で挟まれ、逃げ出すことが出来なくなっていること。

これら全て、王子の策略の内。当初の目的通り、樹神一人孤立させるよう、彼の味方を削る。

ランク戦のような前準備もないこの試合でここまでの策を、読みを通した王子に、二人は背筋に冷たいものが走るのを感じていた。

◆? ◆? ◆?

「よし」



軽快な言葉と共に、生駒隊の狙撃手・隠岐はビルの屋上から飛び出した。

僅かな浮遊感の後、すぐさま重力に捉えられ落下をする隠岐はグラスホッパーを起動して落下から跳躍に移り、高速度で別の狙撃位置へ向かう。

本来、先ほど構えていた狙撃位置から狙撃手が移動する理由は二つ。狙撃を終えたか、ターゲットが現在の位置から狙えなくなったか。

今回は前者だ。

『ナイススナイプやったで。よう当てた』

彼の耳元に既に緊急脱出した水上から称賛の声が上がる。それに対して、隠岐は苦笑いを浮かべて返した。

『んまあ、当てただけツスけど……』

風を切るように次々とグラスホッパーで跳躍を繰り返す彼は、先ほど放った狙撃弾の行く末を思い返す。

そして、一言。

『まさか、あの体勢から死なないとは思わなかったツスわ。怖いツスね、あの人』

『カゲや鋼を常ストレートつねで下す奴やぞ。あそこで死なんでも驚かんわ』

隠岐のおどける台詞に、水上はため息混じりにそう呟く。が、その少し後。

『……嘘。ふつうに驚きやわ』

『どうゆう見栄やねん』

小さな声での訂正に、細井が突っ込みを入れるのだった。

「(なんで生きてるんだ、俺)」

上段で振り下ろされた生駒旋空。

サイドエフェクトによるスローモーションの中で想像した生駒旋空は何とか目で追える速度であった。

当然、本来であれば生駒旋空による剣撃は一瞬であり、常人では捉

えることは出来ない。

しかし、サイドエフェクトによるスローの世界を見てきた彼にとつてはその一瞬を捉えることができる一撃であった。

それを踏まえて、一番最初に見た居合による生駒旋空の剣速。それがそのまま振られていれば、利き腕である右腕を肩の先から切りとばされるに留まらず、縦に二分割されていてもおかしくなかった。

が、それが何故か彼の生駒旋空よりも俺のグラスホッパーによる起き上がりが間に合い、結果右腕を切りとばされるだけに済んだ。

もちろん、起き上がって旋空を避けるのに全力を尽くしたので、生駒隊の狙撃手から放たれた一撃を避ける、防ぐことは出来ず、左足首を撃ち抜かれている。

「だが、生きてるなら上々。まだ何とかなる」

四肢の内、二つを削られたこの現状。俺は左足首から先をスコルピオンで何とか形作り、生駒を見やる。

彼は弧月を構えたまま、低く唸った。

『あれで死なんか嘘やん。誰かフラグ立てたん？』

『フラグって何やねん』

『やったか？ とか、もらった！ とか言うてへん？』

『言うたらん。集中しいや』

『ちよつと海に聞いてや。フラグ立てたかって。海が言ったに一票入れるわ』

『しつこいわ！ はよ集中せえ!!』

まさか五メートルほどの視線の先で、無表情にそんなやり取りを行なわれているとは思わない樹神は、ひとまず左手で右肩の傷口を抑えて生駒の動向を見やる。

旋空を放つにも中途半端な距離故か、弧月を鞘に納めずに抜刀して剣道のような中段の構えを取っている。

ありきたりな型であるが、素人目からして隙がなく、どれほど彼が積んできたのかが窺い知れる。

「南の方角からの狙撃を足に受けたのはキツイな。スコルピオンで足をかたどるのも久しい……。右腕もない今、上手く立ち回れるか

?)」

そんな風に考えている時だ

『ごめんなさい……ッ!』

「っ!」

久しく音沙汰なかった内部通信に、切迫した声色でそう告げる那須。

その数瞬後、俺の後ろでドンツと大きな音を立てて二つの光が空に昇った。

音に釣られて横目に後ろに視線を向ける樹神に対して――

「フッ!」

生駒はそれを隙と捉えて旋空を起動、斜めに斬り下ろす。

もちろん、その初動を目で捉えていた樹神はスコープピオンで作った足で地を蹴り付けて横に跳んで回避。同時にグラスホッパーを起動して回避した後に生駒へ肉迫するが、それを読んでいた生駒は振り下ろした弧月を返し、「それはさつき見た」という言葉を添えて、下段から斬り払いを放つ。

俺は小さく舌を打ちつつ、反射的に集中シールドを太刀筋に置き、俺は勢いのまま左手に枝刃で発現させたスコープピオンで刺突。

集中シールドで弧月を払えなかった生駒は、瞬時に肩幅に広がっていた両足の内、右足を僅かに浮かせて右にスライドさせる。

すると、生駒の身体は右に倒れ、樹神が胸に放った刺突を直撃からギリギリかすめる程度に抑まる。そして、彼の行動はそれだけに留まらず、防がれてしまった弧月を集中シールドから上に抜き、身体の倒れる向きに添えて交差する樹神へ横に払った。

「(判断が的確すぎるだろ)」

一度見たとはいえ、流れるような生駒の対応に内心そう呟く樹神。生駒の放った横振りに合わせてグラスホッパーを左足元に発現し、それに触れることで体を持ち上げて回避する。

左足がギリギリ間に合わなかったが、元々スコープピオンであるそれを碎かれても特に問題はない。

グラスホッパーで跳ねた身を空中で反転させる樹神は、即攻撃する

ために再度グラスホッパーを使って、宙から生駒に向けて全力突撃。弾丸のような速度で降り注いだ攻撃。

だというのに、生駒は自身の弧月でスコープオンを防ぐことに成功していた。

「クソッ！」

先ほど上がった二つの光。

同部隊の那須と熊谷の緊急脱出ベイルアウトによるものだろうと予想している樹神は、当然王子隊の到着までに生駒をどうにか早く仕留めたいと考えている。

だが、正面からの攻撃が思いの外通らない。と、いうより通りづらくなってきた。

しかし、それは考えてみると当然である。

生駒と樹神の戦闘における勝敗。それは単純に各々の得物の扱いや切り札の有無、オプシヨントリガーやサブトリガーの熟練度以外にも、対人戦闘における経験値も影響する。

スコープオン使いがどのように攻撃してきそうか、グラスホッパー持ちはどのように動いてきそうか、そも攻撃手はどこを狙ってきそうか。そういった経験から来る予測が、ある程度樹神の動きが知れてきた生駒に現れ始めている。

これは、長年トリオン兵としか戦ってこなかった樹神にはないものだ。樹神はそれらの予測から来る行動を、己のサイドエフェクトで置換してきたに過ぎない。

影浦や村上、そして生駒といった高ランク攻撃手からしたら、それは顕著に現れる。

もちろん――

『三回死んだ思うたわ』

当の本人が落ち着いてそれらに対応しているとは限らないが。

『言うて数える余裕ありますやん』

『……三回も死にかけたと思う瞬間あった？』

『刺突と、今の突撃と……何やろ？ イコさん、あと一つなんです？』

『ドンッ！つちゆう音。ビククリして心臓止まるかと思たわ』

『緊急脱出音で??』  
ベイルアウト

『いやいやいやいやん。あんだけ慎重な場で突然爆発みたい音してみ？ 心臓耳から飛び出るか思うで。イコさん、さつきから心臓バクバク』

『口からじゃなく?』

『てか、あの緊急脱出、ベイルアウト那須隊の二人ですよ。今王子隊の三人がこっちに来やりますわ』

『まじか。キッツイなく』

『樹神クン、イコさんだけで落とすんムズイようでしたら待った方が良さげツスね。そのどきくさで樹神クンだけじゃなく、隠岐とタイムング合わせて王子隊削るんが良いとちやいます?』

『せやな。そうするわ』

そんな生駒の決定に合わせ、ちょうど二人の鏝迫り合いが終了。樹神が左足の蹴り上げを放つが、生駒は弧月の柄頭で受け止め、それと同時に樹神を押し除ける。

先ほどの体当たりよりも威力は低いものの、人を押し除けるほどの効力があったようで樹神は退がりながらも倒れないようにしつつ、生駒に攻撃されないようマンティスを放った。

マンティスはその能力上、シールドで防ぐより切り払う方が良いことを知っている生駒は手慣れた素振りですげで弧月を払う。

呆気なく割れるマンティス。

しかし、体当たりによる少し崩れた体勢を整えるには十分な時間。

続けて放たれた旋空は難なく回避することが出来た。

「(だいぶ鋭く早い、長距離の生駒旋空よりかは全然避けやすい。あの時はなんで避けれたか分からなかったけど、このぐらいなら……)」

反射による時間拡張、スローモーシヨンの中に行われる思案。

樹神は生駒の旋空について考えを重ねるが、それよりも生駒を落とせる切掛けの方が重要であるため、区切りを付ける。

四肢の内二つを削られたこともあるが、どういうわけか単純な攻撃では落とすにくく、そして先ほどの体当たりを警戒して上手く攻めることが出来なくなっているため、このままだと生駒を倒せる気配がな

い。

頼みの綱として考えた誘導弾ハウンドや一閃は、それを放つための距離や時間を確保しようにも生駒の旋空の方が早いため使用は難しい。

であれば、残る方法は生駒が樹神に全力の体当たりをぶつけるために誘い、釣るといった方法であるが、データとしてこれまでの彼の戦闘を見れた生駒ならばまだしも、今日初対戦である樹神にはどこをどう釣って仕留めるかを考えるのは困難だ。

現状、遠距離なら旋空、近距離なら体当たりと、自分が一閃を放つ、スコープオンを発現するよりも生駒の方が早い。後手で誘うにもそれらをしっかりと予測でもしてないと隙をつくことは出来ない。

生駒がどうしてくるのか、という予測。

万全ならばまだしも、チーム戦でもある現状であればそれが叶わなければ落とすことは難しい。

そういう意味では、彼の間隙、落ち度として捉えられた先ほどの上段による生駒旋空。本来であれば、最初と同じ剣速であれば、間違いなく肩から股にかけて両断されていたはず。

誤認ではないかと思われるだろうが、相手の攻撃といった行動については、このサイドエフェクトと長年付き合ってきたため読み取る精密さ、特にその速度というのはほぼ誤差なく認識できる。

そこに関しては間違いなく、何かしら彼のミスのようなものがあつたはず。

そう考えた樹神は、生駒と打ち合う合間合間に発動するサイドエフェクトの中で考え——

「(……ちよつと試してみるか)」

およその答えを見つけたのだった。

◆? ◆? ◆?

『なんで死なないんだろうね〜』

『いやあ、たしかにイコさんの旋空と隠岐の狙撃を受けても生きてるのもアレっすけど……』

『生駒の奴と、右腕と左足ぶつ飛んだ状態で渡り合える時点でやべえな』

現試合中、ほとんどを解説という体をなしていない状態である実況風景。戦闘員ではない国近はもちろん、諏訪も米屋も詳しく説明するような素振りはなく、好きなことを喋っているようだが、これはこれでA級一位部隊のオペレーターとして目の肥えた国近、高い戦闘能力を持つ米屋、部隊の隊長としてチームの動きを捉えてきた諏訪の各発言はなんやかんやでの的を得ている、もしくは解説が欲しかった部分の答えとして成り立っていた。

そして現在、本来の那須隊が全滅し、王子隊が生駒と樹神の元に向かい、隠岐が狙撃場所を大きく変えるため移動しているという場面。

最終決戦に近づいているというのは明白であった。

『イコさんは旋空が目立ちますけど、当然それだけで攻撃手五位になれるわけじゃない。さっきのぶちかましも含めて、目立たないところで上手いトコが沢山あるんだけど』

『二つ一つ、上手く樹神の野郎がいなくてやがんな。右肩ぶつた斬られた時から、特に慎重さが増しやがった』

そう二人が話す中でも、生駒の細かく上手い所が見える<sup>まみ</sup>。

近づいてきた樹神に自ら当たることで相手の勢いを挫く、強引に鏢迫り合いに持ち込む。そして、相手の前に出た膝より内に自身の膝を入れて、膝の内から外に流すことで相手の態勢を崩す、など。

どれも細かいながらも効果的な挙動ながら、樹神が大きく崩れる様子はない。

その答えは、ズバリ諏訪が申しした通り。

サイドエフェクトで事前に察知して対策する、もしくは素早いリカバリーでゼロに近いマイナスで留めているためだ。

体当たりの一件で警戒が増した樹神は、そうした慎重さが目に見えて現れてきた。

それ故にここまで負担をかかえながらも、生駒という猛者相手に互角までの戦闘を続けられている。

だが、しかし、と。

『でも、もつと攻め気を持たないと厳しいよね』

不意に国近がそう呟いた。

少し驚いた風に諏訪と米屋が国近を見やると、その視線に気付いた彼女がへにやりと笑った。

『いや、太刀川さんならって考えてみたらね。ちよつと思うところがあつて』

「国近の言う通りだな」

実況として拡大音声で聴かれているためか、実況にありまじき先を急いだ発言に国近は少し言い訳混じりに続けるが、それを聞いていた荒船は静かに肯首する。

「一葉の悪い癖だ。アイツはオンオフが激しすぎるせいか、攻め気を失うと引きずりやすい。このままだと王子隊が合流してマズイことになるぞ……」

「樹神くん、まだまともに多人数相手の戦闘をしてないから、正直キツそうかな」

荒船に次いで、今回樹神初見である来馬が追言。それらに関しては村上も同意見のようで、特に言葉を挟む様子はない。

「目に見えて慎重になるな、足を削られると」

「ああ、普通の防衛任務で部位欠損することは少ねえから、戸惑ってるのもあるんだろうな」

そうこう言葉を交わす荒船のだが、解説席の結論も彼らと似たようなものだった。

やはり、チーム戦や対人戦の経験値が浅いというのが、浮き彫りになる。

本来であればオペレーターといったサポートと合わせて、前段階でチームと動きを合わせることが出来たはずではあるのだが。

「志岐さん、男無理ですからね。けど、それでもサポートないの駄目でしょ」

「はいはい」

率直すぎる別役の意見に来馬がもう少し齒に衣着せるよう咎めるが、正直なところ、こういう場面でのオペレーターの存在が大事に



なつてくると考えているため、ほぼ同意見であったりする。

那須の变化弾バイパーの扱いから恐らく那須隊には通常のサポートは行つてはいるだろうが、樹神にはないのだろう。

だからこそ、ここまでくつきり那須隊と樹神で分かれてしまつていると予想される。

『(地力で元から上位と中位で差がある以上、樹神先輩を上手く使わな  
くちやいけないのにな。まあ、志岐ちゃんにそれを言うのは酷か)』

口には出せないため、内心でそう考える米屋だが、チラツと横目に  
確認した諏訪の表情からも同じような雰囲気を感じられた。

『(まあ、転送位置も最悪に近かったから、これでもまだマシな方かな  
? 逆に万全の王子隊相手に時間稼ぎメインでここまで引き下がれ  
た那須隊がナイスなのかね)』

状況整理のため、国近と諏訪が話している中で無言でモニターを見  
る米屋。そんな米屋に解説しろとジト目を向ける出水だが、彼がすぐ  
に気付く様子はなかった。

『さて、そろそろ王子隊が生駒隊員と樹神隊員の元にたどり着きそう  
です』

『隠岐も、狙撃位置を変え終わつたみたいですね。さっきのところと  
は大きく変えてる辺り、樹神先輩対策かな?』

『いや、この状況だと生駒隊は樹神よりも王子隊に目を向けた方がい  
いだらうに……』

『だから、それはアレっすよ。隠岐は樹神先輩、イコさんは王子隊を落  
とすつもりなんじゃないですかね』

『全隊員が集う決戦の場。残り試合時間は二十分ありますが、決着ま  
では十分もないでしょう!』

そう宣言する国近に、反論を挟むものはいない。

A級だろうが、B級の上位者だろうが、誰もがこの混戦が最終決戦  
と考えている。

最初のチーム戦と個人戦ばかりで樹神の無双の姿ばかりを見てき  
た各隊員。

チーム戦二戦目という序盤にして、上位部隊が樹神を崩すことが出

来るのか、皆言葉を忘れて注目する。

王子隊と生駒、樹神。

お互いがお互いを視認した。

生駒と、樹神が大きく動いた。

## 第十六話 チーム戦⑥

「リーダーを見る余裕はない。

見えたとしても、那須たちを撃破した王子隊は全員バックワームを装備してリーダーに映らないため、彼らがいっつも来るか分からない。

だが、タイミングは決めた。

俺の背後、王子隊が来るであろう方向。

王子隊がこちらに参戦するその瞬間。

その時が俺が生駒さんに仕掛けるベストだ。

ほんの少しでも意識を散らさなくては、いくら踏み込んでも決定打に欠ける。

「(一瞬だ。一瞬でも不意をつければ殺せる)」

これまでの攻防でそう確信した俺は、生駒の機微を拾うため少し離れ、スコープオンを長めに伸ばして攻撃を繰り返す。

やはりというか、生駒さんは若干引き気味に、それでいてドツシリと構えて防御を行う。

個人ランク戦はお互い一対一の取り合いなので、自分も相手も攻め気がなくては勝てないが、味方や複数部隊がいるチーム戦となると守ることで状況が好転する場面がある。

まさにこの場面がそうだ。

四肢の半分がやられた俺では、防御に全力を尽くしている生駒さんを取ることは出来ない。

彼が待つてるのが、王子隊なのか、はたまた隠岐の狙撃なのかは分からないが、外部からの新しいアクションがないと状況が変わらないだろう。

だからこそ、俺も待とう。

「(――来た)」

そうしてやってきたのは、隠岐の狙撃ではなく王子隊だった。

目の前で、俺に全神経を向けていたであろう生駒さんが一瞬俺の後ろに向けられたのが分かった。

その瞬間、俺も生駒さんも仕掛ける。

俺はメインをスコープオン、サブでグラスホッパーを起動し踏み込もうとする。

しかし、先に王子隊がやってきたタイミングを知れた生駒さんの方が俺よりも早く行動を起こしていた。

左下に構えていた弧月を右上に——生駒旋空を放つ。

「っ！」

相変わらずの鋭い太刀筋だが、俺はサイドエフェクトの恩恵と先ほど違って近いために生駒さんの手元が分かることあって、最小限の動きで回避する。

そして、生駒さんがわざわざ生駒旋空を放った理由、それは後方の王子隊への攻撃の結果というところ。

「(流石に予測してたか)」

回避と同時に、横目に後方を確認すると王子隊全員が無事回避に成功していた。

生駒さんが俺を無視して王子隊狙いだっただのは驚きだが、それが釣りである可能性、狙撃を警戒する。

だが、狙撃の気配は特にない。

ならば、目の前の敵を落とすことに集中だ。

「っ！」

生駒旋空を放った生駒さんは、両手で振り切った弧月から左手だけ離すとすぐさま太刀を返し、右手で握った弧月を先程の剣筋をなぞるように打ち下ろす。

流石の太刀捌きだけあって、生駒旋空と王子隊の動向に注意がいつてしまった俺の攻撃よりも、この二撃目の方が速い。

「(だが、これをいなせば……)」

そう思った俺は、体内で枝フランチブレイド刃を用いて左手と右膝にスコープオンを発現。

左手で受けて、グラスホッパーを用いて右膝で刺そうと試みる。

が——

「？」

左手で受けた弧月は、あまりにも手応えがなさすぎた。

受けるのをミスることはあり得ない。弧月は伸びることであっても短くなることなど聞いたことない。その間合いは理解している。

この違和感に反射、サイドエフェクトが反応。

何故、と。

その理由は簡潔だった。

「ッ!？」

時間の進みが緩やかになった視界に映る生駒さんの弧月。

それが、俺のスコールピオンと当たると同時にいとも容易く彼の手から離れていた。

あたかも、元々離すつもりであったかのような。

そう考えついた瞬間、次に俺に襲ったのは衝撃だった。

「がつー!」

なんてことない、生駒さんは振り切ろうとした弧月を手放すと右腕をそのまま左へ、そうして右肩を俺に差し出して、踏み込みの勢いで体当たりをかましてきたのだ。

俺が彼に向かおうとする勢いに対抗するように放たれたその衝撃は、先ほど受けたものと良く似ていた。

「次は、外さへんで!」

体当たりの最中に済ませたのか、先ほど宙に離された弧月は消え、今は彼の腰の鞆に再現出していた。

そして、その弧月に右手を添える。

——居合。体当たりの後の姿勢は、あまりにも完璧なものであった。

「旋空……!」

居合からの生駒旋空。それは先程のようなものよりも鋭く、そして疾いのだろう。それこそ、先のような俺のグラスホッパーでの回避では間に合わないぐらいに。

次は外さないために、先と似た展開で、先よりも完璧な生駒旋空を放とうとしたのだろう。

「弧月ッ!」

力強く言い放たれた彼の言葉。

そこには必殺の意味合いを大きく纏い、これが決着であると示していた。

先ほどの上段ではなく、居合からの生駒旋空。

ああ——だと、思ったよ。

「な」

いつものように放とうとした生駒旋空。

鞘の内側を滑らすように、最速で最効率に最適度に力を乗せて放つはずだった生駒さんは、弧月の柄の頭を何かにぶつけたかのような感触を得たと思うと、自身の体が軸足を中心にその場で強く回転した。

急に回り出した視界と、振り抜こうとした弧月が振り抜けなかったことに頭が追いつかない。

分かったことと言えば。

「俺の勝ちだ」

これは樹神の仕業であるということだった。

生駒は、そんな樹神の声を聞いたと思うと、スコープオンで胴を真つ二つにされ、緊急脱出した。

◆？

◆？

◆？

生駒さんの動きを予測したわけではない。

そも予測できていたなら、シオルダータックルを受けてはいない。

それでも、俺がああ瞬間に反応できたのは、これまで放たれた生駒旋空に速度の違い、つまりは練度に差が見受けられたからだ。

最初の居合から放たれた生駒旋空は、通常の状態からギリギリもギリギリ、何とか避けられた。

しかし、次の上段からの生駒旋空は、崩れた体勢からの無理やりな復帰だったのに、それでも四肢の一部を取られた程度に済んだ。

俺はあの時死んだ、と判断していた。

最初の速度のまま振られれば間違いないと両断される、と。

だが、それでも俺は生き残った。

この時点で違和感が生まれる。

違和感に合わせて、生駒さんは居合の達人であるという情報から俺が導き出したのは、居合からの生駒旋空が彼にとつての最高速かつ最高威力であるという結論だった。

あとは普通に考えるままだ。

最大限崩した体勢から、上段からの生駒旋空を回避されたのであれば、次は万全の生駒旋空を放とうとするだろう。

そこを利用し、彼の柄の頭にすぐそばにグラスホッパーを展開させてもらった。

思い通り、弧月を振り抜こうとした彼はグラスホッパーに反発し体勢を大きく崩す結果となったのだ。

「(さあ、次だ!)」

彼の体当たりで後退してしまった身体をすぐさまグラスホッパーで加速して生駒を両断した後、すぐさま身を翻して王子隊を見据える。

三人固まって登場した彼らの反応は様々だった。

樗尾は驚きと緊張に表情を強張らせ、蔵内はわずかに冷や汗を、王子は俺に視線を向けながら微笑を浮かべている。

—— 先手、必勝!

「誘導弾」

失った腕の先に、大きなトリオンキューブが展開。

キンツ、と音を立てて分割されたその数は四分割の計六十四。俺がしっかりと弾速・威力・射程や誘導率の強弱、そして撃ち出す方角を設定できる限界数だ。

「は、誘導弾!」

俺に少し遅れて、王子隊各員はトリオンキューブを発現させる。

見た限り全員、俺よりもトリオンキューブが小さい。おそらく彼ら全員合わせて俺のと並ぶかどうかぐらいだ。

しかし、発射のタイミングは俺よりも少し速かった。

何故、と思いついでエフェクトが発動したが、見れば納得。全員の誘導弾は散らばる様子もなく、まとまるようにして俺に突っ込んできた。

おそらくグラスホッパーでの回避を想定して、誘導率を最大にしたのだろう。

「(舐めるなよ)」

少し遅れて撃ち出した後、俺は起動していたグラスホッパーを王子隊の方向とは別方向に向けて展開。彼らの誘導弾を回避しようと試みる。

王子隊全員に等しく弾数を当てるため、三方向に分かれて弧を描き向かう俺の誘導弾と彼らの直進してくる誘導弾が当たるはずもなく、何事もなく両弾が各々に襲いかかる。

全力でグラスホッパーで跳躍。

すると、誘導率が強くとも完全に終えず、俺の背後に誘導弾が抜けていく。

だが、それでも強誘導率で設定されたそれらは再度弧を描き俺を追おうとしてくる。

「関係ない」

その光景を一瞥した俺は、そう吐き捨てて王子隊へ視線を向ける。彼らは各々が誘導弾をシールドを展開しながら回避に回っているが、回避先が一緒にならない様に散っている様子。

下手にひとまとまりになって、俺にまとめて殺されるのを警戒しているのが分かる。

俺が一塊になって防御を固めるより、散つてでも多方向から先読みの攻撃で動きを潰される方が嫌がると理解しているようだ。

「(良く俺のことを分かっているが……それならそれ用の動きをさせてもらう)」

俺の誘導弾に対してフルシールドしながら少しでもシールドで受ける量を減らそうとする三人は、誰もが余裕を持っていない。

つまりは、今彼らはお互いのフォロワーが簡単には行えない状態。

もちろん、その状態は長くは続かないが、それでも俺の速度なら一人を落とすには十分だ。

「(とりあえず一人はもらおうぞ!)」

二枚目のグラスホッパーを展開し、俺が向かうのは彼らの中で一番



弱い奴、櫛尾——ではなく倉内。

もちろん、本来なら弱い奴から削るのが一番だが、すでに俺一人で彼ら一部隊を相手にするなら、まず厄介な奴から。また、今この場面で俺がされるのは仕留めると決めた相手に粘られて他からのフオローが出来る様になることであるため、近距離での対応がないであろう倉内が白羽の矢に立ったわけだ。

そうして標的とした蔵内。

彼は二人と少し離れて一軒家の屋根上が上がっていた。

俺は二度目の全力跳躍で彼に向かうと、俺の後ろを追っていた誘導弾は遠ざかり、蔵内にはあと1秒もあればスコープオンが当たる間合いとなる。

だが、そのスコープオンが蔵内に刺さることはなかった。

「なに?」

「ぐッ!」

俺が蔵内へ一直線に向かう横から、一人の男が突貫。

見ると、それは俺が先ほどこの中では最弱と判断した櫛尾であった。

彼はあるうことか俺の全力跳躍に合わせて、いや、合わせられてはおらず勢い余って俺の先に出る結果となったわけだが、それでも俺の攻撃に間に合って見せた。

彼もグラスホッパーを使って割り込んできたのだろう、というのは分かる。

しかし、余裕がない中で俺の行動に反応出来たというのは納得がいかない。

聞いていた情報と今の彼の差異に違和感が生まれ、ふと王子を見た。

変わらず、人を食うような笑みを浮かべていた。

「(このやろう)」

瞬間的に判断した。

彼が俺の行動を先読みし、既に櫛尾へ対応するように言いつけていたのだ。

「上等だ」

そう小さく呟き、俺と相対した榎尾の心臓を一突き。無理やり介入してきただけあって体勢が悪く、呆気なく取ることが出来た。出来たわけだが。

「ナイスだよ、カシオ」

榎尾は自身がやられることよりも、俺に組み付くことを優先していた。弧月をわざと手放して両手で俺の服を掴み、グラスホッパーによる機動力を削ろうと苦心する。

『トリオン供給——』

そんなシステム音が響くと同時、左からは王子が此方に駆け出してスコープオンと弧月の二刀流、前の蔵内は両手とも分割のないトリオンキューブを射出準備。そして、背後からは未だに誘導弾郡が迫ってきていた。

「(榎尾の緊急脱出より、攻撃が入る方が速いな……)」

王子や蔵内の攻撃は勿論、最初に放った誘導弾郡すらも射程の限界に達しず、まだ俺へ向かおうとしている辺り、王子隊は今この状況を想定していたこととなる。

つまりは、回避・離脱を許さない多方向からの攻撃。

ここまで王子は詰めていた。

『部隊全員で詰めて、その上での一人犠牲が前提でようやく、けどね』

樹神だけにならず、榎尾にしろ、蔵内にしろ、今こうして王子の想定通りになったことに驚いている中、王子は苦笑い気味にそう溢すが

「けど、捕まえたよ」

普段の笑みで、樹神にそう告げた。

「(くそ……ッ!)」

榎尾にまとりつかわれながら、体勢を無理やり王子の方へ向ける。

メインをスコープオン、サブをシールド。

シールドに関してはなるべく最低限の広げ方で済むように気を使

いながら、王子の方向以外からの攻撃を防ぐべく展開。

工面してはいるが、集中シールドどころか普段のシールドよりも広く展開はしてしまっているため強度に不安が残る。だが、そもそもの俺のトリオン量と、蔵内の両トリガーがアステロイドではないこと、誘導弾<sup>ハウンド</sup>は数は多くも射程重視であるため、威力がそこまで見込まれないことを望めば防げないことはないはずだ。

サブを攻撃に回さないが、それでもスコープピオン一本で王子を相手取るとは出来る。その後には櫂尾が緊急脱出し、弾トリガーを防ぎ終えればサブも攻撃に回し、逆に取ることは出来るはず。

「来い！」

——ここが正念場と判断。

弧月とスコープピオンの二刀を独特に構え、向かってくる王子。

俺はと言うと、手数をカバーするため、体内で枝<sup>フランチブレード</sup> 刃で二刀を防ぐために腕、そしてトリオン供給機関と首回りにいつでも現出できるように準備。

そうして、二人の刃が交わろうとした瞬間だった。

「——失礼」

火薬が弾け、重弾が発射されたような激音が俺の背後から響き、刹那、鋭い銃閃が俺の広げたシールドを突き破り、俺のトリオン供給器官ごと上半身を吹き飛ばした。

「がッ!？」

思わずそう言葉を吐き出しつつ、視線を王子から背後に移す。

二枚抜きで同じく狙われた王子は何故か回避に成功しており、右腕を吹き飛ばされるだけに済んでいた。

そして、問題の背後。

そこには、視線の先十五メートルほどの近場の屋根の上で、明らかに人に向けるべきでないであろうゴツいライフルを構えた隠岐の姿があった。

「流石に、ただやられっぱなしってわけにはいきませんので」

俺の視線に気づいた彼は、自身のサンバイザーの唾に触れながら、困ったように笑みを浮かべてそう呟いた。

もちろん、隠岐の存在を忘れていたわけではない。

だが、それでも彼の姿を確認したと同時に胸を駆け巡ったのは馬鹿な、という思いだった。

まず、俺の足を削った一撃目を放った方向とは明らかに真逆に位置している点。グラスホッパーでの移動といえど、ここまで位置を変え、尚且つここまで近づいてるとは思わなかった。

そして、弾の威力。確実に一撃目よりも威力が何倍何十倍と上がっており、背後ならば一枚の広げたシールドで防ごうと考えていたことが馬鹿らしくなるぐらいの破壊力を有していた。

「(狙撃銃にも、種類があるのか……)」

撃ち抜かれた後、発動したサイドエフェクトで拡張した時間の中。俺はそんなことを考えながら、ある程度考えがまとまると、ゆっくりと両目を閉じて。

『戦闘体活動限界。緊急脱出』

ベイルアウト

トリオン体が弾け、初の敗北を喫するのだった。

◆？

◆？

◆？

三チーム対抗戦第二回戦。

そこで俺がやられた後は、結局残った王子と蔵内が隠岐を取って、終了した。

隠岐にやられ、那須隊の隊室の簡易ベッドに放り出された俺は、少しの間起き上がり思わず思考にふけていた。

短い手数ながら、王子に動きを完全に読まれていたことに、俺は僅かながらショックを受ける。

トリオン兵ではない多人数を真正面に捉えた上での戦闘は、俺にとって経験の薄い部分。

ランク戦をやっているも思ったが、経験が薄い所となると相手の厚みに屈するところに出てくる。

二宮さんにも以前、動きが単純だと言われたこともある。

単純な戦闘であれば、よっぽどのことがなければ負けることはないと思うが、読み合いの部分では他よりも一歩劣る。

「それ以外にも、トリガーの種類についても知識が浅いな……自分に  
は関係ないものと考えすぎてた」

そう呟きつつ、俺はゆっくりと起き上がった。

とりあえず、二回戦目が終わった以上他の隊の部屋、加えて女子だけの部屋に男の俺が居座るわけにはいかないので、軽くお礼を言って退室しようかと思う。

まあ、もし彼女たちが許せば少しトリガーのことも聞こうかなと考えながら、俺はベツトルームを出た。

「……あ、樹神先輩。お疲れ様でした」

「那須さん、おつかれ」

俺を迎えたのは那須。

笑みを浮かべてはいるが、どこか顔色が悪い彼女に気づいた俺は退室の挨拶よりも心配の言葉が先に出た。

「どうした？ 顔色悪いぞ？」

「ッ！ い、いえ、大丈夫です！」

俺の指摘に明らかに過剰に反応した那須。両手を握り、それらを肩あたりまで持ち上げて元気アピールするのだが、正直あんまり説得力はない。すると、そんな俺の様子に気付き、那須の後ろで心配そうに見てた熊谷が口を開いた。

「すみません、樹神先輩。玲、生まれつき身体が弱くて……思いの外、疲れちゃったみたいなんです」

「そうだったのか……負担をかけて、すまなかつた」

せっかくのチーム戦で、那須隊に合わせるのではなく孤立して動いてしまった結果、那須隊がそのまま実力に差がある上位陣と対峙することとなってしまった今回の戦い。

生駒隊を抑えることが出来たわけだが、それでも正面衝突した那須

隊、特に一人で抑えた那須の負担は大きかっただろう。

そう思つての、一人で動いてしまったことの謝罪だったわけだが、何故か、那須の表情に悲痛なものが走った。

「わ、私は、大丈夫です。こちらこそ、すみませんでした。大したことが何も……何も、出来なかつたです」

強がるような笑みを浮かべながら、最後は噛み締めるようにそう言つた那須は、暫くして不意に俺から視線を外すと、廊下へ出る扉に目を向けた。

「樹神先輩、今回共闘していただいて、ありがとうございます。もしこの後急ぎの用事があるのであれば、構わず御退出くださいね」  
「……こちらこそ、ありがとうございます。それじゃあ、遠慮なく、退出させてもらうよ」

俺は少し間をあけてから小さく頷くと、那須の後ろにいる熊谷と日浦に軽く挨拶して扉に向かう。

本当は、彼女たちが良ければ軽く狙撃銃のトリガーとかについて聞こうかな、と思つていた。

けれど、那須の様子から、それはしないでおこうと判断した。

邪魔だから俺に早く出て行つて欲しい、という雰囲気を感じ取つたわけではない。

むしろ、歓迎ではあつたのだろう。

ただ、今の那須のことを考えると、俺はいない方がいいだろう、と。熊谷と日浦の両名の様子からも、それは明らかだった。

心配は残るが、次の対戦がある。

俺は大きく息を吐いて、そういつたものを頭の隅に寄せると、次に向けて気持ちを切り替えるのであつた。

シユーという空気が抜ける音を立てながら、扉が廊下への出入り口を塞ぐ。

次に向けての準備があるであろう樹神を見送つた熊谷と日浦は、すぐさま那須に視線を戻す。

そうして、なんて声を掛けようかと口を開けては閉じてを繰り返

し、やがてその答えに至らなかつた熊谷が、小さく遠慮気味に那須の名前を読んだ。

「玲……」

二人に背を向けてる那須が、どんな顔をしているかは分からない。だが、それでも明るいものではないということをして二人は確信していた。

「……くまちゃん、茜ちゃん」

そして、那須自身も、どう言葉を紡げばいいのか分からなかつた。今自分の胸の中に抱えるモヤモヤを、どのように伝えれば、吐き出せばいいのか分からないのだ。

それでも、ただ、一言。

「……悔しいね」

短い言葉だったが、二人にはその声が震えていたことに気付いた。憧れの相手が来る、同じ味方として共に戦える。

対戦前はそのことである意味一杯一杯で、楽しみにしていたはずだった。憧れの人に少しでも良い印象が残るよう、アピールしようという気持ちもあつたのかもしれない。

だが、舞い上がったその気持ちを、先の戦闘で完膚なきまで叩きのめされ、最初から最後まで樹神に頼つたような結果となつた。

樹神が気にしていないのは、分かっている。

転送位置が悪かつた、というのもその通りだろう。

ただ、それでも自分が情けなかつた

那須だけでなく、結果的に樹神に頼りきりになり、王子隊相手に何も出来ずにやられてしまった熊谷も日浦も、那須の背中から視線を落とす。

せつかくのチーム戦。

このままで、終われない。

言葉はなくとも、三人の気持ちは同じだった。

◆?

◆?

◆?

「……はい。分かりました。では、失礼します」

チーム戦第二回戦終了してから少しばかり経過した頃、ボーダー内の、ある一室前の廊下で、携帯片手に誰かと通話する人物がいた。

彼は通信先の人物といくつか言葉を交わしたあと、神妙な様子で電話を切る。

その後、自身の携帯に視線を落として軽く操作し、一段落したように携帯の電源を落とすと、緊張の糸をほぐすかのように小さくため息を吐こうとした時だ。

「東さん！」

突然もたれかかっていた壁のすぐ横の扉が開き、そこから一人の少年が飛び出して来た。

それに思わずビクツと驚いた男性、東春秋は手に持っていた携帯を落としそうになるが、なんとか持ち堪えると、飛び出してから少年に視線を向ける。

「こ、小荒井」

「あ、すみません……」

突然の登場と大きな声に東さんが驚いたと理解した少年、小荒井登は声を落として謝罪を口にする。

すると、彼の後ろから新しく一人の少年が現れた。

「小荒井、少し落ち着いてから行動しろよ。東さんに迷惑かかっちゃうだろ」

仕方なさそうな表情を浮かべる黒髪の少年、奥寺常幸。

彼はいつも言ってるだろと言いたげに視線を小荒井に向けると、小荒井は罰が悪そうに奥寺から顔を背ける。

すると、その様子を見かねた東が笑みを浮かべながら口を開いた。

「俺は大丈夫だったから気にしなくていいぞ。それより、何かあったんじゃないのか？」

「あ、そうだ！」

東の言葉で用件を思い出した小荒井は、再度東に視線を戻して口を開いた。

「次、俺たちの番になりました！ 相手は鈴鳴第一と、香取隊の二人と



樹神先輩の合同チームです！」

「……そうか、分かった」

小荒井の報告に、東は少しばかり遅れて頷く。

「作戦は考えてるか？」

「あゝ……それはですね」

「候補はいくつか立ててるんですが、準備期間が短いのでどれも確実性に欠けている状態です。なので、東さんの知恵を借り受けたいのですが……」

「そうか、分かった。じゃあ、隊室で詰めようか。人見は？」

「待機して、今はもう東さん待ちですよ」

「それはすまなかった。急いで戻るとしよう」

「うつつ」

「はい」

二人は東の提案に元気良く返事をする、少しばかり駆け足で戻っていく。

東はその二人に遅れて続くと、ふと携帯に視線を向けた。

彼が思い出すのは、先ほど通話先の相手のことだ。

「言われなくても、なるべく樹神くんに経験を積ませるようにしますよ、『教授』」

そう呟いて、東は携帯電話を自身のポケットへしまうのであった。